

IV 地蔵と稲荷

(1) 地蔵

1 いづみのまわり地蔵さん (1) 2 松っこごれ地蔵 (4) 3 清水の伝兵衛地蔵さん (7)

よもやまばなしの主人公は、実に信仰深い人達でした。中世の項で「阿弥陀様」の板碑を紹介しましたが、江戸時代には「お地蔵様」が圧倒的に増えてきます。「いづみのまわり地蔵さん」は狛江市の竜泉寺の延命地蔵が村々を回ってくる話です。「松っこごれ地蔵」は高木の志木街道の道端にあって「イボ取り」に御利益があり、お礼に松っぼっくりが供えられました。清水の伝兵衛地蔵さんは行方不明の子返しに御利益があり、子育て地蔵として親しまれました。

東大和市内では、村人の一般的な墓に祀られた地蔵尊(391基)を除いて、58体の地蔵尊について調査がされています。(『東大和市生活文化財調査概要報告書』)

清水13、狭山11、高木7、奈良橋12、蔵敷3、芋窪12体 計58体

造立の目的

光明真言供養2、念仏供養4、寒念仏供養1、百堂念仏供養1、百万遍供養1、日待供養1、餓鬼供養2、秩父西国坂東百ヶ所供養2、逆修供養1、供養仏12、先祖代々諸霊供養5、幼児供養5、無縁法界・法界諸霊供養11、その他10体

造立年

最古・元禄6年(1693)、最新・明治42年(1909)

1600年代2、1700年代20、1800年代16、1900年代2、年代不詳18体

姿

右手錫杖、左手宝珠	35体	立ち姿	51体
両手合掌	13体	座像	6体
他	10体	その他	1体

①松っこごれ地蔵

2 松っこごれ地蔵 (4)

『昔、このあたりが一面の原だった頃から、「いぼ地蔵」といわれ村の人達の信仰を集めていました。このお地蔵さんをお願いするとがんこないぼもいつの間にかコロリと取れてしまうからなのです。』

いぼを取ってもらった人は、お礼に山から“松っこごれ”(松かさ)を取ってきて木綿の糸でつなぎ、首や手にかけてあげました。いつも松っこごれでかざりたてられているので、いつしか「松っこごれ地蔵」といわれるようになり親しまれていました。』

今は場所を高木神社・明楽寺墓地に移されていますが、松っこごれはちゃんと肩にかけられています。造立の年号は不詳です。背面に

毎日晨朝入諸定
入諸地獄令離苦
無仏世界度衆生
今世後世能引導



と、延命地蔵菩薩經の偈『我毎日晨朝入諸定。入諸地獄。 令離苦。無佛世界。度衆生。今世後世。能引導。』が彫られています。延命地蔵尊であることがわかります。（偈＝仏を称える言葉・詩形に整える）

②伝兵衛地蔵

3 清水の伝兵衛地蔵さん（7）

『昔、清水村に代々伝兵衛を名乗る旧家がありました。分家のせがれが行方不明になり八方手をつくして尋ねましたが見つかりません。心配した本家の伝兵衛さんはお地蔵さんを建てて祈願したところ、まもなく無事に分家のせがれは帰ってきました。喜んだ伝兵衛さんはお地蔵さんを自分の屋敷に移して供養をしました。』

台座宝暦 4 年（1754）、寛政 13 年（1801）、宝暦 13 年（1763）、享保 11 年（1726）、明和（1764～1771）の年号が彫られています。造立の直接の理由は行方不明の子返しとされます。丁度、享保から明和にかけては天災が激しく飢饉が続きました。この背景があるのかもしれませんが、お地蔵様は「地蔵和賛」が、



『これはこの世のことならず 死出の山路の裾野なる さいの河原の物語 聞くにつけても哀れなり 二つや三つや四つ五つ 十にも足らぬおさなごが 父恋し母恋し 恋し恋しと泣く声はこの世の声とは事変わり 悲しさ骨身を通すなり
かのみどりごの所作として 河原の石をとり集め これにて回向の塔を組む
一重組んでは父のため 二重組んでは母のため 三重組んではふるさとの 兄弟我身と回向して
昼は独りで遊べども 日も入り相いのその頃は 地獄の鬼が現れて
やれ汝らは何をする 娑婆に残りし父母は 追善供養の勤めなく・・・』

とするとところから、追善供養に建てられることがよくあります。

③いづみのまわり地蔵さん

1 いづみのまわり地蔵さん（1）

いづみのまわり地蔵さんは、カンカンカンカンとさえた鉦の音を秋空に響き渡らせながら遠く狛江からいくつもの村を通してやってきました。

『・・・狛江市和泉にある泉竜寺の延命子安地蔵さんです。この地蔵さんは、子育て子授けに大層ご利益があるというので、江戸の昔から近郷近在の人々の信仰を集めていました。』

十二代将軍の時代には徳川様の病弱なお子のために、地蔵さんがお駕籠に乗って登城したという言い伝えがあるくらいですから、それは大変なものでした。地蔵さんは毎月二十五日に泉竜寺を出立し、民家に一泊しては次々と町や村をまわり、翌月の二十二日に巡行を終えて、翌二十三日の午後に寺へ帰ってきます。』

わざわざ遠くからお地蔵様を迎える行事は、何とも微笑まし



いです。5才までは育つかどうか分からないので、人口統計に加えなかったと云われるくらい、幼児期の死亡率が高かった頃、このお地蔵様は近隣から大切にされたようです。もちろんお日待ちの楽しみも待っていました。現在は泉竜寺の本堂で厨子の中に祀られています。

(2) 稲荷

4 川端稲荷大明神 (9) 5 西山の夜泣きさま (11) 6 笠森稲荷 (13)
34 ほうそうの話 (76)

お稲荷様は東大和市内の神社には合祀されたり、末社として境内に祀られています。また、市内を歩くと、多くの個人のお宅で目に付きます。屋敷神として祀られていて、江戸時代から現在まで熱く支持されています。

東大和市内の調査では、233の稲荷社があります。ただし、勧請年月日は不詳とするものが7%で、勧請は「江戸中期以後と思われる」(東大和市史資料編8 p147)としています。武蔵村山市の調査では、江戸時代に祀られた稲荷で、勧請された時期が記載されているのは19世紀以前には遡らないとされています。生産力が高まり、農業の自立経営が可能となって、村としてのまとまりが盛り上がった頃になります。

お稲荷様は、殖産興業、開運招福、火防の守護神^{ひぶせ}として、崇敬されています。語源を辿ってみると諸説があります。

- ・「イナリ」は「イネナリ(稲成、稲生り)」で、稲が育ちを願った
 - ・「イネカリ(稲刈)」の「刈」が「荷」に誤られた
 - ・「イネニ(稲荷)」が「イナリ」に転訛した
- などです。

日常的に「稲荷」と呼ぶ神の名は「宇迦之御魂神」^{うかのみたまのかみ}で、「ウカ」は「貴い食物」^{ひぶせ}、五穀をはじめとする食物を司る神とされます。それが拡大して、殖産興業、開運招福、火防の守護神として崇敬されたようです。

よもやまばなし「ほうそうの話」は、東大和市駅付近にあった「瘡守稲荷」^{かさもりいなり}への祈願を語ります。同じ音ですが、高木にある「笠森稲荷」は病気回復を御利益としています。「西山の夜泣きさま」は子供の夜泣きに霊験があります。屋敷神として祀られる場合は、多くが鬼門除けと豊作祈願です。こうなると、東大和市域の村々の「お稲荷様」は実に広範囲な御利益を約束する神として祀られていることがわかります。

①瘡守稲荷

6 笠森稲荷 (13) 34 ほうそうの話 (76)

『向う横町のおいなりさんへ
一銭あげてざっとおがんで
おせんの茶屋へ
腰をかけたら渋茶を出した
渋茶よこよこ横目でみたら
土のだんごか米のだんごか
おだんごだんご

と唄われたのは、絵師鈴木春信の描いた美人のおせんで有名な谷中の笠森稲荷ですが、当市内にもこれと同じ名のお稲荷さんが二つあります。一



つは高木の宮鍋佐一郎さん宅にある笠森稲荷で、もう一つは字は異なりますが、東大和市駅の高架のそばにある瘡守稲荷です。天保五年に発行の御岳詣りの道中記である『御岳管笠』にここの稲荷が描かれています。芋窪から出てこのあたりで酒屋を営んでいたという乙幡氏の勧請された稲荷でしょうか、明治十年丑二月初午・施主乙幡徳左衛門と刻まれています。』

江戸時代から厚く信仰されていたのが瘡守稲荷でした。青梅橋の袂で多くの旅人を見守り、地元では疱瘡・天然痘に御利益を求めてお参りが続きました。現在は元の場合から移転して、西武鉄道の高架下にあります。



現在は高架の南側に祀られています。

②笠森稲荷

6 笠森稲荷 (13)

『・・・高木の笠森稲荷は前述の宮鍋さんの祖父にあたる方が祀られたものです。宮鍋さんの祖父は前述の瘡守稲荷のそばの青梅橋のたもとで馬宿をしていましたが、病にかかり瘡守稲荷にお参りをしたところ治ったので、住いのある高木にも同じお稲荷さんを祀ろうと、天保七年に伏見稲荷の別当寺である愛染寺から勧請してきたのだそうです。』

こちらの方も大変に靈驗あらたかでどんな病気でもここを訪れて「カサで悩んでいます」と拝みますと必ず治ってしまうということです。これを伝え聞いて、かなり遠くからもこのお稲荷さんにお参りに来る人があったそうです。

祈願する時には、唄の文句のとおりまず土のだんごを五つ供えます。そして願がかなうと今度は米のだんごをこしらえてお礼に供えるのです。病気が治ったのを喜んでお餅をたくさん供えていかれた稲城の方もあります。』



今も清戸街道に面して同じ場所にあります。

③陣屋稲荷

川端稲荷大明神は奈良橋村の石川地頭と陣屋に関係がある稲荷様です。東大和市内にはもう一つ、芋窪村の酒井地頭と陣屋に関する稲荷様があります。



かつての姿を留めるかのように、祀られています。

V 講と日待ち

8 塩釜講 (18) 9 戸隠講 (20) 12 大山まいり (28) 23 おっぴらき (49)
53 ぶんさんのはなし (116) 24 ほっぼきの話 (52) 34 ほうそうの話 (76)
60 清水囃子のけいこ (133) 98 力石 (213)

東大和市域の村々の江戸時代のよもやま話の主人公達は厳しい状況の中で、生活をエンジョイする方法を豊富に編み出していました。「講」であり、「日待ち」であり、囃子、力石など様々です。

「講」は『神仏を祭り、または参詣する同行者で組織する団体（広辞苑）』とされるように、村人達が集まって、共通する神を祀り、祈願しました。「日待ち」は何かと理由がありますが、村人達が集まって飲食をして楽しみました。「講」はその対象によって様々に区別されますが、東大和市史資料編9「道と地名と人の暮らし」の区別を参考に主なものをまとめます。

(1) 参拝講

村人達にとって五穀豊穡は切実な願いでした。そのご利益を持つ神々は遠くにありました。経済的に厳しく、遠隔地への旅はごく限られて、裕福者しか許されませんでした。そのような中で神祀りと併せて、一種の賑わいと開放感と無礼講的な要素も加わって、村人の賛同を得たのでしょうか、多くの講が東大和市域の村々にありました。

「講中」と称して仲間が集まり、お金を出し合って積み立て、くじ引きで当選した人を選びます。当選者は代表して遠くの神々に代参して「札」を受け、帰村して講中に配布する。その際に、飲食を共にして楽しむ。代参は籤にあった者が順番で、講中全員にいつかはそのチャンスがある。として、人気がありました。

①伊勢講

23 おっぴらき (49)

よもやまばなし「おっぴらき」に出てくるのが伊勢参りです。講中で積み立てをして、代表が伊勢までお参りに行きました。「おっぴらき」では旅からの帰村後の行事が語られます。東大和市域の村では、宝暦4年(1754)までさかのぼれますが、比較的早くからこの講は結成されていたようです。

伊勢参りは日本全国で沸き立ったこともあって、東大和市域の村々でも豪華な旅が行われました。いくつかの道中記が残されていますが、そこに記される旅の内容は当時の状況を余すところなく伝えて、読み応えがあります。東大和市史資料編9では

『今までの所、市内の古文書で最も古い参宮の記録は、狭山の杉本家文書「道中諸事之覚帳」である。宝暦四年(一七五四)二月十六日から四月十二日まで、およそ八十六日間の旅で、同行は中藤村二人、正楽寺村、萩之尾が一人ずつ、そして著者の石井勘左衛門ほか一人が後ヶ谷村の杉本在住で都合六人であった。』(p124)



芋窪豊鹿島神社伊勢講手水鉢
文化4年(1807)芋窪村

また、積み立てや代参については

『蔵敷の内野家文書『里正日誌』では、文政十年（一八二七）の「内宮太々神楽長栄講連衆帳」が初出である。内容は小嶋勘兵衛が発願主となり、内宮の御師太郎館太夫を頼んで参宮をし、太々神楽を奏上するための講中を組む呼掛けである。

予算のあらましと講金の積立法、金額、利子、日待などについて細かく定め、一ヶ村一人の講親を決めて運営し三年目正月に参宮を行うことが記されている。』（p 124）

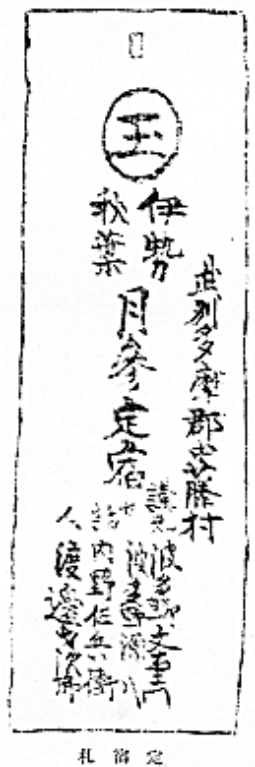
伊勢参りをするときの状況は次のように伝えられます。

『伊勢太々講の目的はその名称のとおり参宮と太々神楽の奏上であるが、東海道をそれて秋葉山や鳳来寺、高野山、熊野三山、四国の金比羅宮、安芸の宮嶋などの暦訪を兼ねた観光旅行の一面もあった。

長期の準備の末の出発で、まず長路の旅の安全を産土神に祈願し、お守札を懷中に村境まで不参の人や家族の見送りを受ける。留守宅では日日陰膳を供え、周囲からの留守見舞もあるという村を挙げての行事であった。無事帰村の晩には大層な儀別のお返しに走り廻ることは当然で、時には記念行事として氏神への建碑や神楽の奉納が行われ、村中はもちろん周囲の人びとにも参宮達成の興奮を伝える華々しい行事となった。』（p 126）

とされるように、秋葉山や四国の金比羅宮の講がさらに組まれています。「狭山之栞」が武蔵村山市中藤村の例を詳細に記録しています。他の講の参考にもなりますので紹介します。

『・・・享和元年中（1801）、伊勢大神宮並びに秋葉山へ永代月参の講を設け、加入の者一人に対し一月分二十四文（永代は一分二朱）づつを集め、東海道は言うに及ばず、勢州は四日市より山田まで、秋葉山は掛川宿より戌亥宿に及び、さらに鳳来寺へ参り御油宿まで、渡船の場所は川間（川止め）の折りの用意に川の兩岸をはじめ、その他の定宿に看板を掛けさせ毎月代参二人宛てを（路用一人につき七貫五百文並びに菅笠、法被）、定宿帳を支給す）朔日に発足せしむるを例とせり。



帰路は京大阪より、もし木曾路へ向ふ者は信州善光寺へ廻り、中山道本庄宿まで残らず定宿札を掛け、万一途中にて病氣足痛にて路用不足の節は定宿にて立替させおき、次の月代参の者に託し支払いせしむる事とし、講金不足の場合は講元世話人にて滞りなく支給せり。・・・』

定宿札 「狭山之栞」 p 109

としています。伊勢講は、大正時代にも引き継がれ、その様子を東大和市史資料編9は

『大正期にもなれば列車を使い、人力車も登場して伊勢講の旅も大分近代化されてきた。当時を知る人の話によれば服装も内織の紬の揃い（羽織と着物）に角帯を締め、上にはラッコの毛皮の衿を付けたトンビ（二重廻し）を着込み、フェルトの中折帽子で足もとは駒下駄か畳付の草履という姿であった。持ち物は柳行李かバスケット、携行品は刺刀と手拭い、こうもり傘。腰に煙草入れを挟んでいた。』（p 126～127）と伝えています。

清水神社（清水）、八幡神社（奈良橋）、熊野神社（蔵敷）、豊鹿島神社（芋窪）に伊勢参拝記念灯籠や手水鉢が残されています。

②富士講

富士の仙元大菩薩を信仰し、「浅間様」とも呼ばれます。狭山丘陵周辺の村では、隣接の武蔵村山市仙元神社の富士講が現在も続き、所沢市荒幡の「どろっぷじ」（富士塚）が人気スポットでし

た。東大和市域ではあまり見られません。東大和市史資料編 9 では

『教義は仙元大菩薩「浅間様」を信仰し、呪術、祈薦を行う。修験道の影響が強く、独得の教義に対し、幕府が疑惑を抱き、弾圧がくり返される。『里正日誌』（内野家文書）によれば、嘉永五年（一八五二）ころに「富士講の儀、風俗二抱り候旨、関東取締出役により達」の厳しい町触が出ている。このため講は衰退し、明治維新、関東大震災等により一時苦境に陥いった。・・・

とあり、市域内にも、講が結成されていたと思われます。奈良橋の八幡神社に富士塚が築かれ、二基の石碑があります。

「浅間社 享和二年（一八〇二）十二月 別当 覚宝院」
「仙元大菩薩 天保二卯年（一八三一）願主 岸勘助」（p 122）

と刻まれています。別当 覚宝院は修験で八幡神社の神官（押本）の祖先です。願主 岸勘助は奈良橋村の名主で「川端稻荷」の管理者です。



八幡神社富士塚

③出羽三山講

山形県の羽黒山、月山、湯殿山の三山に対する信仰です。羽黒修験の聖地で平安時代から鎌倉時代にかけて盛んに信仰されたとされます。東大和市域内に講組織は残されていませんが、蔵敷に石碑が二基（天明2年、明治か?）あります。

一つは行者「玉泉坊」による天明2年（1782）の建立で、他は建立年月が不明ですが明治期のものと考えられています。碑を建てて参拝を記念するまでの活動には、それを支えた講組織があったものと考えられます。東大和市史資料編9では



左 蔵敷の庚申塚に「奉造建湯殿山大権現敬白」の湯殿山供養碑があります。天明2年（1782）蔵敷村を中心に28名の村人達が奉納したものです。扱い者が「行者 玉泉坊」と刻まれています。

右 月山 羽黒山 湯殿山供養塔と文字が刻まれています。
建立年月が不明ですが、明治期のものと考えられています。

『狭山の杉本家文書』にも先祖の記録中に出羽三山信仰を物語るものがある。中でも三十六代の勘左エ門定賢は文化年間湯殿山へ参拝し木像の不動尊一体を寄進したとあり深い信仰を持っていた。戒名の「薬寿院医徳定賢居士」も湯殿山から授かったという。

清水の名主五十嵐氏の『五十嵐氏考』には、生涯に三十六度の登拝を果し、記念に大日堂を建立した五十嵐重泰の記録がある。この大日堂は貯水池用地となるため三光院と共に南の原に移転した

が、現在はない。これらは個人の有力者の業跡であるが、行者の活動を支える講の組織の存在もうかがえる。』(p 129)

とあります。清水の大日如来像には、その台座に「大青山本山修験 持寶院」と刻まれていて、修験との関連を告げます。

④御嶽講（木曾）

木曾の御嶽山を信仰する集まりです。芋窪豊鹿島神宮の裏山に「御嶽山蔵王大権現」の石碑（元治2年・1865）が祀られていて、裏側に、

中藤村 原山組中、神明ヶ谷戸組中、入組中、谷組中、下組中
蔵敷講中

芋窪村 石川組中西、東組中、中組中、西組中
上宅部村

二本木村、野中村、菩提木村、山口などの世話人、講中、願主の名が連署されています。相当に大規模な組織化がされていたことが偲べます。

「御嶽山蔵王大権現」の石碑のあったところは、かつては、「おくまん山」「お熊野様」（芋窪の西谷ツ）と呼ばれたところで、熊野神社の社がありました。この神社の境内の日だまりで、蓑作りの人が仕事をしているのを見た古老がいます。



⑤御岳講（青梅）

73 藤兵衛さんと狼（163）

青梅の御岳神社は近いこともあり、また、「御師」制度の普及もあって、村人には厚く信仰されました。特に、神のお使いが狼と云うこともあって、守り神の「お犬様」として、家の入り口や畑に立ててお守りとししました。73 藤兵衛さんと狼（163）で藤兵衛さんが祀ったのはこのお守りでした。東大和市史資料編 9 では（p 97）

『武蔵御嶽神社創立は二千余年前と伝えられる。御嶽山蔵王大権現と称し修験の霊場ともなっていたが、神仏分離令により明治七年に御嶽神社となり、昭和になって武蔵御嶽神社と改められた。

「武蔵国大口真神武州御嶽」

「御嶽山火盗退除使者神狗」

「邪惡狐退除守護所」

「御嶽神社昆虫除神璽」

「五穀成就所」



現在も畑に祀られています。

これらは高木の尾崎清太郎家、尾崎立岳家に収められていた御嶽神社のお札の一部で、他にも御嶽神社で一月三日に行われる太占神事（鹿の肩の骨をやいて割れ工合で作物の吉凶を占う）によって今年の作柄を決定する「ツツガユ」という印刷物も配られる。神狗のお札は「お犬さま」といって畑に立てて作物の盗難よけにしたり、家の裏口などにも貼った。

これらからもわかるように中世以後は農耕の神として信仰を集め、御嶽の御師を中心とした御嶽

講が農家と密接な関係を持つようになった。即ち五穀豊饒、養蚕の無事、火盗除けなどを願って講中に参加した。武州御嶽講は特に東京都、埼玉県、神奈川県に多く、東京では旧北多摩、南多摩、西多摩の農村に多い。

当市にも古くから御嶽講はあった。芋窪、蔵敷、奈良橋、高木、狭山、清水の各村にそれぞれあった。現在も続いて行われている所もある。』
としています。

⑥戸隠講

9 戸隠講 (20)

かつて、東大和市域の村々には大粒の雹が降ることが多かったと伝えられます。雹は群馬県や長野県方面からやって来ると信じられていました。気流の関係からかと思えますが、丁度 5 月から 6 月にかけてで、作物に大きな被害を与えました。

雹は戸隠方面からのものが大きくて、被害も大きかったと云われます。その雹害除けに祀られたのが戸隠神社の手力雄命・九頭龍大神です。遠いので、講を構成しましたが、代参はせずに、戸隠神社から神官が地元まで来て、お祓いをしてお札を配布しました。

よもやまばなし「戸隠講」はその情景をよく描きます。豊鹿島神社の裏山に、大きな碑があります。中央に「九頭龍大神」と刻まれ、上に三社の文字、その中央に手力雄命たちからのおのみことと刻まれています。昭和 7 年（1932）の建立です。戸隠神社は、中社、宝光社、奥社、九頭龍社、日之御子社の五社で構成されています。その内の九頭龍社を祀ったものです。



東大和市史資料編 9 グラビア

戸隠の神は霜除けにも祀られました。養蚕の桑を霜害から守るため、桑ばかりではなく養蚕の無事・繁栄の祈禱もされました。

⑦榛名講

9 戸隠講 (20) 53 ぶんさんのはなし (116)

『昔は時折雹が降って農作物に大きな被害を受けましたので、雹災除けを願って毎年三月ごろ、群馬県の榛名神社へお詣りに行くのが恒例になっていました。例年三、四人の代参が講中の積立金の中から、交通費と若干の遊山費用をもらって出掛けました。松井田までは汽車で行き、ここから歩いて妙義山へ向います。お札を頂いたのち妙義山に一泊し、翌朝早く出発して榛名山に到着するのが夕方、榛名神社に参拝してお札を頂き、伊香保温泉に泊り翌日帰途につくというのが、一般的なコースでした。』

明治の終りごろの事です。代参のくじに当たったぶんさんは、路銀を節約して生活費にあてようと思いついたのでした。ぶんさんは一人で、汽車にも乗らず榛名までの三十里(一二〇キロメートル)もの遠い道程を歩いて行くことにしました。』

こうして「ぶんさん」は出かけますが、思うようには行きませんでした。気象の関係でしょうか、東大和市域一帯は貯水池のできる前は雹の被害が多かったとされます。作物の雹や嵐による被害を除くのは、村人達にとって共通する願いでした。そのため、東大和市域内の全部の村々で榛名講が結成され、代参や日待ちが行われました。東大和市史資料編 9 では

『市全域にそれぞれ榛名講が組織され、毎年三月末から四月に代参が参拝した。前年のお日待ちの席で籤に当たった代参は神社へ参り坊入りの後、村中のお札を受けて来て帰村後のお日待ちで全員に配るのである。春の行事として男衆の楽しみのひとつであったが、盛んだった講も戦後の生活の変化に伴ない消滅の運命をたどることになってしまった。』(p 94)

と記しています。

⑧大山講

12 大山まいり (28)

神奈川県伊勢原市の大山阿夫利神社にお参りする講です。別名「雨降り神社」と呼ばれるように、日照り調整と雨乞い、豊作を願う講です。よもやまばなし「大山まいり」は、男の子が15才になるとお参りする習慣が東大和市にあったことを伝えます。武蔵村山市にも同じような伝承があります。



割合に近いことから、八王子を抜けて大山へ行くための道路が、「大山道」として道筋の村々に名付けられて残されています。

⑨古峯講

栃木県鹿沼市の古峯神社を祀る講です。家内安全、火災よけ、嵐よけなどを願ったようで、高木に残されている文書片では、高木村の講中は40人で組織されていたことがわかります。古くからあった信仰でしょうが、江戸末期に盛期を迎えているようです。

⑩塩釜講

8 塩釜講 (18)

世相をよく反映しているのが塩釜講です。東北鎮護・陸奥国一ノ宮である宮城県しおつちおじのかみの塩竈神社を本社として勧請しましたが、安産守護の神として祀られています。御祭神は鹽土老翁神で、製塩の技術を伝えた神です。それが安産に繋がったのは、鹽土老翁神が海路を司る神で、潮の干満の安全を守護するところから、潮の満ち干に関係する出産の無事、安産を祈って、信仰が厚くなったとされます。

高木の塩竈神社の勧請は、高木村の名主である尾崎金左衛門が個人的に行ったもので、享保2年(1735)ごろとされます。それが、明治政府の宗教政策から、明治10年(1877)高木神社へ遷して祀られているものです。



東大和市史資料編9 p 161

講は一時、「数千人二至り」(内野家文書)とされ、神社では、昭和7年40講、11年42講、19年41講と記録されています。江戸時代は特に乳児の死亡率が高く、5才までは人口計算に入っていない村もありました。講は三多摩一円、埼玉県まで広範囲に及びました。講の代参について、東大和市史資料編9は

『代参は昔は白衣にわらじがけで来た所もあるが、現在はほとんど自動車で来る。神社を参拝。講中全員のお札を受けてから、社務所で世話人からもてなしを受ける。神社では前日の十四日に当番

の組が全員出て、社殿の内外から境内の隅々まで大掃除をするのが恒例である。

高木には東、西、砂の三つの組があり、当番は輪番で三年毎に行うのである。その中の女性が五人程、世話人宅に集まり、大祭日の講中接待のために、お赤飯をふかしたり、人参、午勇、竹輪、切いか等のお煮しめを作って準備をする。この品と料理の味は昔からほとんど変わらないと代参の人の話である。代参は大体午前中に来て御神酒、その他の饗応を受け地元へ帰る。』



塩竈神社

としています。(p 103) 安産祈願は現在でも通ずることですが、少子化の一途を辿り、講は減少しています。国や地方公共団体が子育て政策が実るように祈願する必要があるのでしょうか。

昔のお産

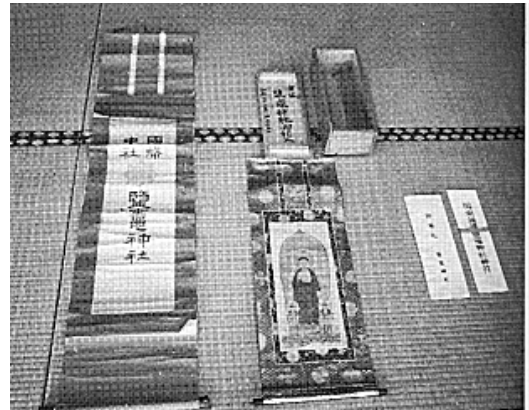
33 昔のお産 (73)

よもやまばなし「昔のお産」は高木の塩竈様への安産祈念と、お産の様子を伝えます。『産室は北側の暗いへやが使われ、たたみをあげてしまい、わらを敷いた上にボロ布を何枚も敷きました。

いよいよお産が始まると、家族は塩釜様からいただいたろうそくに火をともし、この灯明の燃えつきない内に出産するように祈りました。

産婦は腹帯の中の麻ひもを首にかけたり、かみの毛の根元を麻で織えたり、しばったりして、うつぶせになってお産をしました。中には、ふとんを何枚も折りたたんだところに寄りかかってお産した人もありました。

赤子を取りあげるのは、しゅうとめや近所の老婆、分家の老婆でしたが、時には間にあわず、主人がとりあげたこともありました。よほどの難産でなければ医師を呼ばず、東村山市から医師が来た時にはどうにもならなかったこともあったとか。なにしろ素人がとりあげるので後産が出ないのがわからずに、大出血で母親が死んだことがあったりしました。』



狭山丘陵周辺の村々では、ほぼ同じような様子が伝えられます。高木の塩竈神社が一番多く安産祈念のお参りがあったようですが、瑞穂町駒形、所沢市の水天宮、入間市の観音堂などで祈祷をして貰っています。

お産の時に使われた塩竈神社の掛け軸 武蔵村山市民俗編 p 97

⑩その他の講

上に上げたほかに、東大和市域では

牛頭天王講、成田講、新省講、愛宕講、水天宮講

などがあることが伝えられます。

(2) 日待講

遠い神社に、代表者を選んで祈願をする「代参講」とともに、地元で近隣の仲間が特定の日や目的を持って集まり、夜を徹してこもり明かす「日待講」が行われました。厳密な意味の「日待講」ではなくて、祈願や行事の後で飲食を共にして楽しむことを「お日待をする」のように使う場合もありました。東大和市域内の村々で多く行われたのが、次の講です。

①庚申講

50 火をふところに入れた法印さん (111)

市内の至る所で「庚申塔」が見られます。正式には「庚申待供養塔」で、庚申講中の人々が庚申の日に徹夜して「現世安穩 後世安楽」を祈願し、結願によって造立したものです。市内で最古は延宝 8 年(1680)のもので、施主が「石川村 高杉叔左エ門」になっています。延宝 8 年は庚申の年に当たり、石川村は貯水池に沈んだ石川で、当時は「石川村」が存在していたことを偲ばせます。庚申については東大和市史資料編 8 で

『昔の暦では、年や日をあらわすのに、「えと」つまり十干・十二支の組み合わせを使っていた。庚申は「かのえさる」または、「こうしん」と読み、この庚申にあたる年や日は六十年あるいは六十日毎に巡り、くり返される。



東大和市最古の庚申塔

そして中国の道教思想の影響を受けて、日本でも古くからこの庚申にあたる日は、人間の体内にいと伝えられた「三尸の虫」が、その夜眠っている間に体からぬけだし、その人の悪事がすべて天帝に告げられ、そのことによって寿命がちじめられると信じられていた。そのためこの日は三尸の虫が体から抜け出さないように皆で集まり夜を明かしたという。

眠気ざましのため、その夜は持ちよった茶菓や食物あるいは酒を交わし、話し明かすのが通例であった。こうした行為が庚申信仰であり、またこの集まりを「庚申講」とよんだ。』 p 109

講中の銘が彫られているものは、雲性寺門前に祀られている、享保 16 年(1731)の庚申塔(もと奈良橋庚申塚にあった)と慶性院墓地入り口にある寛政 2 年(1790) 庚申塔です。

また、重視したいのは、講の主催に修験が関係したことが考えられることです。清水村の修験・持寶院について、五十嵐民平著、「五十嵐考」がその推測をさせます。修験の項にまとめます。



②馬頭講

庚申塔と同じように目に付くのが馬頭観音です。馬頭観音に馬の安全を願い、牛馬の供養をしたものです。造立は多くが「村中」としてありますが、中には「講中」を刻んだものがあります。

蔵敷庚申塚(塚前)	文政 8 年(1825)	蔵敷村講中
芋窪蓮花寺	寛政 11 年(1799)	芋窪村石川講中
芋窪四街道	文化元年(1804)	芋久保村講中

これらから、講があったことがわかります。
芋窪四街道馬頭観音 文化元年(1804)

③稲荷講

4 川端稲荷大明神 (9)



シーボルトの「NIPPON」に稲荷大明神として左のような画像が描かれています。稲穂を担ぐ大明神の前を狐が先導しています。よもやまばなしの主人公達も、稲荷様について、このようなイメージを持っていたのではないかと推察しています。

初午の日に稲荷講は行われました。赤飯、めざし、油揚げ、うどん、酒などを用意して、祠の前で祈り、終わると日待ちの宿を決めて飲食を共にしました。祠がない場合は「稲荷大明神」の掛け軸が用意されました。

よもやまばなし「川端稲荷」では、八幡神社の神主がお祓いをし、祝詞をあげて、お守りの札を受け、その後に飲食をしています。

④オシラ講 (女日待ち)

24 ほっぼきの話 (52)

東大和市域の村々は、最初は自給自足の衣類や寝具用に養蚕を行っていましたが、やがて、現金収入を得るための手段として行われるようになりました。初期には農業の合間に、副業としていましたが、江戸末期になると、外国との貿易の開始に伴い、養蚕が主となるほどの盛況をていしました。

養蚕はスケジュールが厳密で、密度の濃い労働を要しました。一家総出で携わったようですが、家事の分、どうしても女性にしわ寄せが及びます。そこで、その日ばかりは、女性を労働や家事から解放する知恵が働いたようです。

蚕の神である「オシラ様」(オカイコサン、オシラコ)を祀る講が設けられました。2月14日、女日待ちと呼ばれ、女衆が天下晴れての楽しみの日でした。けんちん汁や煮物が持ち寄られ、世間話に花が咲いたと伝えられます。「ほっぼきの話」は、その時、宝引きのささやかな博打が本物の賭場と間違えられて、大騒ぎになる話です。

⑤膳椀日待ち

東大和市域の村々の家は、しきりを取り払うと全てが大きな一間になるように作られていました。養蚕が影響していたとの指摘もありますが、冠婚葬祭など「人寄せ」が自宅で行われたためでもありました。

その人寄せの際に使用する、膳、椀、座布団などを共同で揃える仕組みがありました。一家とか地類と呼ばれる地域的な集団で、経済性と連帯の成果でした。膳、椀、座布団などを納める倉庫を「膳椀蔵」と呼びました。



蔵敷にあった椀蔵

「膳椀蔵」の管理、運営方法や備付品の補充、修理、修繕などについて決める必要から、構成員

が、年1回総会を開きました。この総会を膳椀日待ちと呼び、構成員のコミュニケーションを図りました。現在、「膳椀蔵」は全て無くなりました。

⑥その他

弁天講、念仏講、地藏講、観音講

職人の講として、太子講、愛染講

相互扶助の講として、頼母子講、無縁講

があったことが知られています。

⑦愛染様

20 愛染様 (43)

職人の講として、太子講や愛染講がありますが、東大和市域の村々でも、藍染めのための栽培から染色までに携わる方々が居ました。よもやまばなしでは、それに関わる話を「愛染様」として採録しています。

『染物業者の間では、愛染様あいぜんさまを信仰の対象としてお祀りします。愛染様はご本体が愛染明王で、藍染に音通するということから、お祭りするようになったと言われます。

村山紺こんがすり 紺が盛んに織られていた頃、村山地方の紺屋でも愛染明王を祀っていました。板橋にある愛染様へお参りしてお札を頂いてきます。そして、かめ場の壁に棚を造り、そこへお札を飾りおまつりします。毎月、二十六日には、特別にうどんをうってお供えしました。毎月、二十六日には、特別にうどんをうってお供えしました。

愛染様の扱いには、清浄ということをやかましく言いました。これは、藍が濁らず美しく染め付くようにという願いからでしょう。かめ場へ上がる履物と土間を歩く履物は替えてはき、かめ場に女性を一切近寄せませんでした。』

ということから、鶏が出入りし紺屋さんが火事で丸焼けになる話です。土間に「藍がめ」を保存していたお宅もありましたが、今でも、うどんをお供えしているのでしょうか。

VI 修験

9 戸隠講 (20)	50 火をふところに入れた法印さん (111)	52 出ば出ろ (115)
74 しし穴の話 (165)		

よもやまばなしには、法印・修験が活躍する話があり、常人とは違った活躍をします。現在では修験は制度としては廃止され、修験道として厳しい修行が続けられています。江戸時代の東大和市域には「圓達院」、「持寶院」、「覚寶院」、「大徳院」、「常覚院」と呼ばれる五つの修験の道場が存在していました。それ以外に玉泉坊（蔵敷村）、千光坊（蔵敷村）が知られます。

村には、祭神を祀る神社、祖先を葬る寺院・墓地があります。修験には葬儀の執行が禁止されていたため、墓地などは持ちませんでしたが、「雨乞い」「憑きもの落とし」「病気治癒」などの加持祈祷、調伏、虫除けなどを行い、「講」を主催して生産と生活の安全を願った江戸時代の村人達に密着した存在でした。また、豊鹿島神社以外の諸神社では別当として神社の管理に当たっていました。

(1) 修験と村人

江戸時代になってなぜこのように修験が地域社会に浸透してきたかについては、様々な見解があります。修験道の儀礼に詳しい「宮家 準」氏の考えを紹介します。

『地域社会に定住した末派の修験者は、村人の依頼にこたえて鎮守の別当や仏寺の住職になることが多かった……。こうした鎮守をあずかった修験者は、鎮守の祭りはもちろんのこと、村内の荒神・薬師などの小祠の祭り、日待・月待・星まつり・庚申・大師などの講を主催して、村人の宗教生活のなかに深く浸透していった。……』

修験者はまた正月の春祈祷からはじまって家祈祷・虫除け・風まつり・雨乞い・晴天祈願など一年間の種々の祈願、安産祈願・幼児を本尊の子にして加護をねがう取子・成人式・厄年ばらい・葬式と人の一生にかかわる種々の儀礼も行った。

陰陽道的なト占や加持祈祷、調伏や憑きものおとしの修法、符呪やまじないの類はとくに好んで行われた。

胃腸病・眼病・神経症・月経痛などの種々の病気、火災除け、営利・栄達・富貴の希求、衣の新調、家屋の新築、戦争、人間関係の確執、盗賊よけ、その他ありとあらゆる庶民の希求にこたえて、修験者はこうした修法を行ったのである。今も修験者の子孫の家にはこれらの修法の切紙類が保存されていることが少なくない。……

なかでも治病、産育などの挫折からの救済に関するものが多い。庶民たちはこうした現世利益的希求をもって修験者のところを訪れたのである。右画像は修験による「憑きもの落とし」



修験者は、庶民の思いもかけぬ病気や災厄は邪神邪霊の祟りや憑依ひょういによると説明した。諸神霊や動物霊などは、平素から修験者などの宗教者の指示に従って所定の方法でまつておけば、人びとの生活が順調にゆくように守護し、何もこうした災厄をもたらさしめない。しかしこれをおこたると不幸をもたらす。死者の霊も同様である。とりわけ不遇な最期をとげた怨霊の類は激しい祟りを

する。生者の霊にしても、人間関係の確執の末に深いうらみをもって相手に崇ったのだ。こうした説明が修験者によってなされたのである。・・・

村内で有力な社会的位置を占めた修験者が村の政治にたずさわったり、寺子屋を経営することもめずらしくなかった。岩手県などでは寺子屋の多くは修験者が開いたものだった。宗教以外の面でも修験者は村人の生活の指導者として活躍していたのである。・・・』

(宮家 準 修験道 山伏の歴史と思想 教育社 1981年 p59-65)

(2) 東大和市域の村々の修験

①「圓達院」(清水村)

52 出ば出ろ (115)

圓達院・円達院は貯水池に沈んだ宅部に住んでいました。修行を積んだ修験が、暗い夜道で、物の怪を感じて、脇差しを抜いて「出ば出ろ」と叫びながら、刀を右に左に振り回して歩く話です。宅部の風景とそこを歩く修験の姿が描かれて、江戸末期の景観を彷彿とさせます。

新編武蔵風土記稿は、『神社 氷川社 ・・・此邊の鎮守にて、別当は本山修験、本郡府中宿門前坊の配下にて、村内圓達院持、』

狭山の栞は『(氷川社) 古時は、宅部、清水、内堀、日向、境、廻り田、後ヶ谷戸七村の惣鎮守なりしと云い伝ふ。別当は聖護院宮御末小田原玉龍坊配下、府中門善坊霞下なる照林山神宮寺圓達院にして、昔、宮倉権之丞と云ふ人、本山修験となり、三覚院と號し、其子、龍藏院圓達坊より代々圓達院と號し、維新の際復飾して、清水大学と改称神官となり後に安清と改名す。』

五十嵐家に伝わる天保14年(1843)の『清水村村鑑明細帳』には御朱印の記載があり、

「御朱印 高八石

内高三石 新義真言宗 三光院領

高五石 氷川社領 本山修験 延達院」

として、いずれも、氷川社の別当であることを記しています。それ以外の記述がないのですが、よもやまばなしは、円達院が脇差しを差している修験者の一端を伝えます。恐らく調伏やお祓い、まじないに使ったのでしょう。

②「持寶院」(清水村)

50 火をふところに入れた法印さん (111)

持寶院・持宝院は清水村に住んで、正月の初荷を積んで江戸へ農間稼ぎに出かけています。真っ赤におこった炭火^{おき}を半紙に包んで懷にしまいます。修行の成果が語られます。また、「狭山之栞」が「先祖大久保掃部は武家にして江戸之人也」と記すように、持寶院の一家は特に学問が優れ、大久保狭南は江戸市中でも有名でした。

その家跡が清水に残っています。武蔵大和駅の隣接地で、前川を渡る橋「狭南橋」を渡って左側です。また、関係遺跡が原の大日堂にあります。狭山の栞では、持寶院について

「本山修験大聖山持寶院は、森御殿聖護院宮御末、小田原玉龍坊配下府中門善坊霞下、多摩郡中取締役也。先祖大久保掃部は武家にして江戸之人也。復飾して本山修験となる。元祖宗山は金剛院と號して二代柳寛は持寶院と號し、・・・。

七世の宗岳は俗名彦五郎、江戸の人也。尚、祈願檀家には旗本衆多く、上田（三千石）、三好（二千五百石）、三枝氏等帰依せり。三枝氏は六千石にして久米村の先の地頭なり。護摩壇一面の奉納の銘に

施主 三枝摂津守守相 同奥方
同 宗四郎守行 同奥方

右の外 家中 齋藤奎之丞美政、小尾四郎左衛門賢一、大須賀十郎右衛門宗鋪外九十六名」



大久保狭南墓碑

としています。重視したいのは持寶院は庚申講を主催したことが考えられることです。五十嵐民平著、「五十嵐考」に

『ところで民間信仰の対象として、庚申や馬頭観音は村人の生活と切り離せないものだが、嘉永元年（一、八四八）五月に清水村の若者たちが、持宝院の庚申尊に額堂寄進の願主となって寄付を呼びかけた記録が残っている。「それ仏神を心信するに二種の因縁門あり、第一を福德と言い第二を定恵と号す、うんぬん」で始まる願文は別当持宝院心城の手になるものと思われるが、若者たちで二朱を集め、以下清水、後ヶ谷、廻り田、宅部各村の者が喜捨している。』

とあり、東大和市内での庚申講の資料不足の中で、修験が主催し、若者が進める、清水、後ヶ谷、廻り田、宅部各村にまたがる庚申講の存在がうかがえて貴重です。

③「覚寶院」（奈良橋村）

新編武蔵風土記稿は奈良橋村の神社として、山神社、八幡宮、山王社をあげ『以上の社 鎮座の初は伝えず、いづれも村内の修験、覚寶院の持、』『覚寶院 これも修験して、八幡山と號す、同じ支配なり。』としています。

狭山の栞は『八幡宮・・・別当・本山修験八幡山覚寶院は聖護院旧宮末小田原玉龍坊配下府中門善坊霞下也。境内六反歩及び山王分六反歩除地なりしが維新の際奉還す。元祖諸寶院より十一世承盛の世 押本肇と改名復飾して神官となる』

として八幡神社が、神官ではなく、修験の覚寶院によって祀られていることがわかります。明治2年に押本肇と改名し、明治3年に神官になりました。その経過から、押本家には江戸以来の多くの文書が残され、八幡神社との関連がよくわかります。

また、屋敷内に護摩堂を復元し、護摩壇が残されています。護摩堂の中には妙見菩薩、不動明王が祀られています。占い箱があるのも、当時の村人達との関わり合いを思わせて、時代風景を考えさせられます。



疱瘡神 別当 覚寶院

八幡神社境内には修験関係の祠があり、疱瘡神を別当・覚寶院が祀っています。青梅橋、高木、奈良橋と疱瘡神が祀られていることは、余程、村人達に支持されたのでしょう。

④「大徳院」（奈良橋村）

奈良橋村にはもう一人修験が活動していました。

新編武蔵風土記稿は愛宕杜・・・村内大徳院持、

大徳院除地、二段、修験なり、府中門善坊の末、愛宕山と称す、寛永十六年聖護院宮より、金欄の袈裟を賜りしと、その故を伝えざれど、この頃よりの修験なるべし

狭山の栞は

本山修験愛宕山大徳院は元祖東覚院より廿三世教順の代 金功に依り準年行事となる。維新後復飾して押本愛丸と改称 神官となり愛宕神社を守護せる故 愛宕山とは號せしなり。・・・

としています。大徳院は愛宕神社を祀る修験です。愛宕信仰は祭神を軻偶突智神（＝火産靈神）^{かぐつちのかみ}・火の神、鍛冶の神として東大和市域の村々で信仰されていました。愛宕信仰は明治の神仏分離令により寺院や修験から分離され、最寄りの神社に合祀されました。従って、東大和市内では独立した神社としての跡を辿ることができません。修験大徳院が別当として守った愛宕神社があったところは住宅地になっています。その地は狭山丘陵の南斜面で、中世の景観を留める場でした。もし、鍛冶の神として祀られていたとしたらと想像すると、本当に残念です。

⑤「常覚院」(宅部村)

修験・常覚院は貯水池に沈んだ宅部・内堀に本拠を構えていました。「狭山之栞」により、御料神社、愛宕神社の別当であったことがわかります。「狭山の栞」では次のように記しています。

御料神社

字内堀にあり。鎌倉権五郎景政の霊を祭る。古時は御霊明神と唱えしが延宝五年再検地の砌 御料所の鎮座なるに依て県令設楽孫兵衛差図にて改む。維新の際元の如く御霊明神と改称、中田六畝二十歩の除地は奉還し現今社地壹反壹畝二十歩官有地となる。別当常覚院は復飾して内堀宅美を改め神官となる。祭典毎年六月十五日。末社弁財天は日杵嶋神社に天王は八坂と改称す。

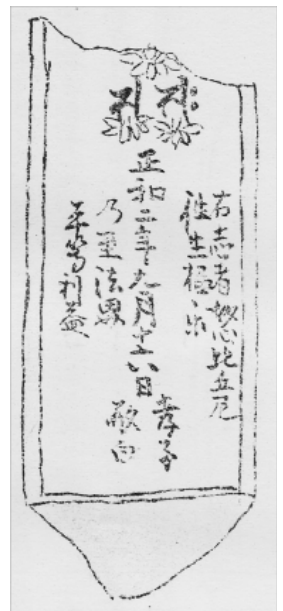
愛宕神社

旧別当は鎌倉権五郎景政の臣寺嶋小重郎、靈光山東光院と称し聖護院宮御末となり、その倅東光坊の後、常覚院長慶、之を嗣ぎ、以後、世世その職にあり。

残念なことに、全て跡を留めず、狭山神社に合祀されています。修験がいかに村人から頼りにされていたかがわかる記述が残されています。「狭山之栞」狭山村之内宅部にあるもので、

『此碑 文化酉年十月字西楽寺の畑より掘り出し井の端に置き釣瓶の台に^{つるべ}用いありしが 祟りありしたため常覚院俊光法印を招請し熊野神として祭る。西楽庵は狭山六地藏第二番なり。』

として、掘り出された板碑を井戸端に置き釣瓶の台にしていたところ祟りがあるので、修験・常覚院に来て貰って「熊野神社」として祀ったとするものです。また、この板碑は正和2年（1313）の年号を刻んであり、東大和市内で発見されている板碑の中で、古さが6番目になるものです。資料の少ない中世史の中で、分析が進めば、新たな発見がありそうです。



⑥玉泉坊（蔵敷村）

この修験については、「新編武蔵風土記稿」、「狭山之栞」とともに記載がありません。蔵敷の庚申塚に「奉造建湯殿山大権現敬白」の湯殿山供養塔があります。天明2年（1782）蔵敷村を中心に28名の村人達が奉納したものです。扱い者が「行者 玉泉坊」でした。この修験が、どのような活躍をしていたのか興味を惹きます。

右画像のようにすっかり剥落してしまいましたが、かすかに読みとることができます。



⑦千光坊（蔵敷村）

74 しし穴の話 （165）

よもやまばなし「しし穴の話」は蔵敷村の「千光谷ツ」に千光坊という修験の堂があったこと、傍らに墓地があって、埋葬の度に、イノシシが来て掘り返すので、落とし穴を作ったことを伝えます。ところが、この修験については、「新編武蔵風土記稿」、「狭山之栞」ともに記載がありません。

地元の言い伝えでは、イノシシが墓荒らしをしないように、塚前墓地に移転し、そこに堂があったとされます。

⑧修験の廃止（明治の廃仏毀釈）

修験道は明治政府の神仏分離策によって廃止となり、修験者は天台、真言のいずれかに属するか復飾して、神官になるか、あるいは帰農しました。東大和市域の修験もそれぞれの道を歩きました。

VII おまじない・民間療法

お医者様が少なく、レントゲンや抗生物質のない頃です。よもやまばなしの主人公は様々な知恵を働かせました。

(1) 病気のときの頼り

15 仁王さまと名物だんご (34)	16 おみたらし (36)	17 おしゃぶき様 (37)
18 耳んだれさま (39)	34 ほうそうの話 (76)	

よもやまばなしには、眼病や耳病、疱瘡など病気に関する話題がたくさん出てきます。江戸時代、よもやまばなしの主人公達の日常生活の上で天災に次ぐ恐れは病気でした。医療機関がほとんどない中で病気になった時、頼るのは、加持祈祷、おまじない、民間療法でした。

東大和市では、この時代を知る資料が出版されていませんが（里正日誌は一部出版）、武蔵村山市では、陰陽師であった指田藤詮の「指田日記」が出版されていて、武蔵村山市史民俗編に天保 6 年（1835）から 11 年（1840）までの様子が紹介されています。東大和市域の村々も同じような状況と推測されますので、引用します。（p 48）

天保六年 三月廿九日 富蔵病氣為平癒、若衆中山口ニ千度参りならびに千垢離。

天保七年 九月八日 渡辺平六疾重キニヨリ、村中御嶽堂ノ池ニ於テ万垢離、且又山口千度ニ護摩ヲタク。

天保八年 一月十六日 四郎兵衛病不平癒、観音経ヲ読ミ千垢離、山口千度参り護摩。二月十二日 四郎兵衛時疫ニヨリ、真福寺ヲ始衆僧ヲ請シ大盤若経転読。山口寺ヨリ使僧来ル。三月廿七日拙宅より疫癘除ノ禦ヲ村中ニ出ス。五月九日佐五右衛門妻、二月ゴロヨリ病氣、俄ニ物ノ怪ノ如ク乱心シ、狐ノツキタル由、芋久保村神主ニ責問シム。八月廿四日半蔵小児病ニヨリ千垢離、廿六日久左衛門婿孫七女病氣、千垢離。

天保九年 二月二日 西隣五郎右衛門病氣、山口寺ニテ護摩ヲ修ス。四月十日勇次郎小児疱瘡ヲ始メ、山口観世音へ組合ノ者千度参り。

天保十年 一月廿六日 伊八病氣、観音経アリ。八月十二日峯吉嫡子痢病ニヨリ千度マイリ。十二月十四日夏中ヨリ浅右衛門病氣、此節無覚束ヤウスニヨリ、若者中ニテ山口ニ千度参り。

天保十一年 四月十一日 平八妻病ニヨリ、横田村中ノ者来リ山口ニ千度参り、当所ヨリモ鎮守ニ千度参リヲ為ス。廿一日惣七妻、両三年以来病氣ニテ、此節積強ク心下ノ苦痛甚シキ由、依之千垢離。五月廿三日泰次郎一女、^{みきれい}疱瘡難症ニヨリ千垢離・山口千度参り。

（注 疫癘^{みきれい}＝はやりやまい）

これから見ると、一人の病気に村中で対処し、水垢離、護摩、観音経読み、大盤若経転読、千度参りなどを行っています。多くが所沢市の山口観音で千度参りを行っています。15 仁王さまと名物だんご (34) は、「はしかがはやりだすと親たちは、子供を連れて山口観音に参拝に出かけます。」と語り出します。

16 おみたらし (36) は、蔵敷の御嶽神社の湧き水による霊水御利益の話です。17 おしゃぶき様 (37)、18 耳んだれさま (39) は、道端に祀られる「お社」の神の靈験に病氣平癒を託す話です。34 ほうそうの話 (76) では、瘡守稻荷へ祈願をしたり、「ほうそう日待ち」を行います。八幡神社には修験が祀った「疱瘡神」があります。

天保 8 年（1837）5 月 9 日には、「俄ニ物ノ怪ノ如ク乱心シ、狐ノツキタル由、芋久保村神主ニ責問シム。」として、豊鹿島神社の神主が狐落としの祈祷をしています。

(2) おまじない・民間療法

101 民間療法とおまじない (220)

よもやまばなしは、『昔はお医者さんの数も少く、それに加えて生活に余裕がなかったので、滅多に医者にかかる事はありませんでした。殆ど古くから伝えられている療法や、おまじないに頼ることが多かったようです。

そのなかには医学的に理にかなったものもありますが、逆療法も少なくありません。またおまじないには、災禍を免れたいとの願いや、健康への祈りがこめられています。』として

耳んだれ、ヤンメ（はやり目、トラホーム）、きりきず、怪我、虫さされ、やけど、打ち身・骨折、咳止め、おなかの薬、のどの痛み、馬肉の効用、脚気、歯痛、のどけ（ジフテリア）、口むき（百日咳）、虫きり（虫封じ）、ふみぬき、しょうげはらい（五日市の今熊神社）、じじっけ（子供の転倒防止）、あぶらげ（背守り）、願いごと、ものもらい、目の中のゴミ、魚の目、やけど、あつけ（日射病）、狐つき、しらくも、胃、土荒神さま、狐

をとりあげています。一つ一つがユーモラスですが示唆に富んでいます。今でも、実行しておられる方もあると聞きます。

(3) 防ぎ

21 厄神さま (45) 22 辻しょうげ (47)
19 火伏せの神様 (41)
64 鬼の宿 (141) 65 お月見 (142)

よもやまばなしの主人公は、災いに対して積極的に防御の体制を組みます。自給自足、近隣関係の極めて濃厚な時代、素朴な自己防衛は義務だったのかも知れません。

①厄神さま・辻しょうげ

21 厄神さま (45) 22 辻しょうげ (47)

『 日もとつぷり暮れたある晩のこと。

「トントン、トントン」

家の戸を叩く音がしました。出てみると暗やみの中に見すばらしいなりの托鉢の僧が、一人たたずんでいます。そして

「一夜の宿をかしてください」

と言いました。山道で行き暮れてしまい、里の燈をたよりにようやくたどりついたのでしょう。

原家では快よく迎へ入れ、手厚くもてなしてあげました。

翌朝、その僧は、

「せっかく泊めてもらったのですが何のお礼も出来ません。そのかわりこの家の厄病を祓ってあげましょう。大晦日の夜、幣束をさんだわら(俵のふた)に差して上りはなにかざり、三方の辻に納めなさい」と告げて立去りました。』

こうして、原家では、三方の辻に「厄神様」を祀るようになりました。貯水池に沈んだ宅部での話です。

『Y 字形の三角辻には悪い神様がたくさん集まっていて、通る人やそこに住む人になにかとわるさ

をするものだ、と昔から言われていました。これを「辻しょうげ」と言っていました。ですから三角辻は利用価値が低く、たいていは石仏、石塔などが建っていたり、捨て場になったりしたものでした。

一年間の厄払いをした幣束やご用済のお札が捨てられていて、風雨にたたかれてとけかかり、なにやら陰湿な雰囲気をかもし出していました。夕暮時の辻はことさらにうす気味悪く恐いものでした。

「辻しょうげにたかれるといけないから辻は足早に通いなさい」と常日頃、母親にいわれているので子供達は、たかれないうちにと目をつぶって一目散に駆けぬけました。』

Y 字形の三角辻＝三方の辻には「辻しょうげ」が集まっています。21 厄神さま（45）では、托鉢の僧がそのお守りを教えてくれました。22 辻しょうげ（47）では、「辻しょうげ」に取り憑かれたら、五日市で祈祷をする人に抜いて貰いに行きます。

辻の三角地は特別な形をしています。この世とあの世の境界線であると同時に、どちらとも言えない空間と思われていたようです。そこに、「厄神様」と「辻しょうげ」が集まっています。長野県や東北に同じ話が点在しているそうです。東大和市域の村々では塞の神伝承が聞かれない中で、この二つの伝承は実に貴重と思います。きちっと民俗学的に研究をして欲しいものです。

なお、塞の神は五十嵐民平氏の図に乗っています。武蔵村山市では、丸山台に病魔（疫痢）を送っています。

②屋敷神

19 火伏せの神様（41）

『高木神社に向って左側に、火伏せ(防火)の神様「ヒノカグツチノオオカミ」を祭神亡する秋葉神社があります。

昔、高木のある家では、裏山に社を造り、神主に頼んで、^{みたまうつし}「卸霊遷」を行いましたところ、祈りが最高潮に達したとき、高木神社の秋葉様より火柱があがり、裏山へと御霊が移るのが見えたそうです。

いつであるかははっきりしませんが、風の強い日、奈良橋一帯が大火事になり、高木の方にまで燃え広がってきました。ところが、不思議に秋葉様を祀ってある家と両隣り三軒は、火災からまぬがれたということでした。』

19 火伏せの神様（41）は、高木神社に祀られた秋葉神社を勧請して^{やしきがみ}「家敷神」として祀った話です。東大和市域の村々には、個人のお宅に沢山の神が「守護神」として祀られています。これを屋敷神と呼んでいます。川端稲荷もその一つです。

東大和市域の村々には、よもやまばなしをまとめた「みちの会」が調査した結果、全部で 256 軒のお宅で 341 社が祀られていることがわかっています。主に祀られているのは、稲荷 233，弁財天 17，御魂霊神 12，八幡宮 10，山の神 10 社です。

この資料では、その内容を紹介するには膨大すぎるので割愛しましたが、「東大和の屋敷神」（全 4 冊）、東大和市史資料編 8 に紹介されていますので、ご覧下さい。

③鬼の宿と十三夜

64 鬼の宿 (141) 65 お月見 (142)

『節分は鬼の厄日です。その鬼を、「厄神さま」として迎え、毎年宿をする家が奈良橋にあります。・・・節分の日には近所の家でまだ豆まきが始まらない明るうちに御飯を炊きます。・・・小さい膳に御飯に箸を添えて神棚に供えます。大神宮様の脇を「厄神さま」の御座とみたててあります。別に御幣を飾ることはしていません。・・・』

『まわりでは、その家を鬼の宿といっています。』

「鬼は外」と追い払われた鬼をお迎えする話です。

『「十五夜さんをくんな」

お月見の夜、あたりが暗くなると待ちかねたように、子供たちの賑やかな声が聞こえてきました。九月十五日、村の家々では、すすきを十五本一升びんに差して飾り、だんごやさつま芋などを箕にのせて、お月さまに供えました。・・・

十五夜をした家では、片見月は縁起が悪いといって、必ず十三夜(十月十三日)をしました。この日は、すすきを十三本、家でとれた柿や栗などを供えます。子供たちは夜になると「十三夜さんをくんな」と、近所の家々にお供えをもらいに歩きます。』

「大和村の人はやさしい」と、村時代に訪ねてきた外来者の評価をよく耳にしました。この二つのお話はそれに繋がるのでしょうか。歴史を研究する仲間の中には、「この話は自信がないところから生まれるんだ。」と酷評する人もいます。

第5章 親分とバクチの話 三本杉 比翼塚 ぶんさんのはなし(江戸末期～明治)

56 親分とバクチの話 (123) 67 三本杉 (145) 83 からす二題 (182)
60 清水囃子のけいこ (133)
86 弥五右エ門さんの井戸 (189) 51 食べ物を運んでくれた天狗 (113)
97 比翼塚 (211) 68 鹿島さまの櫓 (147) 87 ねずみ沢のかっぱ (193)

丁度、「親分とバクチの話」の馬蔵親分が東大和市域の村々を闊歩する頃（江戸時代末期から明治にかけて）、日本は大きな曲がり角に立ちました。ペリーが来航し、開国、明治維新と世の中は変化します。比翼塚は武士の面影を残す宮嶋夫妻の江戸時代の残照を告げる話です。よもやまばなしの主人公の生き様も大きな変化に見舞われました。

I 異国船渡来・農兵

56 親分とバクチの話 (123) 67 三本杉 (145) 83 からす二題 (182)
60 清水囃子のけいこ (133)

よもやまばなし「親分とバクチの話」は江戸末期から明治にかけて、東大和市域の村に住んでいた馬蔵親分の話です。恰幅の良い、偉丈夫な気前の良い親分ですが、身の振り方にはさぞ苦勞したことと思います。日本は大きな曲がり角に立ちました。黒船の来航です。その時の地方の実態は、幕府が切羽詰まっていただけに、今から振り返ると何ともユーモラスです。

(1) 黒船が来たとき馬蔵親分は

嘉永6年（1853）6月3日、アメリカ海軍のペリーは、日本との和親と通商を求める大統領の国書を持って、浦賀沖に碇を降ろしました。事前に中国やオランダから情報を得ながら手を打たない幕府を嘲笑うかのように、黒船に護衛させた測量艇を江戸湾深く侵入させて威嚇します。

庶民は大挙して黒船見物に出かけ、品物を売りに行く者まで出て、幕府は、右往左往の結果、6月9日、久里浜で、浦賀奉行が大統領親書を受け取ります。黒船は、再来を約して退去しました。

嘉永7年（1854）1月16日、ペリーは、旗艦を先頭に蒸気船（3）、帆船（4）の大陣容で再び来航しました。江戸湾・羽田沖まで乗り込み、今度は、通商開港の要求です。交渉は横浜で行われ、「石炭・食料の供給と難破民の救助」を認め、「通商」は拒否することで交渉は妥結しました。



東大和市史資料編7 p 23

驚くことに、東大和市域の村々には、その日の内に、代官江川太郎左右衛門から命令が届いています。当時の情報網はこの域に達していました。しかし、その内容と執られた措置は何とも申しようありません。

①「異国船渡来につき取締を厳重に」

『近頃、異国船が度々渡来することについては、かねてから、領分知行（大名領、旗本知行所）へ、人馬の用意を申しつけて置いた面々もあるようだが、この度の異国船渡来の模様をみると、（身体）壮健の者共は近々江戸表へ出動するようになるかも知れない。自然（こうしたことをきっかけ

に)、無宿者や悪党が立ち回り、乱暴し、御府内に立ち入ることも計り難いからだ。

・・・(中略) 関東は広いので、なお悪党者が入り込まないように出口四ヶ宿は勿論、支配所内の脇往還入り口の村々は取り締まりを特に厳重にするようにと、本田加賀守殿(ほんだかがみのかみどの)から各代官に指示があったので、その意を得て、支配所内脇往還入り口村々は勿論、その他の村々においても、この趣旨を心得て、取り締まりを厳重に取りはからえ。もっとも、出役(関東取締出役)を派遣することも考えているが、村役人は「精々」取り締まりせよ。・・・

江川太郎左右衛門 寅正月16日 役所』(「里正日誌」)

②関東取締出役からの名主宛^{おたつし}「御達」

19日には、関東取締出役からも名主宛に命令が出されました。

『・・・もし疑わしき者あるいは長脇差しを持った者を見かけたら、直ちに差押さえ(捕らえ)、もよりの関東取締出役の廻村先へ届け出よ。

人気不穏という虚につけ込んで、悪徒たちが村々へ立ち寄る可能性があるので、(村人)たちは理由のない外出をせずに、火の用心に心を配り、お互いに相談して、村ごとに取り締まりをせよ。

・・・』

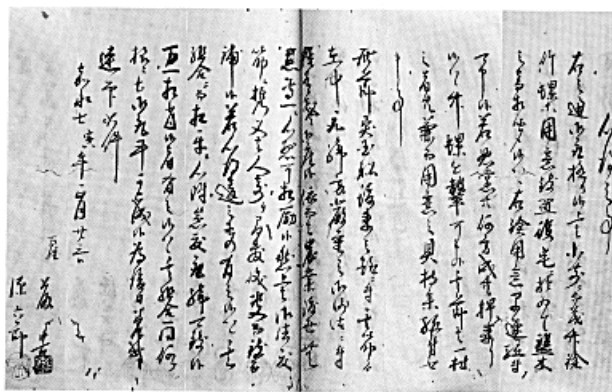
馬蔵親分はさぞ耳が痛かったでしょう。その対応が語られれば、なお面白いのですが、村人達は名主に約束します。

③直ちに槍を持って駆けつけます

命令に対し、「心得の事」として名主(蔵敷村)に約束の書面を差し出しています。

『右の(上記)通り取り決まった上は、小前(百姓)も竹槍や竹螺(たけほら)を用意し、村役人の役宅で盤木の音を聞いたならば、直ちに槍を持って駆けつけます。

もし、悪党共がどこからか押し寄せてきたならば、竹螺を撃ち(で知らせ)ます。その時は、一村の者共(村中の者が)かねて用意した道具を持って駆けつけます。



心得の事 東大和市史資料編4 p 24

この節、異国船渡来のことについて、その筋(勘定奉行)より村々の中の取り締まりを厳重にせよとの御沙汰は有り難いことです。したがって、(我々は)農業渡世を怠りなく専一に励むことに心がけます。御法度(法に触れること)のことや、人寄せ(人を集めること)のようなことは決して致しません。もし、心違いの者があれば、その組合(所属する五人組)にて、相互に心付け(注意しあい)、きっと取り締まりいたします。

万一背く者があれば、組合同(所属する五人組一同)いかようにもお取りはからい下さい。(処置されてもても異存ありません)後日のため連印を押して差し出します。

嘉永7年正月23日

百姓、組頭(52名)の連署

名主 左左衛門殿 村役人中』

馬蔵親分は立場が微妙だったことと思いますが、次に村人が命じられたことは台場築造の丸太切り出しです。

④台場築造のため松丸太の切り出し

わが東大和市域の直接支配に当たっていたのは、葦山に反射炉を築き国防に見識を持つ江川太郎

左右衛門でした。アメリカばかりでなく、諸外国が日本の動向に目を付けています。江川代官は東京湾内への外国船の進出に備えて「砲台」＝台場の設置を献策します。

幕府は、8月に、品川沖に11基と品川漁師町の海岸に1カ所、計12基の台場を築造することを決定しました。

第六台場
はほぼ原型が残されている

江川太郎左右衛門支配の狭山丘陵周辺の村々には、さっそく（ペリー来航の嘉永6年、翌・嘉永7年（1854）6月）、台場御普請役からご用丸太調達の命令が届けました。中藤村にあった「御林」よりの丸太材の切り出をせよとの動員です。



・各村では、村人が人足に徴用され、中藤村の御林の松を切り出しました。蔵敷村の名主内野氏が徴用された人数を書き留めています。

	横田村	中 藤 村	三 木 村	砂 川 村	芋 窪 村	蔵敷村	高 木 村	奈良橋村	勝楽寺村
嘉永6年	60	1067	344	315	206	72	96	89	146
嘉永7年	61	2155	282	442	216	80	82	101	150
計	121	3222	626	757	422	152	178	190	296

（単位 人 里正日誌による）

- ・切り出された丸太は、嘉永6年9月が2、247本、嘉永7年6月が1、420本でした。
- ・丸太は福生の多摩川岸まで荷車で運ばれ、多摩川を筏にして下って、工事現場まで届けられました。

⑤物価高騰

幕府、地方とも不安定な中で、狭山丘陵周辺の村は物価高騰に陥入っています。指田日記（武蔵村山市）は、「諸色高値になる。在々織物の類買い物少なく、値段安く織者難渋す」と書いています。馬蔵親分はどのようにしていたのでしょうか？

（2）三本杉のカラスも見ていた農兵

67 三本杉 （145） 83 からす二題 （182）

よもやまばなし「三本杉」は、蔵敷村の三本杉付近に農兵の訓練場があって、農業の合間に軍事訓練をしたことが語られます。これも、東大和市域の村々を支配した江川太郎左衛門一家の建議によるものです。

①農民の臨時兵卒

農民に鉄砲操方や武術の訓練をし、いざという時、兵隊として役立てようとするものです。江戸幕府は秀吉の「刀狩」以来、兵・農分離を原則として、農民に武具を持たせることは禁止していました。これを破るのですから大変です。

伊豆韮山に本拠を構える、韮山代官江川太郎左衛門（英龍）は、諸外国の動きを察し、早くから幕府に海防論を提出し、国防の必要性を説いていました。嘉永 2 年（1849）、海防論の中に農兵取り立ての建議を幕府に提出しました。

幕府は、兵・農分離の原則から、取り上げず、次の項に列挙するように対外的にも国内的にも緊張が高まった文久 3 年（1863）8 月、ようよう江川代官支配所に限り、農兵の取り立てを決定しました。この時、英龍は亡くなっていて、英敏（いずれも、江川太郎左衛門を名乗る）の時代になっていました。

幕府の決定したことは、農民の壮年強健の者を農兵に指定、農業を営む間に軍事訓練、有事には兵卒として動員する、という趣旨のものでした。入間市史によれば、『江川代官手代三浦剛蔵の手紙によると、農兵の取り立ては「上は国家への御奉公、下々の村々は永大無事の基」となり、「村々いずれも外患なく家業出精、子々孫々公役等に差し支えこれなく候えばすなわち国家への忠節」「村々への憂患を未然に御防遣さるべき」ものと位置づけている。』としています。

農兵制度はやがて全国的に広がり、各藩でも取り入れるようになりました。

右は農兵隊のぼり 内野家蔵 東大和市史資料編 7 里正日誌の世界 図版



②東大和の農兵

農兵は各組合村ごとに 1 隊をおき、25 人で 1 小隊が編成され、鉄砲の貸し付けが行われました。

東大和の村々のはの農兵（文久 3 年・1863）を見ると

後ヶ谷村	名主	28 歳	百姓 28 歳
宅部村	組頭倅	25 歳	
高木村	組頭倅	36 歳	
奈良橋村	名主倅	31 歳	
蔵敷村	百姓倅	37 歳	百姓倅 20 歳

で、農兵のほとんどが名主、年寄り、組頭とその倅達であることがわかります。後ヶ谷村の名主は隊頭取を勤めています。蔵敷の名主内野奎左衛門は世話役でした。

そのような関係から、蔵敷に調練場が作られて、射撃の訓練が行われました。83 からす二題（182）のカラスは三本杉の上の巣から、訓練の状況を見たのでしょうか？



現在の三本杉

(3) 治安悪化・武州世直し一揆

黒船騒動が一休みした頃、村々には新たな問題が起こってきました。農兵の募集が行われた文久3年(1863)、多摩では新撰組が結成されます。翌4年には、蛤御門の変が起きて、長州藩と幕府連合軍(薩摩藩、会津藩、桑名藩の藩兵など)が戦闘を開始しました。そんなとき、東大和市域の村では村内の治安の悪化が問題となりました。馬蔵親分の出番があったかも知れません。

①悪党来り、馬蔵親分は？

安政2年(1855)江戸直下型大地震
安政3年(1856)8月 大台風
安政5年(1858)7月 コレラ大流行
万延元年(1860)3月3日 桜田門外の変
文久元年(1861)2月 三ツ木村を江川代官の手代が見回り、無宿者や浪人の捕縛命令
9月 皇女和宮降嫁にともなう大助郷
文久2年(1862)8月 コレラ流行 武蔵村山市域内で死者がでる
文久3年(1863)2月8日 浪士組(近藤勇)上京のため江戸を出立 中山道
3月 イギリス軍隊来航 生麦事件の賠償要求 大名・旗本が疎開先を物色
7月 幕府から治安維持と年貢確保の命令あり
8月 幕府 農兵の取り立てを認める
元治元年(1864)3月 水戸天狗党(尊皇攘夷急進グループ)筑波山に挙兵
6月5日 新撰組 池田屋事件
7月19日 蛤御門の変 長州藩と幕府連合軍(薩摩藩、会津藩、桑名藩の藩兵など)の戦闘
慶応2年(1866)1月 狭山丘陵周辺に悪党来る
5月28日、江戸市中は南品川から赤坂、神田、本所と大規模な打ちこわしが発生し、長州との戦いで将軍が不在であった江戸を、一時、無政府状況にした。打ちこわしの対象になったのは、米屋や質屋、酒屋、料理屋などで、打ちこわしへの参加者は、裏店に住む「困窮人」であった。(福生市史上957)その背景には、米価、物価の高騰があった。
川越町不穏(貧民が集結、米の安売りを求める)
6月13日～19日 武州世直し一揆

約10年間の主な出来事を並べてみました。天災の影響と中央の政治的不安は関東に切迫した情勢をもたらしてきました。狭山丘陵の村々にも影響が現れて、治安が悪化してきました。さらに、米価高騰、凶作などに、輸出品の急増、貨幣制度の混乱など経済機構の変動が加わって、村人達の生活に混乱が直撃しました。指田日記(武蔵村山市)には

慶応2年(1866)

- ・1月8日、箱根ヶ崎茂左衛門土蔵を破り、衣類70品余盗み去る
- ・3月21日、今朝悪徒5人当村に來ると云、
組々15以上60以下の者竹槍を持、中藤里正宅に集りけるに、只今芋久保に悪党来りと申、組々に用意したる半鐘を打・・・
- ・4月26日、箱根ヶ崎より芋久保村まで槍をもって砂川村に詰べき回文来る・・・
などと記されています。

②米価高騰

世情不安、打ち壊しなどの騒擾が発生する中で、米価が鰻登りに上がりました。八王子の例では

安政4～6年(1857～1859)を100として

万延元年（１８６０）	１６０
文久元年（１８６１）	１０９
元治元年（１８６４）	１５０
慶応元年以降	２５０
特に慶応２年（１８６６）	５３２

と高騰しています。（日野市史通史編２下 p 340）

③徹底した倹約（蔵敷村）

農民には物価の値上がりが生活に直接に影響しました。蔵敷村では、慶応２年（１８６６）８月に、村役人一同相談の上、次のように決めています。

- ①婿養子を迎えたときは、これまでは全村一軒毎の農民を招いて酒、さかなで披露宴を開いたが、今後は、そのようなことを取止め、村役人だけを招くこととし、一般村民へは、組頭が、それぞれの組合限りにしらせること。
 - ②婚礼祝儀、そのほかの祝い事の際は、その式が済んだあとで、一度だけ酒、うどんを出し、その前後に、は決して酒、食物を出さないこと。但し空腹で、がまんできない場合は割入飯を出してもよい。人数はできるだけ少くすること。
 - ③葬祭、仏事等のときは参会者に半割入飯を出す。この際は村役人のさしずを受けること。
 - ④全村、すべての家で拍子木を作っておき、変事があった時は、これをたたいて近所へ知らせ、これを聞いた家では、すぐに自分の家の拍子木もたたいて、次から次へ合図すること。
 - ⑤前川、砂ノ川の両岸は、自分自分の持場をきちんと草をかり取っておくこと。
- （大和町史 p 252）

④武州世直し一揆

馬蔵親分が額に皺を寄せるとき、江戸市中、内藤新宿、府中新宿など各地で騒乱が起き、これに合わせるかのように、埼玉県で「武州世直し一揆」が起こりました。慶応２年（１８６６）６月１３日から１９日にかけて、延べ１０数万人が参加したと云われます。武州、上州の広域農民闘争です。

６月１３日夜、秩父郡上名栗村（飯能市）で、米買い占め、物価つり上げ是正、米穀安売りを要求して農民が蜂起し、成木村（青梅市）の村人が呼応して広がりしました。１４日には、飯能村、扇町屋村、下藤沢村、所沢村に達し、「打ち壊し一揆」と性格を変えています。

１５日には武蔵１５郡、上野２郡に拡がり、参加者は数万人に達しました。東は中山道、南は多摩川、北は群馬県との国境までの広範囲に及び、打ちこわし対象になった村２００余、打ちこわされた豪農、村役人など５２０といわれます。

一揆勢は「世直し」の幟や「諸国太平」の高張提灯を押して歩きました。「世直し」には世^よ均^{なら}しの意味が込められていたとの説があります。

打ち壊し勢は所沢宿に集合しました。里正日誌では「飯能辺内毀シ見聞覚え」として記録され、１５～１７軒が打ち壊されています。打ち壊されたのは所沢市史によれば、『穀屋、搗米屋、油屋、炭屋、茶屋、糸屋、質屋などの諸商売を営む者が多い。「横浜を打毀すべし」と対外貿易、外国資本へと目が向いています。

一揆は東大和には直接来ませんでしたが、その一群は久米川村で炊き出しをさせています。１６日には大岱村の水車場が打ち壊されました。穀類・肥料を扱う豪農でした。今回の一揆は人を殺傷せず、自ら施米、施金を行った豪農商は打ち壊しを免れています。

廻り田村では、富農層は白米４斗８合、玄米１５俵（代金４０両）、金５両の米や金を用意しま

した。結果的には打ちこわしがこなかったもので、不要となった白米4斗8合は村方一同へ、1人3合ずつ配分し、諸費用を差し引いて31両1分が残ったので、村内の貧窮者に配分しています。

一揆は6月19日、田無村、柳窪村で幕府の軍事力、農兵、組合村防衛の農民との交戦によって終わりました。江川太郎左衛門は徹底的な銃撃を許したとされます。捕らえられた者は、村預けとなり、後に過料銭、遠島などの処分を受けました。見物していたとの理由で「御叱り」を受けた者もいます。

⑤ザンザラ、ござさん

38 ザンザラ (87) 55 ござさん (121)

よもやまばなし「38 ザンザラ (87)」は加賀の小間物屋さんが、手品師のように引き出しから紅や白粉、櫛、水油、びんつけ、かんざし、かもじなどを出して女性や子供を楽しませます。

「55 ござさん (121)」は、春風に乗って、独特な三味線の音色を出しながら唄をうたい、人家の軒先に立つ遊芸の人の話です。江戸も元禄の頃、このような行商や自由業の人々が村々を廻りましたが、厳しい統制にあい、途絶えていました。

幕末から明治にかけて、様々な情報が流れ、閉鎖的な空気を打ち破るように、馬蔵親分が活躍したり、村々にも、多様な人々が訪れたようです。ザンザラ、ござさんはその反映が残されたのだと思われます。

⑥清水囃子の稽古

60 清水囃子のけいこ (133) 86 弥五右エ門さんの井戸 (189)

よもやまばなし「86 弥五右エ門さんの井戸 (189)」では清水囃子の創始者を野口弥五右エ門さんとします。東大和市の文化財（技芸）に指定されていますが、その説明には

『清水囃子は江戸の祭囃子の亜流であって俗に「おはやし」とも若囃子(馬鹿ばやし)とも呼ばれていた。・・・起源については確たる文献は見えないが、幕末の頃に当時の北多摩郡清水村の農民たちが娯楽として鎮守の祭礼や「ものび」などに演ずる祭囃子を要望して、高円寺村の半次郎という者が祭囃子の名人であると聞き、若者達に祭囃子を伝受した。清水囃子「高円寺流」と呼ぶのは半次郎が高円寺村の住人であってその地方に流布していた祭囃子をこの地に伝えたからである。』

としています。86 弥五右エ門さんの井戸 (189) ではその後の半次郎の動向を伝えます。「60 清水囃子のけいこ (133)」は多摩湖に沈んだ宅部の囃子「鈴木流」と一緒になったこと、囃子の稽古の様子を伝えて、興味を惹きます。

Ⅱ 御一新（明治維新）

97 比翼塚（211）	35 昔の学校と子供たち（78）	41 自転車（93）
12 大山まいり（28）	46 楽隊(明治時代)（102）	
86 弥五右エ門さんの井戸（189）	51 食べ物を運んでくれた天狗（113）	
25 電の話（55）	53 ぶんさんのはなし（116）	

御一新が東大和市域の村々にやってきました。高木明楽寺に江戸南町奉行遠山家の遠縁である宮嶋夫妻が来村します。文明開花のもとに学校が設置されます。村にとっても、学校にあげる（通わす）方にとっても、経済的に苦しみました。15 才になると男の子は大山参りをし、日露戦争の出征を送る音楽隊が東村山の駅まで長い行列を作りました。

清戸街道に大きな樫が木陰を作り、そばに掘られた弥五右エ門さんの井戸は道行く人に憩いの場を与えました。明治 20 ～ 30 年頃になると、村に自転車が走る姿が見られるようになりました。

神隠しにあった息子が、天狗が食べ物を運んだのか、無事でした。雹害除けの祈願に榛名山や戸隠山への真剣なお参りが続けられました。

（1）まずは兵卒代を納めよ

慶応 3 年（1867）10 月 14 日、徳川慶喜、大政奉還の上奏文提出。

10 月 24 日 江川太郎左衛門から、田方米代を草納せよとの指令

10 月 25 日 江川太郎左衛門から、兵卒代金の持参を催促

12 月 9 日、「王政復古」を宣言 天皇親政による新政府が誕生。

慶応 4 年（1868）2 月 7 日、芋窪村に江戸からの撤退を急ぐ高島藩諏訪忠誠の歩兵 15 人が宿泊（指田日記）

2 月 8 日、八王子に高島藩歩兵 500 人が宿泊

2 月 9 日、東征軍（官軍）東海道、東山道、北陸道を進む。大総督は有栖川宮熾仁（ありすがわのみやたるひと＝和宮の婚約者）

3 月 14 日、勝海舟・西郷隆盛談 江戸城総攻撃中止

3 月 14 日、五箇条の誓文・宸翰發布 京都御所紫宸殿

4 月 11 日、江戸城開城 4 月 14 日 引き渡し 慶喜は水戸で謹慎
江川太郎左衛門約 1 ヶ月前に「勤王証書」提出

4 月 21 日、政体書を公布

5 月 15 日、上野彰義隊戦争

7 月 17 日、江戸を東京と改めた

明治元年（1868）9 月 8 日、明治と改元 10 月 13 日、天皇は東京に行幸

11 月 3 日、蔵敷村名主 新しい高札の書き換えを求める

明治 2 年（1869）1 月 23 日、版籍奉還

高木明楽寺に宮嶋夫妻来村

明治 4 年（1871）7 月 14 日、廃藩置県

これは、御一新の寸前から、廃藩置県までの略年表です。徳川慶喜が大政奉還の上奏文を提出した時、村々では、江川太郎左衛門から米代と兵卒代を早く納めるようにとの催促を受けています。慶応 4 年には、新政府が誕生し、官軍が江戸へと向かってきます。その最中、芋窪村には、江戸から退去を急ぐ諏訪の高島藩の歩兵が泊まりました。

慶応 4 年 3 月、東大和市域の村々を支配していた江川太郎左衛門は新政府への忠勤を誓い「勤王

証書」を提出しています。幕府の代官から新政府の役人へと身分を変えたのです。江戸城開城の前になります。

(2)「土農工商は安心せよ」

①「安心して業に励め」

日本の歴史が転換する慶応4年（1868・9月に明治元年）4月、かつての徳川幕府直轄領・旗本領の村々に、新政府から新しい触書が配られました（「東海道鎮撫総督府」触書）。

『このたび陸海軍が諸道から進軍し朝敵徳川慶喜を討伐したが、本人が悔悟謹慎することになったので死一等を減ずることにした。京都方に心を寄せる者は今までのことは問わず大いに拔擢する思召である。徳川家の譜代・陪臣、小使に至るまで扶助することになったから土農工商は安心して営業するがよい。当分は徳川家の法といえども良法は残すのであるから心得違いのないようにし、また諸事訴訟は当総督府へ訴え出るようにせよ』

との触書です。総督府は急激な変革はしないことを知らせて民心の安定を図ったものと思われますが、徳川幕府のお膝元の江戸市民に受け入れられるわけがなく、さすがに、この高札は書き換えられたようです。

②新しい高札を

「王政復古」の宣言、五箇条の誓文が出され、明治と改元され、東大和周辺にも新しい時代への門出の時が来ました。政府は村々に、新政府の方針である「五榜の掲示」を示達するため、従来からの高札を書き換えるように求めました。蔵敷村名主は明治元年（1868）11月3日、次のように書き換えを願い出ています。

『「太政官高札新掲」

辰(明治元年)十一月六日御高札の墨入れ願

恐れ多いことですが、書き付けをもって願ひ上げます

武州多摩郡蔵敷村の惣代名主杵左衛門が申し上げます、このたび、王政御一新の御布告の趣をありがたくお受けし、御制札の書き替えをお願い致したく、新板三枚を添えてお願い申し上げます
何卒、御慈悲を以て御墨入れをして下さいますようお願いいたします、以上

当御支配所 武州多摩郡蔵敷村

役人惣代 名主杵左衛門

明治元年辰十一月三日
菰山県 御役所』

村々では、従前から高札場に掲げられていた高札4枚を取り去り、新しく書き換えられた3枚を掲げました。

1枚目

「人間は五倫の道を正しくせねばならぬ」

「身よりのない者や病人をあわれむこと」

「殺人・放火・盗賊のような悪業をしてはいけない」



東大和市史資料編 7 p 209

2枚目

「何事によらず徒党、強訴、逃散は厳禁、このようなことがあれば早々その筋の役所へ申し出でよ、

ご褒美を下さる」

3 枚目

「邪宗門はこれまでのとおり禁制」「切支丹宗門はかたく停止」
の3枚でした。

さすがにキリスト教排除は対外的にも問題があり、明治6年（1873）2月24日、キリストン禁止高札の撤去が行われました。こうして、よもやまばなしの主人公は明治維新を迎えました。明治2年（1869）、版籍奉還がなされた年に、江戸南町奉行遠山家の遠縁である宮嶋夫妻が来村したことは、徳川体制崩壊の一つの象徴でしょう。

③徳川家臣の来住

97 比翼塚（211）

御一新により、江戸詰をしていた大名、徳川将軍に仕える幕臣とその家族はそれぞれの本拠である「藩」に戻りました。特に徳川家に仕えていた幕臣の身の振り方は大変で、本拠駿府に戻れた人はともかくとして、戻れなかった人は、生活の基盤を失い、江戸の町で新しい方途を見つけてさ迷ったと云われます。

比翼塚の主人公・宮嶋巖さんは「江戸南町奉行遠山家のゆかりの武士」でした。「奉公人の里、高木村」としていますので、宮嶋巖家に高木村から奉公人として勤めていた人がいて、その伝手を頼って高木村に来村し、明楽寺に居を構えたのだと推察します。



「狭山之栞」では、尉殿神社の別当は明楽寺であるが『維新以来遠山左衛門尉家口 鐵右衛門復飾の上宮島岩保と改称して神官となる』としています。現在の高木神社の神官になっていることがわかります。

寺子屋の師匠をし、高木村他五ヵ村組合村の事務を司ったかも知れません。しかし、戸長役場が置かれて間もなく亡くなっています。明治維新があったことによる話題で、徳川家臣が村に骨を埋めた貴重な証言をします。

（3）旧幕勢力の抵抗

徳川慶喜が水戸に去っても、旧幕府関係者、特に幕府擁護派は新しい政府に応じようとはしませんでした。それらの分派が村々に逗留しました。長い間の付き合いからも村人たちは粗末にもできず、困惑の内に官軍との関係に気を遣い、逗留軍に対する負担問題に責められます。

①振武軍

慶応4年（1868）4月、江戸城の無血明け渡しが終わりましたが、旧幕臣の中には、徳川再興にむけての抵抗をするものがありました。5月、「彰義隊」が江戸上野の山に立てこもります。「彰義隊」は慶喜の護衛を名目としていましたが、やがて、薩・長の動きの実態に気づき、徳川家の再興を標榜するようになります。隊は、上野（江戸市中）を戦場とする主戦派と江戸郊外で戦うべき

との2派に分かれました。

江戸市中を戦場とすることに納得できなかった渋沢精一郎を総隊長とする一派は、彰義隊から分かれて「振武軍」を結成しました。「振武軍」は上野を離れ、慶応4年（1868）5月1日、田無村の西光寺に本陣を構えました。約300人～500人といわれます。

慶応4年（1868）5月3日、東大和周辺の村々の代表が、振武軍から田無の屯所に呼び出されました。「徳川氏再興のため」として軍資金の拠出要請です。名主たちは減額を懇請しますが、結局5月5日から7日の間に、次の諸村から軍用金を集めました。

田無組合村	730両
所沢組合村	726両
拝島組合村	500両
扇町屋組合村	720両
日野組合村	500両
府中組合村	500両
合計	3600両



「振武軍」は5月12日、田無から東大和地域を通して箱根ヶ崎に至り、15日まで滞留しました。15日朝、江戸上野にたてこもる彰義隊が官軍に攻撃されたとの報を受け、直ちに、箱根ヶ崎から上野に向かいます。途中、敗走してきた彰義隊と田無で一緒になり、江戸市中の進撃を諦めて二手に分かれて一隊は東大和を通り扇町屋へ、一隊は所沢から扇町屋に至り、飯能の能仁寺に立てこもりました。

振武軍旗 図説東村山市史 p 137

5月23日、川越藩（400人）を先頭に官軍2000人の攻撃を受け、激戦の結果能仁寺は炎上し、振武軍は敗れます。これを「飯能戦争」といいます。飯能の村は焼かれ、農民にも死者が出ました。参謀渋沢精一郎は自刃、多くの兵は敗走しました。

振武軍の他にも次のような動きがありました。

②仁義隊

慶応4年4月、八王子では幕府脱走者による仁義隊と称する集団の活動が起こっています。軍資金1175両を集めて、その分派は所沢村に移り「撒兵隊」と称して、精勇隊ともども周辺の村々に献金を強要しました。

③精勇隊

慶応4年4月、所沢では、新光寺に浪士が集まり、軍資金を募集しました。しかし、あまり集まらなかったとされます。

（4）蕨山県や神奈川県へ（府藩県三治制、廃藩置県）

平成の市町村合併は、今後様々な問題を提示してきそうですが、明治新政府も相当の混乱を地方に押しつけました。

①蕨山県と品川県のごっちゃまぜ（府藩県三治制）

政府は慶応4年（1868）閏4月、政体書を制定し、地方支配機構を定めました。全国を府・藩・県に分け、府県に府知事（知府事）、藩に藩知事（知藩事）、県に県知事（知県事）を置きました。ただし、村の運営組織は、名主、組頭、百姓代がそのまま残り、従前と変わりありませんで

した。

東大和地域は

①代官支配地が菰山県

②旗本領は没収されて、品川県になりました。その結果

1 蔵敷村、奈良橋村、宅部村、後ヶ谷村は菰山県

2 高木村・芋久保村の天領分、清水村新田分は、菰山県

3 芋窪村・高木村の旗本領、清水村の本田分は品川県

の所属となりました。これにはよもやまばなしの主人公も参ったと思います。

②まとめて神奈川県へ（廃藩置県）

明治4年（1871）7月14日、政府は、幕藩体制の根幹であった「藩」を廃止して、全国を「府県」に統一することにしました。「廃藩置県」です。

明治4年（1871）11月14日、廃藩置県に伴う府県の整理を行い、菰山県、品川県が廃止されました（改置府県）。その結果、武蔵国は、東京府、神奈川県、入間県、埼玉県に区分され、東大和市域の村々は次のようにすべて神奈川県に属することになりました。

明治4年12月20日、宅部村、後ヶ谷村、高木村、奈良橋村＝神奈川県

明治5年 1月29日、芋久保村、清水村＝神奈川県

こうして、現在の東大和市域がまとまりました。この間の経過は最終ページに図を添付します。神奈川県には、明治26年（1893）4月1日、「東京府神奈川県境域変更法」によって三多摩全域が東京府に移管されるまで属していました。

（5）高木村の整理、狭山村の成立

維新後5年が経過して、新政府は近代的国家の形成を目指します。戸籍、地租、徴兵制度が眼目ですが、従来の自然発生的な村は相互に入り混みが激しく新制度を実施するにはなじみませんでした。そこで、複雑に入り組んだ村の区域・範囲を整理することになりました。

①高木村

高木村は、次のように領地が区分されていました。

幕府直轄領（代官支配）123石4斗

旗本＝地頭酒井極之助 65石 この内21石は奈良橋村の所属

一つの村に二つの異なる領主がおり、区分も入り乱れて、時には飛び地状になっていました。さらに地頭酒井極之助の奈良橋村所属の21石には、7軒の住民が住んでいました。

この入り組みを整理することになり、明治5年（1872）5月、旧代官支配地＝天領と旗本支配地＝地頭領を合併するとともに、奈良橋村7軒も高木村の住民としました。

②狭山村の成立

更に激しい入り組が後ヶ谷村と宅部村にありました。貯水池に沈んだ区域の両村は「田畑山林民戸悉皆混錯」の状況でした。

明治6年（1873）、地租改正条例が發布されて、土地の調査を行い、土地一筆ごとに地番を付けることになりました。両村の入り混みは とうてい順序よく番号が付けられる状況ではなく、ここに「両村を一カ村として、整理された地番を設定する」問題が起こってきました。

明治8年2月25日、両村の小前一同は、熟談の上、蓮印をもって、両村を廃止し、新たに狭山村を設ける改称合併願いを十一大区十小区会所に出願しました。翌3月、神奈川県令はこれを許可し、ここに後ヶ谷・宅部の二村は解消して、狭山村が成立しました。（大和町史 p 317）ただし、狭山村の成立には3論があります。

①大和町史は明治8年2月25日。

②「東大和市史資料編10 近代を生きた人びと」 p 34では、『明治8年2月、両村の農民87人の連名により「村名改称合併願」を区会所に提出した。そして区の戸長、副戸長は、このねがいを神奈川令中島信行宛に提出し、翌月これが認められている。』としています。

③さらに、狭山の葉では、『明治8年6月4日に後ヶ谷村及び同村新田、宅部村を合併して狭山村と改称す』としています。（p 25）

③大和町・東大和市ができるまで

複雑な経過を辿るので最終ページに図を掲げます。

（6）地租改正、徴兵制度

12 大山まいり（28）	46 楽隊(明治時代)（102）
--------------	------------------

明治新政府の新たな政策の眼目に、安定的な徴税作と国民皆兵制度がありました。地租改正と徴兵として制度化されました。よもやまばなしの主人公は地租改正には触れていませんが、徴兵制度と出征について描いています。

①土地の地番と価格の確定、税金ガッポリ（地租改正）

江戸時代、日本の国は、中央政府に当たる幕府と地方政府に当たる「藩」で構成されていました。幕府の収入は広大な直轄領からの年貢を中心とし、各藩は藩独自に多様な租税を徴収していました。明治政府はこの体制をとりあえずそのまま受け継ぎました。

中央集権国家の確立の進行と共に、全国的に統一した新しい税制が課題となりました。「年貢」から貨幣で納める「地租」への転換です。このため、土地と租税負担者の確定が問題になり、土地の確定のために、一筆ごとの調査を行いました。宅部村と後ヶ谷村が合併する直接の動機はこの調査と地番確定による入り込みの激しさに一つの原因がありました。

明治5年2月15日、これまでの田畑の売買を禁止することから、「田畑永代売買解禁」を行い、土地の売買を自由化し「土地売買譲渡につき地券渡方規則」を公布しました。

これらを前提にして、明治6年（1873）7月28日、「地租改正条例」が發布されました。これまでの

- ・収穫高によって課税していた税率を、土地の価格に応じて課税する
- ・米などの物納を廃止して金納とする
- ・地租は毎年、地下の100分の3の定率とする
- ・豊凶によって税率を変えることはしない

としました。改正後は、耕地がこれまでの年貢対象の面積の2倍以上になりました。地租はこの面積に課税されましたから、一挙に増加しました。なんと、地租改正に要した費用はすべて村持ち

で、結局は農民が負担することになりました。

瑞穂町史は『この改革は明治14年（1881）に完成したが、高率金納の圧迫による農民の没落や地主・小作関係などの問題が派生し、いろいろな功罪を残している』（p986）としています。

第41表 11大区11小区村別耕地面積

村名	改正反別	旧反別
高木村	町反畝歩 109. 2. 2.04	町反畝歩 49. 6. 8.00
清水村	154. 1. 9.07	68. 8. 2.10
狭山村	203. 6. 6.07	91. 7. 8.15
芋窪村	362. 4. 7.06	160. 3. 3.23
蔵敷村	134. 3. 4.16	55. 6. 2.20
奈良橋村	186. 7. 7.08	71. 9. 9.15
計	1150. 6. 6.18	498. 2. 4.23

東大和市域の村々でも、この改正により上の表の通り課税面積が増加しました。資料は大和町史326pから引用

②徴兵・徴役一字の違い（徴兵制）

12 大山まいり (28)

よもやまばなし「12 大山まいり (28)」は、男の子が15才になると神奈川県伊勢原の大山阿不利神社にお参りしました。数人が連れ立って、村の青年を先達にして歩いて行ったことが紹介されます。武蔵村山市では、「数えて16才になると長老に連れられてお参りした」と伝えられます。

大山参りは雨乞いや豊作祈願で講がつくられるなど、多くの人が参拝しました。その中で「兵隊検査に合格しないように」お祈りした者もあったと、偽らぬ願いをしたことも記されています。

徴兵令

明治6年（1873）1月10日、徴兵令が公布されました。

- ・男子20歳になったとき、兵籍に編入
- ・3年間の兵役、さらに4年間の後備兵役
- ・兵役に服さない17歳以上40歳未満までの男子は国民軍に編入（常備軍の補充）

とする制度です。この時、東大和市域の村から5名が徴兵令の適用を受けて実際に兵役につきました。明治7年2月には、徴兵検査が行われました。満20才になると、この検査を受け「甲種」合格者が兵役につきました。よもやまばなしの主人公が密かに不合格を祈ったのはこの制度でした。

徴兵令公布の前、明治5年11月28日に、徴兵ノ詔・徴兵告諭がだされました。そこには

『凡ソ天地ノ間一事一物トシテ税アラサルハナシ以テ国用ニ允ツ然ラハ則チ人タルモノ固ヨリ心カヲ尽シ国ニ報ヒサルヘカラス西人之ヲ称シテ血税ト云フ其生血ヲ以テ国ニ報スルノ謂ナリ』

とされていたことから、兵役は忌避者も多く、『徴兵徴役一字のちがい、腰にサーベル鉄ぐさり』（大和町史p321）と歌われたとされます。

明治9年、東大和市域の村々から徴兵された人数は下表の通りです。壮丁が常備兵役対象で、短軀（背の低い者）、戸主などは兵役を免除されました。

注

徴兵ノ詔（正式名は「全国徴兵ニ関スル詔」）は、明治5年壬申（1872）11月28日（太陽暦12月9日）公布、徴兵令は明治6年（1873）1月10日に公布されています。明治5年12月3日を明治6年1月1日としたため、年の表記にはいろいろあります。

第 37 表 明治9年第11大区10小区国民軍人員表

年 令	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	計
高 木 村	5	2	4	5	1	4	1	5	3	2	4	4	1	2	4	3	0	1	0	3	2	0	1	3	60
清 水 村	4	4	8	5	4	8	4	3	6	4	4	3	1	2	1	2	3	3	2	2	2	4	1	0	80
狹 山 村	5	8	6	5	6	2	4	8	6	4	1	7	1	1	7	6	3	5	2	3	3	3	1	6	103
芋 窪 村	7	8	5	6	5	4	4	6	5	4	3	12	3	3	5	8	7	6	5	3	5	4	5	4	127
蔵 敷 村	1	2	2	5	3	3	2	3	4	3	1	6	2	4	1	3	2	1	2	4	1	0	2	1	58
奈 良 橋 村	8	2	6	3	3	8	9	3	3	3	3	4	1	3	1	2	2	1	0	2	4	5	0	3	79
計	30	26	31	29	22	29	24	28	27	20	16	36	9	15	15	24	17	17	11	17	17	16	10	17	507

（篠塚賢也作製）

明治9年徴兵該当者 町史 p 3 2 1

③日清・日露戦役

46 楽隊(明治時代) (102)

よもやまばなしの主人公は日露戦争の時、東村山停車場まで、楽隊で送られました。各村から出征兵士を見送るため、楽隊は一生懸命で、張り合います。

日清戦争は明治27年（1894）8月1日に起こりました。東大和市域の村々からは3人が徴兵されて戦闘に参加しました。1名が戦死しました。兵士だけでなく、軍夫として勤務した人が1名いました。

日露戦争は明治37年2月に開戦となりました。東大和市域の村々からどのように徴兵により参戦したか全容は明確ではありません。蔵敷村からは5人が招集されています。東大和市域の村々では6人が戦死しています。

（7）明楽寺の会所（明治地方制度の確立）

よもやまばなし「97 比翼塚（211）」「31 高木のまんじっ鉦（68）」は東大和市にとって、村々が集まって地方自治の最初の拠点とした場所の話を伝えます。

①6つの村が集まった（明楽寺に戸長役場）

97 比翼塚（211） 31 高木のまんじっ鉦（68）

比翼塚は明治6年、高木の明楽寺に「戸長役場」が置かれたこと、高木のまんじっ鉦は「明楽寺」の鉦が火の見櫓にかけられたことを語ります。「戸長役場」は東大和市域の村々にとって、明治の

地方自治の最初の拠点でした。

名主が戸長に衣替え

明治5年（1872）4月24日、政府は、これまでの村の有力者で、村を代表し、その運営に当たっていた「庄屋、名主、年寄等はすべて廃止し戸長、副戸長と改め、これまでの事務をすべて引き継ぐのはもちろん土地人民に関することは一切取り扱うべし」（小平町史 p 343）との布告を出しました。

中世から江戸時代を通じて、長い間行われてきた村方支配体制の変革です。最初は名前の変更と思われましたが、早々と次の手が打たれてきました。

村は番号で区分された（区番組制）

明治6年（1873）4月、神奈川県は、武蔵と相模を20区に区分し、1区に区長1名、副区長1名を置き、戸籍だけでなく行政事務全般を取り扱うことにしました。そして、区を「組」に細分しました。

これまでの「県」→「区」

「県」→「村」

の二つの命令系統が

「県」→「〇〇区」→「〇〇組」

の一系統になりました。東大和市域の村々は神奈川県第十一区第十番組に属しました。

区長・戸長・副戸長は、代議人の入札（選挙）によって選ばれました。地方の有力者は政府の行政組織の末端に組み入れられたことになります。

東大和市域の村々が属した「神奈川県第十一区第十番組」はその会所を高木村明楽寺に設けました。よもやまばなし「比翼塚」の主人公・宮嶋巖さんが寺小屋を開いていたところが、突然、地方自治の最末端である会所・役場が変わったことになります。会所になって間もなく宮嶋さんは亡くなっていますが、恐らく、事務を手伝ったことでしょう。当時の「神奈川県第十一区第十番組」の人口は2,827人 戸数は466戸で、各村々の状況は下表の通りでした。

第 30 表 明治7年第11区第10番組村況

村 名	戸数	人口 総数	男	女	村 高	反 別	村 用 掛	月給 金額
奈良橋村	67	407	217	190	石斗升合勺	町反畝歩	鎌田藤九郎	80
宅部村	40	252	124	128	375.9.8.5.0	68.7.1.04	榎本半兵衛	75
後ヶ谷村	45	307	138	169	203.8.4.0.0	56.6.4.15	杉本勘左衛門	80
清水村	60	379	189	190	165.0.0.0.0	35.2.8.15	池谷藤右衛門	80
高木村	49	252	124	128	482.9.7.4.0	161.9.9.20	尾崎金左衛門	80
芋久保村	147	821	397	424	215.7.4.6.7	55.9.8.09	石井権左衛門	1.00
蔵敷村	58	333	152	181	264.1.6.8.0	74.3.9.02	鈴木重蔵	80
合 計	466	2.827	1.384	1.443	1864.7.1.6.0	502.8.2.15		5.75

（内野祿太郎氏所蔵文書より）

（大和町史 p 302）

連合戸長役場へ

明治14年以来、政府は極端なデフレ政策をとったため、物価の急激な下落、深刻な不況におおわれました。従来の村の方式では、新しい時代への対応がままならないばかりでなく、村の財政が維持できなくなる危険性が高まってきました。

また、村の仕事が増えて、東大和市域に形成された小さな細長い村が、単独で処理するには無理な状況となりました。その打開策として、明治17年（1884）、村々が集まって共同処理をすることになりました。

同年7月、芋窪、蔵敷、奈良橋、高木、狭山、清水の村々が一つに集まって共同処理をする「連合村」を構成しました。代表（連合戸長）は狭山村の関田糸右衛門が選ばれました。その時、共通の役所として「連合戸長役場」を「神奈川県第十一区第十番組」の会所である明楽寺に置いたのです。

②清戸街道

86 弥五右エ門さんの井戸（189）

村の変遷が続く中で、よもやまばなしの主人公は、自らの地域奉仕を進めます。清戸街道や江戸街道、八王子道を行く人達の水場として井戸を掘ってのサービスです。清戸街道は青梅街道奈良橋のT字路を東村山方面に向かい、日月橋を渡って右斜めに入る道です。

現在では地域の生活道になっていますが、弥五右エ門さんが生きた幕末から明治にかけては宿場・清瀬に通ずる広域道路でした。高木神社はこの道から表参道がつけられ、高木の笠森稲荷が祀られ、庚申神社へと続きます。ここから東村山市を過ぎて清瀬に達します。

弥五右エ門さんは庚申神社と呼ばれる三角地に井戸を掘りました。明治13年頃とされます。清戸街道と所沢から八王子へ抜ける八王子道との交差点です。現在は貯水池建設により移転した「庚申塔」が祀られていますが、当時はそれではなく、砂川九番から見えるような大きな櫓がありました。旅人達の目印でもあり、木陰を作り憩いの場でした。しかし、水場がありませんでした。

弥五右エ門さんは、旅人が困るのを目にして、自費で井戸を掘りました。三年かかったといいます。村がどのような方向に向かうか、存立の分かれ目の要素もあった、地方政治がようやく芽生える頃のボランティアの先駆けです。



弥五右エ門さんの井戸があった清戸街道と八王子道の交差する現況です。井戸はその後、多くの人が感謝し、やがて野口さん一家も貯水池移転で近くに移転してきました。櫓が昭和22年（1947）に伐られ、水道の時代となって井戸は取り壊されました。

③合併が進められた（市制・町村制）

近代国家を目指すには、地方制度が未熟でした。明治20年（1887）1月、山県有朋らが中心となって、地方自治の調査・検討を開始しました。

- ・天皇を中心とする明治政府の安定化
- ・勢力を伸ばしつつあった地方の名望家・地主層による地方政治の展開

を視点に「市制草案」「町村制草案」がまとめられました。明治21年（1888）、全国に、「市」「町」「村」において、選挙で代表者を選ぶ「市制・町村制」が公布されました。女性には選挙権はなく、選挙権を持つ男子も、25歳以上、1戸を構えた戸主で、地租を納めるか、国税（所得税、営業税）を2円以上納めているものに制限されましたが、制限された中で、地方自治体が生まれました。

村や町は不完全ながら国から独立した団体となりました。しかし、独立と引き替えに府県から、戸籍、徴税、徴兵、教育、衛生、土木、勸業と仕事がどっさり移されました。その経費は従来の村負担に比べてはるかに増大したにもかかわらず、ほとんどが、できたての市町村の自弁でした。

仕方がなくて、小さな市町村が一緒になって基礎体力を付けようと、大規模な町村合併が進められました。

明治21年（1888）	全国の市町村	71、314
翌年22年（1889）	町村	15、820＋市39
合併率	全国平均で	77.8%

という物凄さでした。合併の背景には、明治19年（1886）に、小学校令・中学校令が公布されて、各町村とも、この整備が焦眉の急で、江戸時代からの村では、建設も維持もできなかったことが考えられます。

④東大和市域の村々は合併しなかった（「高木村他五ヵ村組合」）

よもやまばなしの主人公達がつくる東大和市域の村々は、この合併の動きに対して、別の方法を選びました。

明治22年（1889）6月、先の連合戸長制の連合村を「高木村他五ヵ村組合」として、新しい制度に適應させたのです。県や郡からは合併すべしとの強い指導がありましたが、「組合村」で押し通し、各村々が独立しながら共同処理する道を選びました。役場は「連合戸長役場」であった高木村の明楽寺に置かれました。

方法は、各村から、2名ずつの議員が選出されて、組合議会を構成しました。組合村に、代表である村長を置きました。組合村の費用は各村の個人に賦課されて、運営されました。

しかし、組合村はなかなか巧く機能しませんでした。各村の利害が一致しなかったのが基本にあったようです。明治34年（1901）突然、組合村を廃止して、一つの村にしようとの合併事件が起きました。

⑤村山村騒動

明治34年（1901）3月8日、「高木村他五ヵ村組合」を代表する村長から、組合議会が招集されました。構成する6ヵ村を合併して「村山村」にするとの議題でした。蔵敷村から強力な反対があり、組合議会は中止となりました。

5月1日、組合議員が、組合村を管轄する北多摩郡長から北多摩郡役所に呼び出しを受けました。席上、郡長から「知事より合併についての諮問を受けている」との発言がありました。この言葉から、組合議員は、構成する各村々には連絡なしに、すでに、村長が独自で合併の上申をしているこ

とを知りました。村長は3月31日に合併の上申を提出していました。

合併反対派が出した陳情書

高木、清水、蔵敷の3村は、合併上申をした組合村村長について「不当」を内務大臣に訴えました。郡長は「合併促進」を指導したようでした。

この事件は、明治36年うやむやの内に延期になっています。組合村村長としては、組合村の経常経費、小学校の維持費の負担などに耐えきれず合併の道を選んだとも思われますが、明らかではありません。合併促進派の資料にもありません。あるいは、水面下で郡の指導があったのかも知れません。

この事件は、明治の市制町村制のもつ問題点そのものを象徴するものでした。この騒動を経て、「高木村他五ヵ村組合」は「大いに和する」を合い言葉に、大和村になり、大和町になり、東大和市になりました。高木のまんじつ鉦は、後に、南街の富士見通りにお目見えしますが、その時は空襲を知らせる半鐘の役割をしました。

⑥桜街道の桜

70 桜 (151)

すっかり面影を無くしていますが、桜街道は、『もとは旧青梅街道で、ここでは江戸街道ともいいました。小平から東大和市駅を通過して火災保険会社の寮（現在マンション建設中）の前から村山団地の方へ行く道のことですが、ここに美しい桜並木がありました。小鳥が多くひばりが鳴いて、桜の下にはかげろうがゆれていました。小学校一、二年生の遠足の場所でしたし、運動会をしたということも聞きました。花の頃は鹿島さまの裏山へ上ると見事な眺めでしたし、遠くからは白い幕をひいたように見えたそうです。

この桜は明治十五、六年頃に植えたといわれます。道の両側は畑で、さつまいもや桑の木が植えられ中央が少し小高くなって桜はそこにありました。・・・。』

明治14年、イギリスの外交官であるアーネスト・サトウがここを通ります。泥道がぬかって、車夫のひく俵から降りなくてはならず、散々であったことが書かれています。アーネスト・サトウは桜を見なかったことになります。

⑦桜街道の砂利穴

28 砂利穴 (61)

時代が少し後になりますが桜街道のふちに砂利穴があった話です。『昭和のはじめ、桜街道の道のふちに砂利穴がありました。穴は一丈(三メートル)ぐらいの深さで、五十メートルおきに、砂川にかけていくつも続いていました。会社帰りの人が落ちたこともあったそうです。

・・・ここから砂利を取り、青梅街道の道普請(道路の補修)に使いました。・・・場所によって差はありますが三メートルから十メートルほど掘ると赤い砂利が出ました。それをモッコで担ぎ上げ、大八車に乗せて引いて歩き道に敷きます。砂利が掘り切ると次に移動していき、あとは草の捨場になっていました。・・・。』

東京ガス電気工業(株)の工場建設の時、砂利層に苦労しましたが、「三メートルから十メートルほど掘ると赤い砂利」が出たとの話は地層の研究の上で重要です。

Ⅲ 明治の学校

97 比翼塚（211） 35 昔の学校と子供たち（78）

よもやまばなし「97 比翼塚（211）」は高木の明楽寺に寺子屋が開かれていたこと、「35 昔の学校と子供たち（78）」は東大和市域の村々の明治初年からの学校について語ります。

（1）寺子屋

①各村々の寺子屋

テレビドラマを再現するような話ですが、江戸時代の東大和市域の村々では、何らかの形で、神主や修験、住職、医師などが、村人に対し、いわゆる手習いの教師となって活動していました。蔵敷名主内野左衛門が「空翁記録」の中に江戸末期の様子を残していますので、要所を引用します。

芋窪村 鹿島神社神主・石井和泉、医師・野口養益、蓮花寺住職、川鍋八郎兵衛祖父
蔵敷村 石原伴鳳、左衛門高祖父藤八翁
奈良橋村 雲性寺住職、修験・大徳院教順（復飾神職押本大膳）、
修験・覚宝院承淹、承盛（復飾して押本宮内）
同村高橋某も塾師也、藪の利左衛門（砂の藪辰の家）算術を能くすといふ
高木村 明楽寺において徳川藩士榊原某、宮鍋哲右衛門（後に巖）習字師なり
後ヶ谷村 円乗院住職・明舜及其弟子習字師たり
其系統を以て木村淳賢〔芋窪村カシマ谷ツ綿屋出生〕の弟子秀鏡（復飾神職）
杉本勘左衛門の祖父宗賢、匠ニシテ近隣ノ習字師ナリ
宅部村 内堀太郎、榎本繁次郎
清水村 三光院住職、本山修験・持寶院

「習字」が中心でした。蔵敷村の石原伴鳳については、次のように記しています。

『天保の初メ 太子堂二て 近隣の子供二習字せしか 村の百姓八兵衛ノ潰屋敷へ普請シ 妻ヲ迎ヒ豆腐造り 小兒玩具物ヲ行商シ 傍ラ子弟を教育せり 盛ナル時ハ小百人ニも及ふと 中藤より清水迄其他遠村より内弟子もありき・・・』

石原伴鳳は、豆腐をつくり、小児の玩具物を行商して、生活費を得ながら教育をしています。他は何れも村の実力者や住職、修験です。

②教えた内容

『普通の寺小家にては習字にいろは、仮名遣ひ、名所、村名、国尽消息往来、又ハ商買往来、百姓往来の類 江戸方角・読本は女子ハ女今川、女小学、女大学、□の文、男子は実語教、童子教、古状揃、・・・大学中庸、論語、孟子、夫より□には書経、易经、詩経位也唐詩選もあり

伴鳳翁ハ習字は大略前の通りなれとも素読ハ唐詩選、五言絶句暗誦、三字教、孝経、論語、孟子、毛詩鄭箋、尚書、周易礼記、左氏伝、文選、白氏文集、世説、孔子家語、史記、漢書』

③謝礼

入門は、大概二月初午、束修百文、五節句（重箱入）作り初穂、麦か粟式升位、歳暮、白米式升 年始は半紙壺状 銭式拾四文位』

としています。この師匠達が、明治の学制発布と共に小学校の教師になっています。

(2) 明治の小学校

35 昔の学校と子供たち (78)

よもやまばなし「35 昔の学校と子供たち (78)」は明治大正期の学校について詳細に記しています。ここでは、なるべく重複しないように、当時のことを紹介します。

①仮郷学校

明治政府は各村が小学校を設けることを基本としました。先ず、明治2年2月、初等教育の普及にあたって、地方官の任務の一つに「小学校を設けること」としました。しかし、村はすぐには対応できず、蕪山県では、戸籍区1区に1カ所の「郷学校」を設置することを建前としました。

明治4年8月1日、当時、東大和の村々が属していた「小川村組合」は、小川村の小川寺に、「仮郷学校」を設置しました。必要とする経費は各県管轄高1万石に付き米1石5斗の割合で分担しました。

対象は「区内村々有志の輩子弟八歳より十五歳迄の者」とされました。蔵敷村の内野嘉一郎（左衛門長男）が助教になっています。東大和市域の村々からの通学の実態は不明です。

②小学校の設立

明治5年8月3日、明治政府は「学制」を布し、村に小学校の設立を定めました。それによってもって寺子屋は廃止され、市町村で、公立学校を設置しました。東大和市には5つの小学校がつけられました。

しょうていがくしゃ 小禎学舎	芋窪村	鹿島神社	石井以豆美方
はんしゅうがくしゃ 汎衆学舎	蔵敷村	太子堂	
げんぎよくがくしゃ 厳玉学舎	奈良橋村	雲性寺	
かつりきがくしゃ 竭力学舎	高木村、	後ヶ谷村	円乗院寺子屋
けんせいがくしゃ 研精学舎	清水村、	宅部村	三光院



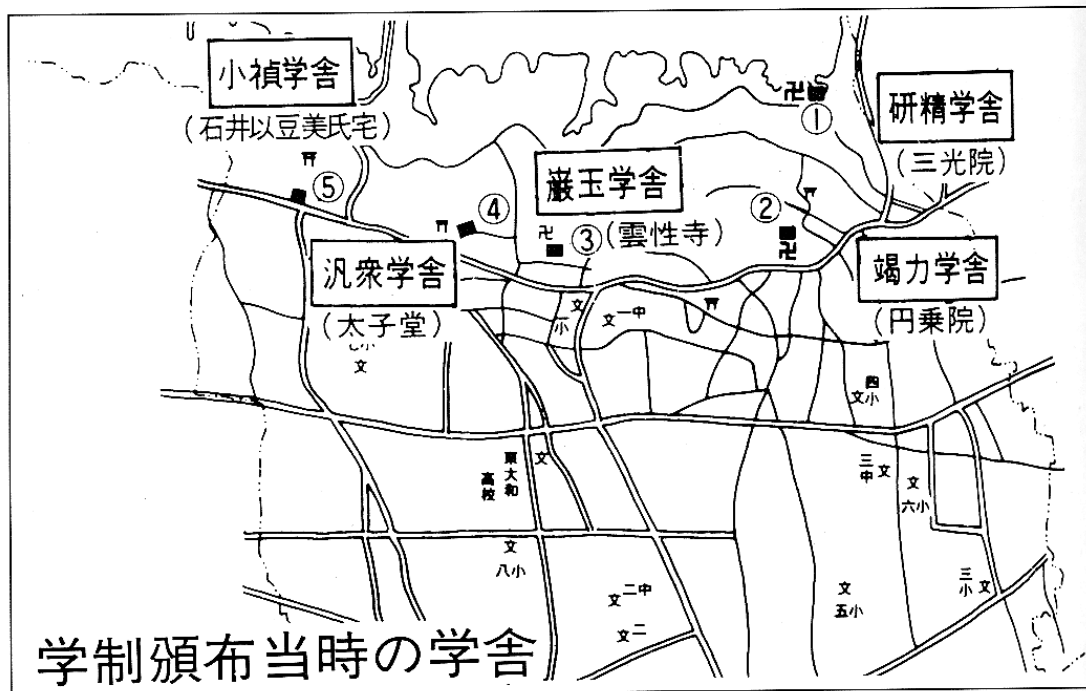
はんしゅうがくしゃ
汎衆学舎 蔵敷村 太子堂

この学校の建設費はほとんどが村民の寄付金に頼っています。汎衆学舎を建設した蔵敷村では、村民55人が資金を拠出しました。総額118円87銭5厘で、最低12銭5厘、最高15円でした。「本人当60歳にて、日々木綿糸紡賃ヲ以テ」寄付をしています。

「東大和市史資料編10近代を生きた人びと」では次のように記しています。『小学校の設立は、政府の要求から出たものであるが、その負担はすべて村にかかっている。県は、係官を派遣して、戸長、村用掛学校世話係へ、学校永続の方法を嚴重に要求している。

汎衆・厳玉・竭力・研精の四学舎を経営する六ヶ村では、全村民に対して、一反歩につき、五十銭の割で徴収し、この金の利子を学校経営に当てるなどの工夫をした。入学児童は、満六歳から十二歳までであるが、当市では、男二〇六人、女二二〇人計四二六人が該当した。しかし、実際に就学したのは、男女合わせて一七八人であった。』

学制発布当時の学舎の位置図を次のページに引用します。



- ①^{けんせい} 研精学舎 (三光院) ……清水村・宅部村 } 明治10年
 ②^{かつりき} 竭力学舎 (円乗院) ……高木村・後ヶ谷村 } 高狭学校
 ③^{げんぎよく} 巖玉学舎 (雲性寺) ……奈良橋村→ (明治9) 奈良橋学校
 ④^{はんしゅう} 汎衆学舎 (太子堂) ……蔵敷村→ (明治9) 蔵敷学校 } 明治12年
 ⑤^{しょうてい} 小禎学舎 (神宮石井以豆美氏宅) ……芋窪村→ (明治9) 芋窪学校 } 昇隆学校

東大和市史資料編10 近代を生きた人びと p 55

③その後の小学校

- 明治9年(1876) 巖玉学舎を奈良橋小学校と改称
 明治10年(1877) 小禎学舎と汎衆学舎を合併し昇隆学校と改称、
 竭力学舎を高狭小学校と改称
 明治27年(1894) 昇隆学校を第一村山小学校 奈良橋小学校を第二村山小学校
 高狭小学校を第三村山小学校と改称
 明治28年(1895) 各小学校の校名を尋常小学校と改称
 明治39年(1906) 5月、第一村山高等小学校と第二村山高等小学校を建設
 就学したのは、戸数の1割に達しなかったとされます。

④村の教育予算と借り入れ

小学校の維持は村にとって大きな負担でした。明治期の資料はありませんが、大正期初年の状況は全支出の60%から85%が小学校費です。通常の村税収入ではまかないきれず、常に借金をしています。

その状況は次ページの表の通りです。当時の村にとって、小学校の運営は一大事業でした。借り受けたのが、多摩農業銀行立川支店を除いて村の有力者ですが個人であるところが注意を引きます。

第101表 高木村外5ヵ村組合借入金

年 月 日	借入金額	年利率	償還期限	借 入 先
明40.3.16	100円	15%	明40.4.30	蔵敷村，内野左衛門
明42.8.13	150	15	明42.10.31	清水村，五十嵐栄蔵，原伝右衛門
明42.8.13	100	15	明42.10.31	高木村，尾崎房七
明42.8.13	250	15	明42.10.31	奈良橋村，鎌田訥郎，根岸菊太郎
明42.8.13	350	15	明42.10.31	芋窪村，尾又高次郎，川鍋音八，石井鉄五郎，清野半蔵
明42.12.3	800	12	明43.3.31	多摩農業銀行立川支店
大1.10.30	100	12	大1.12.30	高木村
大1.10.30	150	12	大1.12.30	奈良橋村，根岸菊太郎，押本海麿
大1.12.28	100	10	大2.3.31	
大2.5.3	600	12	大2.7.30	芋窪村，石井権作
大3.6.1	224	12	大3.12.31	多摩農業銀行立川支店

(内野家文書による)

(大和町史 p 455)

(3) テレスケ太鼓と夜学

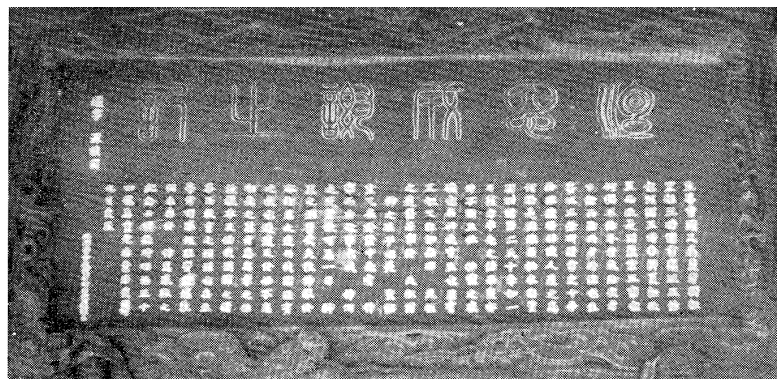
よもやまばなしの主人公達は、学校建設の借金に追われる村と子供達のために、当時としては高齢な60歳の人が、日々、木綿糸のつむぎ賃を貯めて、寄付をしています。もう一方で、秋祭りの練習に惹かれながら、夜学に学んだグループもありました。

当時、村々では、秋祭りの「ハヤシ」や「テレスケダイコ」の練習が神社や社務所で行われ、数少ない娯楽、交流の場、伝統の習熟の場として人気を集めていました。その音に引かれながら、夜学を開設しています。

①狭山の夜学

狭山村では、明治23～24年頃、『ハタオリ娘をかまって遊び歩く状態を慨嘆し「若い者は夜遊びばかりしているが、少しは勉強もしたらよかろう」と・・・』夜学の設立が始まったとされます。

発起した若者は13～14歳の青年で、同好の士を求めて勧誘したが応ずる者がいない有様だったそうです。しかし、次第に趣旨に賛同する若者が集まり、読書、算術、作文などを学びました。「ハヤシ」組からは「ナマイキな奴ら」と、履き



狭山神社に奉納された「報恩感謝之記」物を隠すような嫌がらせが出るなどの対立も起こったそうです。

夜学は「共励学会」と名がつき、内堀大一郎氏が教師に招かれ、狭山の公会堂に、5つのランプがとりました。学んだ者は、明治34年（1901）秋、「報恩感謝之記」の額を作り狭山神社に奉納しています。

②蔵敷の夜学

蔵敷村では、明治22年、「少年会」が、「休日並びに毎夜、読書、ソロバン、発句等を致し、随意に有益の話を致す」、また「新聞を求め」て、夜11時を限って集まっています。その後、明治27年、若者組が「青年義団」として新しく発足し、団として「夜学」が始められました。明治33年、「攻玉会」と名付けられています。

- ・「行状方正にして且つ勉強耐力を養い長幼相敬愛して相互の平和を破らざる事」
- ・授業は午後8時より始め午後10時に終わること

として、ソロバン、学校で学ぶ教科書、漢籍を学んでいます。教員には小学校の先生（岸氏）があたりました。その後は師範学校出の青年教師（小島富蔵氏）を招いています。

芋窪村には「矯風会」ができています。しかし、いずれの夜学も明治40年代には解散し、消滅しました。丁度、村山紘の最盛期に当たり、そちらへエネルギーが集中したのかも知れません。

③はだか参り

14 はだか参り（32）

『囲炉裏の火が恋しい寒のうち、氷った大気を裂くように鈴の音が聞えて来ます。はだか参りの人が走ってゆくのです。はだか参りは、寒中に、はだか同然の白いシャツかじゅばんに、さる股といういでたちで神仏に参ることで、寒参りとも云いました。』

この辺では、東村山の野口のお不動様とか、貯水池が出来る前の谷つの村では、山を越えて山口観音へお参りをしました。寒に入ると、三七、二十一日間で二月三日の年取り（節分）に満願になるように始めます。・・・大きな声で言えないことでしたが、徴兵検査を控えた若い衆が、兵隊のがれを祈って走ったこともあったそうです。』

明治末から大正はじめ頃の話です。「徴兵・懲役一字の違い」と云われた当時、厳寒の夜、複雑な思いで走っている姿が浮かびます。

第6章 村の運動会 綿入れでも無理だった 南街のブラスバンド(大正・昭和時代)

よもやまばなしの主人公達にとって、目を見張るような出来事が続きました。大和村の成立であり、貯水池建設に伴う移転や工事であり、工業と社宅のまちの出現です。そして、戦争の破壊から立ち直り、自分たちが全ての面で主体性を持つ、新しいまちづくりが始まります。

I 大和村の誕生 (大正8年＝1919)

59 村の運動会 (130) 36 メリケン袋物語 (82) 61 高木の獅子舞 (135)
12 大山まいり (28)

よもやまばなし「59 村の運動会 (130)」は高木他五カ村組合が合併して「大和村」(大正8年)となった時、それまで、各村々でやっていた運動会を合同でやることになった話です。南北に細長い六つの村は、おおむね四角い一つの村になりました。面白いのは「当時の部落同士の対抗意識はすさまじいものがありました」としていることです。

①対立から大きく和して (大和村の成立)

先に、明治34年(1901)、高木他五カ村組合村を合併して「村山村」にしようとの騒動があったことを紹介しました。村人達はその騒動後もそのまま、組合村によって運営を続けていました。つまり、一方に、6つの村が独立して存在する。方や、6つの村に共通する仕事を組合村が担当する。という仕組みです。

年を経るにつれて組合村の事務の方が増大し、二重行政的な要素が出てきました。また、財政負担の上で本来の村と組合村の両方の負担をしなければならないため重荷になってきました。加えて、特定の階層の負担が大きいという、負担の不均衡さが目立ってきました。六カ村による組合村を解消して、6つの村が合併した方が合理性があるとの見方が増える情勢になりました。

辻光子氏は次のことを指摘しています。(大和町史研究3 P44)

『・国税・府税は組合村に負担額が決まり、その額を各村に割り当てた。各村では、それを全戸数で負担した。

・各村の村人達の個別の負担は国税の納入額で決められた。そのため、国税負担額が少ない階層の多い村では、国税負担額の多い階層が高額な国税・府税を負担することになった。

・組合村を解消すると、村全体で等級別賦課が行われる。』

以上から組合村を解散して、一村にした方が村民の経済負担が平等になることが浸透してきたのだと考えられます。大正8年(1919)11月、高木他五カ村組合村は、組合村を廃止して、構成6カ村が合併して「大和村」となる事を決めました。合併はスムーズに運んだようです。合併の理由は右のように述べています。

(東大和市史 p260)

狭山村 高木村 清水村 奈良橋村 蔵敷村 芋窪村ノ六ヶ村ヲ合併シ新ニ一村ヲ設置センコトヲ其ノ筋ニ請願スルモノトス
但現在ニ於ケル各村ノ名称ハ其ノ区域ト共ニ大字トシテ存置シ各村有ノ財産ハ其ノ大字有財産トシテ存置スベク又現在組合ノ財産ハ新ニ設置スベキ村有財産トナスモノトス
理由
町村制施行以来茲ニ三十年町村自治ノ発展ニ遅々タリト雖就中組合組織ノ町村ノ如キニ至リテハ然リトセリ是シ其ノ起因スルトコロ多クアルベシト雖要スルニ一般住民ノ共同心ヲ育成シ国家国体の結合力ヲ鞏固ナラシムルカ如キハ組合組織ノ町村ニ於テ□テ多キヲ望ムベキニアラザルナリ今ヤ時代ノ趨勢ニ一致合同ノ必要ヲ促シテ止マサルモノアリ当組合ノ氣運亦茲ニ熟シテ各村住民拏ゲテ合村センコトヲ熱望スルアルヲ認ム是レ本案ヲ提出スル所以ナリ
(大正八年村会議事録第十九号議案)

合村を請願する旨の議案

『狭山村 高木村 清水村 奈良橋村 蔵敷村 芋窪村ノ六ヶ村ヲ合併シ新ニ一村ヲ設置センコトヲ其ノ筋ニ請願スルモノトス 但 現在ニ於ケル各村ノ名称ハ其ノ区域ト共ニ大字トシテ存置シ各村有ノ財産ハ其ノ大字有財産トシテ存置スベク 又 現在組合ノ財産ハ新ニ設置スベキ村有財産トナスモノトス

理由

町村制施行以来茲ニ三十年町村自治ノ発展寔ニ遅々タリト雖就中組合組織ノ町村ノ如キニ至リテハ然リトセリ 是シ其ノ起因スルトコロ多々アルベシト雖 要スルニ一般住民ノ共同心ヲ育成シ国家国體ノ結合カヲ鞏固ナラシムルカ如キハ組合組織ノ町村ニ於テ口テ多キヲ望ムベキニアラザルナリ 今ヤ時代ノ趨勢ニ一致合同ノ必要ヲ促シテ止マサルモノアリ 当組合ノ氣運亦 茲ニ熟シテ各村住民挙ゲテ合村センコトヲ熱望スルアルヲ認ム 是レ本案ヲ提出スル所以ナリ』

(大正八年村會議事録第十九号議案)

経済的なことは一切触れずに「時代ノ趨勢ニ一致合同ノ必要」ありとしているところに、政治情勢が伺えます。新生「大和村」は

・人口 5、190人、戸数 771戸

芋窪247 蔵敷87 奈良橋118 高木70 狭山129 清水120戸

・従来の村の地域は大字として残りました。

村役場として、高木妙楽寺の会所が引き続き使われました。

前回の混乱の反省でしょうか、対立を乗り越えて「大いに和す」との趣旨で村の名前を「大和村」としました。折から修復工事の完成した村山道（青梅街道）には記念アーチに「道平らかにして人和す」との額がかかげられたと伝えられます。

よもやまばなし「62 子供みこしのこと (137)」の 30 本ほどの灯籠は、この青梅街道の北側に立てられたのでした。



事務所となった妙楽寺会所の倉庫

②村の運動会、高木の獅子舞、大山参り

59 村の運動会 (130) 61 高木の獅子舞 (135) 12 大山まいり (28)
--

6 つの村が合併して、大和村になり、最初の運動会が開かれました。それまで、各村々で行っていたものを合同でやることになりました。「59 村の運動会 (130)」は「当時の部落同士の」対抗意識はすさまじいものがありました。」としています。

合併した村々では、簡単には過去の経緯は払拭されなかったようです。村長に有能人を求めるあまり、他村の人を村長に迎えることがありました。この村長排斥運動が起こり、大正12年には、村長擁護派と排斥派が村を二分して争う騒動が起こりました。

大和村が誕生した年、高木では獅子舞（東大和市が文化財指定）が行われました。神社の大祭の行事のようですが、「村」の誕生の祝いが籠められていたのかも知れません。

12 大山まいり (28) では、大和村が誕生した2年後の大正10年頃に、青年達が7～8人で大山参りをしています。この時は、自転車でお参りをしました。雨の中を油紙をかぶって、立川に出て、日野の渡しで多摩川を渡ります。

八王子に出て御殿峠を越え、橋本で相模川を渡ります。伊勢原で提灯を買って、大山神社に参拝します。夜道の東海道を提灯の明かりで走り、平塚で、一泊しています。翌日は、江ノ島を巡り、鎌倉見物をして村に帰っています。この青年の意気は、大正デモクラシーの影響が村にも及んでいたのでしょうか。

③メリケン袋物語

36 メリケン袋物語 (82)

大和村が誕生した、大正 8 年の頃の話として、「36 メリケン袋物語 (82)」があります。メリケン粉の空き袋を持ち寄ってパンツを縫ったり、風呂敷代わりにします。この話は歴史的に見ると、とても示唆に富んだ話です。

「メリケン袋」は普通には、小麦粉を入れた袋です。縦 70 ～ 80 ㌢、横 40 ㌢の白い大きな丈夫な袋です。メリケンは、アメリカの訛りだそうで、どこの港にも「メリケン波戸場」の言葉があるように、広く外国との関連を意味する使い方があります。そこから、「舶来」の意味でも使われます。

「メリケン袋」には、時と場において、たくさんの受け取り方があります。食うや食わずの食糧難であった戦後は、この袋に入った白い小麦粉はアメリカからのお助け神でした。ところが、大正 8 年に置き直すと、全く事情が変わります。大和村の誕生した大正 8 年は、一面では、貯水池建設に関わる土地代金が動き、移転も含んで一種の土地ブームの空気がありました。他面では、水田用地が大幅に減り、畑地が細分化され、農業基盤の上では危機的状況を示した時期です。

貯水池建設に関わる測量技師が、米の弁当を開いて食べているのを見て、『物日（お祝いの日）でもないのに、銀シャリ・白飯を食って^{じこな}る』と驚嘆の声を上げたのが現実でした。農家は自家用の小麦を皮までギリギリにひき込んだ（地粉）真っ黒なうどんが御馳走だったときの話題です。

このような時、なぜ、メリケン袋が大和村に出回っていたのか、歴史上の究明課題です。よもやまばなし「36 メリケン袋物語 (82)」には、見逃せない謎がたくさん潜んでいます。



メリケン袋のモニュメントは東大和市ファーマーズセンターにあります。現在工事中でこんな姿になっていますが、なかなか面白い像に作られています。この際、じっくり、様々な面から取り組んでみたいものです。

④茶畑と桑畑（つけ木の受取りメモ）

37 つけ木の受取りメモ (85)

大正 3 年から 4 年の頃、新青梅街道から南側はほとんど畑でした。そこでは、お茶が栽培され、薩摩芋や桑が植えられていました。水がないため、旱魃に強い作物が選ばれたのです。『5 月になるとお茶摘みが始まります。お茶摘みは女と子供の仕事でした。学校は休みになりました。子供達は、我が家の茶摘みがない時に、大きな茶畑のある家へアルバイトに出かけます。・・・』そして受け取りのメモにしたのが、『手近にあるつけ木の白いところ』でした。

よもやまばなし「37 つけ木の受取りメモ (85)」はこのように語ります。わかれわかれに細長い村が一つになって大和村を構成する 5 年ほど前の景観です。丁度、この時代、村々の農業は、現金収入を得るための農業に転換を迫られていた時で、よもやまばなしの主人公達は、我が道の選択に頭を悩まされていました。

その結果が、お茶であり、薩摩芋、桑でした。また、学校が休みになることが話されますが、この当時はすでに義務教育年限は 6 年になっていました（明治 40 年の小学校令改正による）。おそらく、つけ木の受取りメモの主人公は小学生でしょうが、農繁期には、子供が手伝いのため学校を休む状況が続き、農繁休校を行って凌いだ時期でした。

ちなみに、高等小学校では、大正 9 年に

「年々幾分増加の傾向ありといえども、いまだ、戸数の一割に達せざるが如きは・・・」（大正 9 年村会議録）と云う状況でした。

大正初期の新青梅街道以南の状況と教育の有様を証言する貴重な話です。

⑤電灯がついた（きつねの嫁どり）

77 きつねの嫁どり・きつねの嫁入り (171)

よもやまばなし「きつねの嫁どり」は石川の谷ツにまだ電灯がつかなかった頃の話です。東京の空にはネオンがともされるのが見えました。その頃、丘陵の尾根をきつね火が通るのです。石川の谷ツは東大和市域では一番西側で、少し小高い地形を成して、貯水池の堤防がなければ、東京の空が見えました。

大正 6 年、石川の谷ツにも電灯がつけました。ポーッと赤い火がついたり消えたり、いくつもいくつも並んで動いた「きつねの嫁どり」はどうなったのでしょうか。

⑥猟師がいた

82 三本足のきつね (181)

よもやまばなし「三本足のきつね」は芋窪の山に猟師が仕掛けた爆弾で、前足をやられた三本足のきつねの話です。『大正の頃、まだこのあたりには猟師がいて狐や雉をうっていました』としています。

そして、三本足のきつねは、大雪の日、青梅橋の鉄砲うちの人々に追いかけて、大きなしっぽで足跡を消しながら逃げるのですが、武蔵村山市の原山でとうとううたれてしまいます。

Ⅱ 貯水池建設と移転

10 内堀部落の女堰 (23)	52 出ば出ろ (115)	60 清水囃子のけいこ (133)
81 きつねの恩返し (179)	93 石神の話 (204)	95 いかづちさま (208)
29 村山緋 (62)	73 藤兵衛さんと狼 (163)	75 槌頭(つちんど) (167)
77 きつねの嫁どり・きつねの嫁入り (171)	78 いたずらぎつね (173)	
53 ぶんさんのはなし (116)	54 馬方勝っあん (118)	66 三日の正月 (144)
88 こさ池とかゆ塚 (195)	98 力石 (213)	

「東大和のよもやまばなし」では、最も多くの話題が登場します。東大和市の誕生の地でもあったところが湖底に沈みました。村山貯水池（多摩湖）のほとんどが東大和市域です。東大和市にとっても、よもやまばなしの主人公達にとっても、この事業は現在まで影響を残しています。

誘致もしないのに、一方的な決定で、貯水池は作られました。故郷を失うことになった人々は、突然の動きに愕然としたことでしょう。何よりも生活の基盤であった田畑をなくし、長い間住み慣れた場所から移転するというのです。なぜ、東大和市に村山貯水池は作られたのでしょうか？

(1) なぜ村山の地に

①玉川上水だけでは水不足

幕末、維新の騒乱を経て、江戸が東京になりました。江戸南町奉行遠山家ゆかりの宮嶋氏が来村して、高木明楽寺へ落ち着いたように、徳川氏の家臣と支持派はそれぞれに伝手を求めて帰郷し、新政府の関係者が東京を埋めました。大名の屋敷跡は茶園になったり畑になりました。そのため、一時的に人口は減りましたが、その後、集中が始まり、明治22年には、江戸幕府最盛期と同じ状況になったと云われます。

東京の市民の生活振りは変化し、従来の「長屋井戸」「汲み置きカメ」が「水道」になって、水事情は一変しました。玉川上水からの取り入れではどうしても賄いきれなくなりました。加えて、コレラ事件が起こります。

②コレラの流行、水道の手直し（上水道改良事業）

玉川上水は開渠であるために上水に汚物が入りやすく、新政府でも管理が問題でした。関東の事情に疎い新政府は一時（明治3年4月）、玉川上水に「通船」を許可し、船を浮かべて物資の運搬と物見遊山の用に供したこともあります。しかし、明治5年5月には汚濁の理由で廃止して、慎重な水管理に移っていました。

人口増が続き、東京の井戸の水が少なくなって、「水売り」が引っ張りだこになり始めた時、コレラが大流行（明治19・1886年）しました。死者11万余人（東京百年史第3巻 p125）と伝えられる中で、8月22日、「容易ならざる一大事」の見出しが新聞記事を賑わしました。コレラ患者の汚物を多摩川に流したとの報道です。

大騒ぎとなり、東京の水道問題は緊急事態となりました。明治21年（1888）10月5日、内務省に東京市区改正委員会が設置され、水道改良の調査設計にとりかかることになりました。

③村山に

二つの新規水道計画が出されました。

- ・第一計画ハ水源ヲ上流ニ索ムルヲ以テ水質精良ナルノミナラス、平井川ノ水大久野貯水池ニ流入シ他日必要ニ応シテ秋川ヨリ導水スル・・・

・第二計画ハ多摩川沿岸羽村ヨリ同川ノ水ヲ取り入レ、村山ニ設クル大貯水池ニ導キ、・・・

の2案でした。明治45年（1912）4月5日、5月5日に集中審議がなされました。途中、東京市内に深井戸を掘る案も提案されたりして、審議は伯仲しました。経費と地形から、第二計画案が採用され、村山の地に決まりました。



村山貯水池への導水経路 東大和市史資料編2 p173

（2）用地買収

①情報合戦

東京市は、大正元年（1912）、担当部署を設けて、実際の仕事に取りかかりました。翌、大正2年（1913）には、水道拡張事務所が設置され、調査や用地買収のための準備態勢が整えられました。

大正3年（1914）1月10日、芋窪村蓮華寺境内に、用地測量にあたる東京市の職員の詰め所が設けられました。宅部村の内堀小十郎宅と清水村（上宅部）の原仁兵衛宅がその宿舎になりました。内堀小十郎氏は「湖底に沈んだふるさと」で

『・・・何分にも相当広範囲にわたっているの、技師達もなみたいていではない。疲れて帰ってくると晩酌の用意がしてある。なかなか丁重にもてなしたようだ。村の顔役や青年団の幹部が毎晩やってくる。ご機嫌をうかがいながら自分の所有している土地や物件の状況、その金額の概算などを聞いて帰る。ともかく、ろくな収入もない時代に土地代金や移転料がたくさんもらえるのだから村中は大喜び、あまり反対者もなく、ひたすらその成り行きを待ちあぐんでいた。・・・』

として、なかなか強かであった内輪の話を記しています。そして、

『あんちゅうたって先祖代々の土地だからよ、手放すにや、そりゃーおおごと（大事）よ。どうすんべえかとしんべえ（心配）で、家族会議で大喧嘩になったってこともあんのさ・・・』と、深刻

な世界を語っています。

②冗談じゃねえよ＝反対運動

測量が進み、補償の対象が把握されて、金額の提示が近くなる頃、関係住民から、移転反対の声が上がり住民大会が開かれました。大正3年（1914）1月20日のことです。

大会の趣意書には

『今や東京市は水道第二期拡張のため本組合芋窪村裏組より清水村裏組に至る間の土地を挙て買収せんとす。実に該地住民の死活問題なり。今に於て画策よろしきを得ざれば百年の計を失するに至るや・・・』

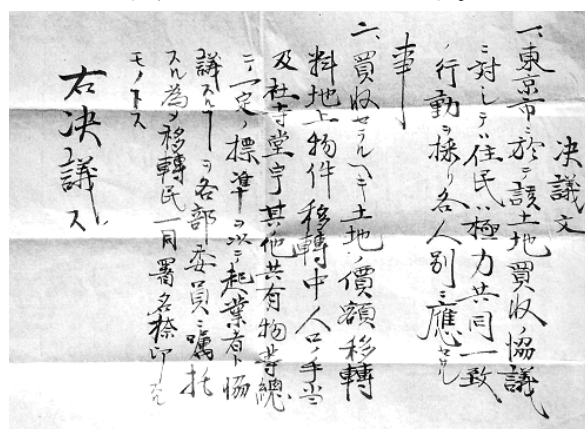
・・・移転地民衆の要望を満たすに足るの覚悟なかるべからず当局亦此点に留意せらるべき信をうたざるも此時に当たり袖手傍観するに忍びず。茲に本日大会を開き別項の決議をなす。大正三年一月二十二日』

と書かれています。移転対象住民約200名と地主400余名が参加したとされます。当日の決議文は次の通りでした。

決議文

- 一、東京市二於テ該土地買収ノ協議ニ対シテハ住民ハ極力共同一致ノ行動ヲ採リ各人別ニ応セサル事
- 二、買収セラルヘキ土地ノ価額移転料地 上物件移転中人々ノ手当及社寺堂宇其ノ他共有物等総テ一定ノ標準ヲ以テ起業者ト協議スル事ヲ各部委員ニ囑託スル為メ移転民一同署名捺印スルモノトス

右決議ス。



移転地住民大会での決議文

（東大和市史資料編2 多摩湖の原風景 p27）

この動きを見て、地元対策を重視してか、大正3年（1914）2月23日、東京市は地元の村長（高木村他五カ村組合組合長・尾又高次郎氏と東村山村長・當麻喜重氏）に、水道拡張工事に關する事務を委託しました。

③用地の買収

反対運動が続く中で、大正4年2月15日、用地買収が開始されました。しかし、混乱は続き、水道拡張事業報告では

表-4 芋窪村外四ヶ村 買収土地反別決定金額表

地目	反別	土地立木買収決定金額	土地単価
山林・原野及雑地	2,036反710	327,699円920	1反歩130円050
畑	407反626	90,209円010	1反歩221円000
田	324反228	85,445円680	1反歩263円500
墓地	5反505	2,333円790	1反歩408円000
宅地	51,271坪73	82,034円490	1坪 1円600
合計	2,774反209 51,271坪73	587,722円890	

（但、土地単価は立木を除けるものなり。）

大正3年11月6日、村山貯水池敷地（東村山村を除く）に係る土地買収の件を市参事会に提出し、大正4年1月26日同会は土地買収査定額に対し宅地を除く外価格の1割5分を減じて上の如く議決す。

『・・・其他種々ノ方法ヲ以テ一時ハ熾烈ナル反対運動ヲ為セシモ、当務吏員ハ絶ヘス各戸ヲ訪問シテ買収価格ノ相当ナルト、ソノ目的ノ公益的ナルヲ説キ速カニ協議ニ応セラレンコトヲ懇談説示セシカハ漸次協議ニ応諾セラレ左表（表7）ノ成績ヲ示スニ至レルモ、村山貯水池敷地全部ノ買収ヲ為スニハナヲ多少ノ時日ヲ要スヘシ。』（表7は省略 東大和市史資料編2 多摩湖の原風景 p24）

と報告しています。

前ページ表4は用地買収決定金額を表すもので、1坪当たりの金額は

山林・原野	43銭35	タバコ（ゴールデンバット）	20箱	1円	明治40年
畑	73銭66	特級酒	1升	1円	大正元年
田	87銭83	東京大学授業料	50円		明治43年
墓地	1円36銭00				
宅地	1円60銭00				

でした。東大和市郷土博物館では、当時のたばこ代と比較して右のような比較をしています。

移転先の用地買い換えとの関連もあり、多くの人々が納得できずに、ムシロ旗を持って反対集会に集まりました。そして、次のような承諾書調印拒絶書を退出するに至っています。

承諾書調印拒絶書

・・・当時売買格ノ半額ニ達セス、其ノ低廉ナルニ驚キ市役所ニ向テ陳情セシモ要領ヲ得ス、故ニ、同月二十二日移住民約式百名地主四百名余会同シ、買収価格ハ不当ノ甚シキモノナルヲ以テ之ニ応セサルハ勿論、該用地ハ他ヘ変更ヲ期セント決議シ、直ニ市長ヘ上申シタルニ、旧臘、埼玉県入間郡山口村地内ヲ測量セシヲ目撃シ、我々ハ先祖伝来ノ土地ニ離ルルノ悲惨ニ遭遇セサルニ至レリト、稍ニ安堵セシニ、今回、上水道用地トシテ各所有者ニ配布セシメ、之カ調印ヲ要請セラル此ノ算出ニヨレハ、サキニ低廉ナリトシ陳情セシ価格ヲ尚低減セシモノニシテ、吃驚又吃驚、如何ニ市当局ハ我々地主ヲ愚弄セラルル力、将ニ市ハ公共ノ為メナルヲ口実ニ、我々世襲ノ財産ヲ奪取セラルルカ、酷タ判断ニ苦メリ是ニ於テ承諾書ヲ拒絶候也 以上

大正四年二月二十八日（大和町史 p438 句読点は安島が挿入）

しかし、実際は表3の移転承諾件数及移転料金表の通り、移転承諾は大正4年7月に194件、同8月に41件、9月に14件で、この3ヶ月間に249件、約86%が承諾しています。

表-3 移転承諾件数及移転料金表（大正5年3月末日現在）

月次	承諾件数	承諾料金額	同支払済件数	支払済金額
大正4年7月	194	101,008円280	139	73,370円190
8月	41	11,294円880	23	11,971円450
9月	14	2,942円440	40	10,878円320
10月	10	4,014円350	21	6,540円860
11月	13	5,798円210	22	5,284円310
12月	11	4,191円890	20	13,576円300
大正5年1月	3	466円560	3	1,564円990
2月	3	1,521円280	6	2,506円260
3月	1	405円900	3	1,579円040
合計	290	131,643円790	277	127,271円720

（移転物件数387件、各村内1人の所有物件を一括して1件とする。）

大正4年2月28日に「承諾書調印拒絶書」を提出してから5ヶ月足らずの内に、このように多くが承諾をせざるを得ない状況が起こったことの背景に、何があったのでしょうか？

総面積	324町歩
田	40町6反5畝
畑	53町4反2畝
山林	216町3反7畝
宅地	14町3反7畝
墓地	2反7畝
水没農家	161戸 226町歩
不在地主	98

（東大和市史資料編2 多摩湖の原風景 p25）

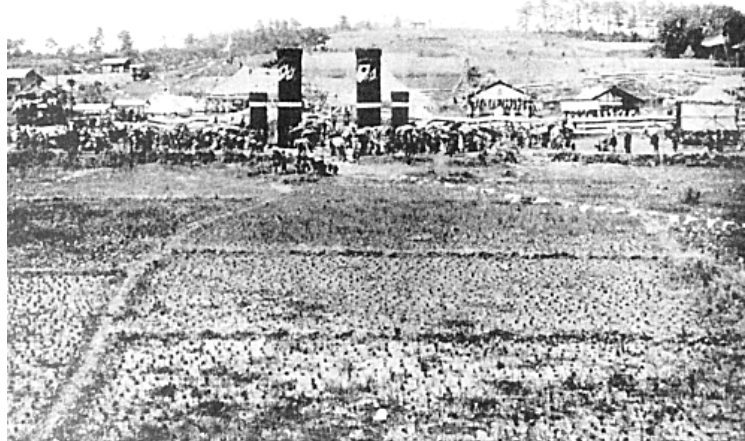
（3）建設工事

58 綿入れ着ても無理だった（128）

高木の渡辺弥次郎さんは、貯水池工事の作業がしたくて現場に行きます。背が低いために、子供と間違えられて断られます。高等科を卒業して、採用して貰いました。日当1円～1円20銭をもらいました。

①雨の地鎮祭

大正5年（1916）1月から5月にかけて、東京市は工事の施工に関わる準備をし、6月4日地鎮祭が行われました。今の下堰堤^{しもえんてい}の下です。



村山貯水池建設工事の地鎮祭風景
（「東京市上水道拡張事業報告」第2回）

（東大和市史資料編2 多摩湖の原風景 p 33）

二本の柱が見えますが、この中央を現在の堰堤の中心が通っています。この日会する者約300名、各界の代表者の前で、尾又氏と當麻氏が玉串を捧げました。当日は雨であったと云い伝えられます。

②建設ブーム

工事の起工は、大正5年（1916）5月23日でした。途中、第1次世界大戦の影響を受けたり、財政圧迫などによって、当初の予定を遅れて、村山貯水池のすべての工事の完成は、昭和3年（1928）でした。

工事の施工に当たって、地元から工事の請負の運動が起きました。三ツ木村、中藤村、岸村、芋窪村、蔵敷村などの村民有志総代が「願書」を出しています。そこには

『・・・高木村組合は・・・村総面積の約3分の1の人家並びに有租地を失うの結果収入並びに村民の生産力に多大の減損を来すべきは疑いを入れる余地なき・・・』として、高木組合村の工事は高木組合村に、中藤組合村の工事は中藤組合村に「村請負」として発注する方針を立てよと訴えています。



「宮鍋隧道」の現況

結果的には、技術や資本の問題があり「村請負」は成立しませんでした。ただし、水路、堰堤、取水塔工事のうち、水路工事には地元の有力者が参加し、一部分を請負うこともありました。例えば、西武多摩湖線武蔵大和駅近くに、通称「宮鍋隧道」と呼ばれるところは、東大和市高木の宮鍋氏が請け負った箇所です。

工事が着工されると、村は活気づきました。働く場、現金収入の場に村人が参加しました。当時の工法は人力による工事が多く、「女衆^{おんなやし}」もタコつきに出ました。



タコつき風景。これで、ローラーのまわれない所をつきかためた。6人用のタコである



左 タコつき風景 右 多摩組半天 (東大和市史資料編2 多摩湖の原風景 p 43)

作業員の就業システムもできました。東村山（廻田）の入山組、東大和（芋窪）の多摩組が東京都と作業員の就業について一括請負の契約を交わし、大和村の人々はこの組を通じて就業しました。多摩組の半天が残されていますが、胴回りに大きくローマ字で「YAMATOMURA」と印されています。

小学生には「むしろ敷き」のアルバイトに出るものもありました。堰堤の土ならしにムシロを敷く仕事で、話す人によって違いますが、1日20銭から30銭、時には40銭になったと云います。移転対象であった内堀小十郎さんはこの話をする度に、

『山、一坪と子どもの日当が同じだなんぞ、どこか狂ってるべえ……。聞くもん（者）は、涙が出ちゃ一、鼻水かんでよ……。』
と、言葉を途切れさせました。

作業員の日当は、一般の日当が13銭だったのが、移転の時は25銭、貯水池工事が始まると50銭になり、大正9年には、1円80銭、重労働の最高は3円25銭、コマワリでは5～6円になったと云います。よもやまばなし「58 綿入れ着ても無理だった（128）」の渡辺弥次郎さんは、大正11年頃、一日、1円～1円20銭をもらっています。

③ブームが去って、花火大会の空き瓶拾い

42 多摩湖の花火（95）

一時の建設ブームはそんなに長くは続きませんでした。ブームは去りました。大和町史は『……中藤に蕎麦屋や小料理屋が出来て、貯水池ブームの人達をひきつけた。村の人達の服装も食物も、貯水池建設を期に変わって来た。カレーライスが村に入ってきたのも、この時期である。

だが、ひとたび貯水池が出来上り、貯水池周辺が東京市民のリクリエーションの場となったときに、収入の途を失った人々は「竣工ト同時ニ夢想ニ引惑セラレタルカノ如ク茫然トシテ正業シ得難ク徒ニ都人士散策スルヲ瞥見シテ都会ヲ羨望シ青年男女ハ郷土ヲ去リ村ノ将来転寒心ニ堪ヘサリキ」と嘆かれるありさまに立ち至った。貯水池建設にともなう好況は、しょせん一時的なものにすぎなかった。』（大和町史 p 444）

としています。よもやまばなし「42 多摩湖の花火（95）」は、昭和5年（1930）に「たっちゃん池」東側の広場（太陽広場）で、仕掛け花火の打ち上げを伝えます。多摩湖鉄道が、この年の1月23日に、萩山～村山貯水池駅間の営業を開始しました。その宣伝とサービスの花火です。

電車で見に来る人も多かったそうです。その時、村では貯水池ブームが去っていました。村の人達も見物しましたが、景気付けが必要だったのは、箱根土地株式会社ばかりではありませんでした。

花火大会は昭和7年から4年間、村山貯水池、狭山公園でも行われました。国民新聞社主催で、大盛況であったと伝えられます。しかし、大和村の人々は別だったようです。東大和市史資料編2は、次のように記しています。

『しかし、大和村の人びとは、貧しさの中での農繁期、お茶の生産、春蚕の飼育も済んだとはいえ、田、畑の草取りなどで、とても花火大会を楽しむという状況ではなかった。労働に追われる日々、村の人びとは家で遠く見る程度、別世界の事のように思われたという。当時の村のようすについて、市内在住の関田精一さん(七十八歳)は語る。

とにかく村は貧しく、花火大会を楽しむところまでいかなかった。村の子どもたちは、花火大会が終わった翌朝、日の出のを待って、空ビン拾いや落ちているお金拾いなどをやっていた。あそこ空ビン(一・八割)一本一銭ぐらい、ビールビン、サイダービンは一本五厘で売れた。花火大会のはなやかさより当時の貧しさを思い出す。』

④野外映画

43 野外映画 (97)

昭和8年(1933)から11年(1936)にかけて、武蔵大和駅に近い大久保家の稲荷様の広場で、「43 野外映画 (97)」が開かれています。毎週土曜日、鉄道会社の人が電車で運んできた丸太を組んで、スクリーンが張られます。「月よりの使者」や「エノケンのちゃっきり金太」などが受けました。

多摩湖鉄道が、当時の村山貯水池仮駅(現・武蔵大和駅東南にあった)から村山貯水池下駅(多摩湖駅、現・西武遊園地駅)まで、狭山丘陵を切り開いて延長工事をしているときです。よもやまばなし「43 野外映画 (97)」では

『夕方になるとお稲荷さまと山ノ神(貯水池工事で東京都に買上げられた大久保家の山から移し^ま祀った)の両方に会社の飯場でつくった赤飯や油揚げ、野菜や魚の煮付などを皿に盛り会社の人が供え、暗くなると映画がはじまります。』

と、上映前に、神まつりをしている状況を伝えます。その「大久保家の山から移し^ま祀った」「お稲荷さまと山ノ神」は「50 火をふとこに入れた法印さん(111)」の修験・持宝院や大久保狭南が祀っていました。鉄道工事にはその鎮めが必要だったのでしょう。

右画像手前の橋が狭南橋、橋を渡って左側に、大久保狭南宅、画面一帯が持宝院の敷地、野外映画はこの奥で上映されました。



野外映画の終わった昭和11年12月30日に、村山貯水池仮駅―村山貯水池下駅間が営業を開始しました。これによって、起点を国分寺駅とする全線が開通しました。村山貯水池仮駅は廃止され、現在の武蔵大和駅が新設されました。多摩湖鉄道は、昭和2年11月16日に、箱根土地(株)が萩山～村山貯水池間・村山梅林～村山貯水池間の内燃鉄道免許を取得しています。早くも、貯水池の観光地化を読んでいたのでしょう。

村山貯水池建設は、大和村を首都へ鉄道で直結する役割を果たしたことになります。よもやまばなし「42 多摩湖の花火 (95) 43 野外映画 (97)」はその貴重な証言です。

(4) 移転

①家族総出で

移転は、大正4年、よもやまばなし「73 藤兵衛さんと狼 (163)」の藤兵衛さん一家が住んだ石川から始まりました。

谷の下から坂を越えての移転です。家も墓も遷されました。しかも、専ら人力、家族頼みでした。東大和市史資料編2は、次のように記しています。

『谷つのことであるから引っ越しの苦労は並大抵ではなかった。家屋を解体して運ぶ家が多かったから、大柱や桁や梁など牛車を二台つないで、今でいえばトレーラーのようにして運んだ家もあった。それはいい方で、朝早くから女の人も動員して手車で家具を何度も何度も坂を越えて運び出したという家もあった。』(p 56)



住吉神社から下貯水池方面を望む
(「東京市上水道拡張事業報告」第1回)

藤兵衛さん一家が住んだ石川の
住吉神社周辺

このようにして、総戸数161戸(みちの会復元では162戸)が別図のように移転しました。

②移転先

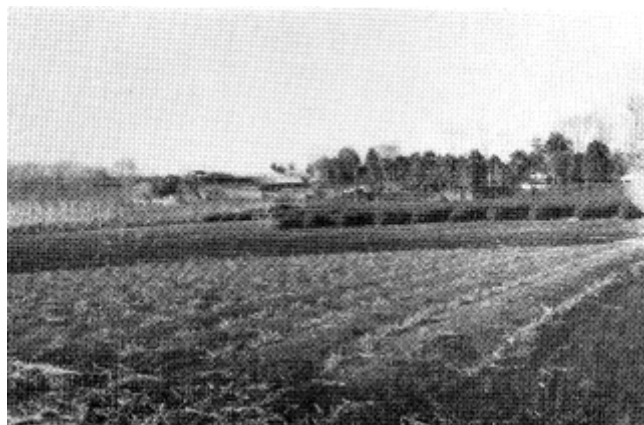
移転先の図を見ると、身を寄せ合うように集団で移ったことがわかります。一族で共同して移転作業を行っています。移転する先の土地の売買も、一族が話し合ったり、共同で購入して分け合ったと伝えられます。東大和市史資料編2は、次のように記しています。

『移転先は大体本村が多かった。石川では二戸が勝楽寺村と村山村へ移ったほかはほとんどが今でいえば、一丁目から六丁目まで広範囲だが本村地域で、多くは蓮華寺、慶性院、天王社など移転寺社の周辺に移っている。

当時、石川移転の石井弥一郎さんの語ることばに、
農地として二六〇～二七〇円で共同で買って 分配した。
とある。大正四年、一族や近所の人々がまとまって移転したのである。

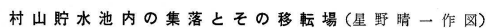
他の地区も大体同じで、狭山の竹内清さんの調査でも、谷つの生活はすべて共同体として動いていたのであり、その体制を崩すことなく新地へおもむいたのが当時の自然な人情であったという。竹内一族は七軒共同で移転工事を行った。一九一六年(大正五)春であった。

狭山では竹内一族のいた林地区のほか内堀、杉本などの字があった。地区毎にまとまって移転した・・・』(p 57)



移転先は丘陵と人家から南に離れた原でした

大正6年(1917)には、ほぼ用地の売り渡しが決まりましたが、8人が価格の面で交渉を続け、最終的には、国の強制収用もあって、大正8年(1919)に完了しています。



(大和町史 p 4 4 2)

③貯水池移転の結果

移転の結果、村では耕地が次のように変化しました。大和町史 p 4 4 6 をもとに作成

年	自作地			小作地			計		
田 畑 別	田	畑	計	田	畑	計	田	畑	計
大正元年	25.70	429.64	455.34	899.30	187.82	1087.12	925.0	617.46	1542.46
大正4年	25.69	429.64	455.33	10.78	182.76	193.54	36.47	612.40	648.87
大正14年	5.00	365.00	370.00	0.50	214.00	214.50	5.50	579.00	584.50

自作地が減少し、小作地が増大しています。さらに、農地の細分化が進んだと考えられます。また、移転161戸は、大正8年、大和村成立の時の戸数771戸の20%に当たります。

(5) 疲弊する村

「42 多摩湖の花火 (95)」で紹介しましたが、大正末から昭和初期にかけての大和村は極端に疲弊していました。特に、昭和2年(1927)に始まる金融恐慌と昭和5年(1930)の世界恐慌は、農村を不景気のドン底におとしいました。売るために作る農産物の価格を一挙に下げ、大和村には養蚕業に頼っていた零細な兼業農家が多く、その打撃は大きく、土地を手放さざるを得なかったものと考えられます。

①小作地の増加

昭和の初め、多摩地域の農家では一様に耕地面積が縮小し、小作地が増加しました。東大和市も例外ではなく、下表のような状況となっています。

年	自作地 (町)	小作地 (町)	計 (町)	小作地率%
大正 14	370.0	214.5	584.5	36.7
昭和 2	369.0	215.5	584.5	36.9
5	320.7	251.0	571.7	43.9
9	312.4	256.3	568.7	45.1
17	311.2	213.8	525.0	40.7

(東大和市史 p 313)

昭和9年から17年の間に農地が減少しているのは、東京ガス電気工業株式会社の進出に伴う用地買収の結果でしょうが、その要因を別にしても、大正から昭和にかけて、多摩地方の農業は現金収入を求める農業に転化しました。大麦や小麦と共に桑や茶の栽培が増加しました。それが農産物価格の不安定から、農業経営が行き詰まりを見せてきました。

②窮乏する農家収入

東大和市史は興味あるデーターを紹介しています。大正12年(1923)調査による農家所得調査です。

大和村の農家の標準的所得 (月)

田 (自作地) 1 反当たり	40 円	畑 (自作地) 1 反当たり	30 円
(小作地)	23 円	(小作地)	23 円

大和村	畑地3反農家の場合	自作地	年間	1080 円
全国平均	同			1200 円
都市勤労者平均				1377 円

これから見ても、大和村の場合、兼業収入がないと相当に厳しいものがあつたことがわかります。幸い貯水池建設に伴う臨時的収入がそれを代替していたとも考えられ、貯水池完成後、その厳しさは一挙に訪れたことと思われまます。

③関東大震災とやきもち

44 関東大震災とやきもち (99)

大正12年9月1日、関東大震災に見舞われました。大和村ではあまり酷い被害がありませんでした。その時、青年団が活躍します。よもやまばなし「44 関東大震災とやきもち (99)」は次のように伝えます。

『震災のあつた九月一日から数日たって大和村の青年団員が集り、各部落で六袋づつの小麦粉でやきもちを作りました。東京市内で災害にあつた人たちにたべてもらうためです。一袋十五キログ

ラムですから、焼くの一日かかりました。小麦粉に重曹を入れて大きなほうろくで一枚をかなりの厚さに焼きます。それを四角く切分けて袋につめ、翌日トラックで東京へ運びました。

新宿戸山ヶ原に救援物資を受付ける所があり、軍隊が管理していました。そこに運ばれたやきもち、お腹をすかせた東京市民の心をもふくらませました。青年団員のやきもち作りは誰にいわれたものでもなく、自発的に行なわれたものです。・・・』

小作地が増加し、農家所得が減少する中での話です。経済、社会的な背景からすれば、援助を受ける側であったとも思えます。

④生活改善十項

昭和5年（1930）、多摩湖鉄道の開通、花火の打ち上げがされる時、大和村は不況のどん底でした。12月20日、ついに「不況対策生活改善協議会」を設置し、生活改善十項を定め、節約を掲げています。その内容を見ると、当時の状況が目に浮かびます。

- ・年頭には松飾りを廃し国旗を掲ぐること
- ・年末年始並びに中元の贈答品は廃止すること
- ・葬儀は生け花、造花などは遠慮し凡て質素にすること
- ・入除隊兵の個人祝宴は絶対に廃止し、神前などで簡単に送迎式を行うこと
- ・病気見舞いは金子を贈り、其の返礼は絶対にせざること
- ・・・

十項の内、五項を紹介しました。順序不同です。

⑤経済更正指定村

昭和5年（1930）、世界恐慌は日本にも押し寄せました。それは都市・農村を問わず、深刻な影響をもたらしました。都市には失業者があふれ、農村には農産物価格暴落による疲弊が、人身売買を生むまでになったとされます。

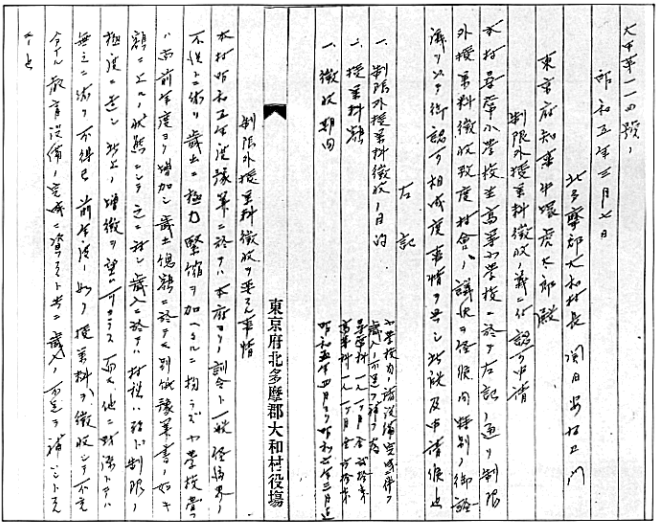
大和村もこの外圧は例外でなく、さらに、貯水池建設に伴う耕地の減少（三分の一）は厳しく、村には、貯水池の一時的ブームが去った後のピンチがこの時期に一度に重なりました。

一例ですが、当時の小学校（市町村立）は、原則として授業料は無料で、政令で徴収することを禁じていました。ところが、大和村では授業料を徴収しました。

昭和5年、東京府は、徴収してはいけない旨通知してきました。これに対し、大和村では徴収しなければ、不完全な教育設備が完成できないから、特例をもって制限外授業料の徴収を認めるように認可願いを出しています。内容は

制限外授業料徴収の目的 小学校内の諸設備完成に伴う歳入の不足を補うため
授業料額 尋常課 一ヶ月 金二十銭 高等科 一ヶ月 金六十銭
徴収期間 昭和五年四月から昭和六年三月まで

この措置は村会で議決をして行っています。提案理由を「村税賦課率は制限の極度に達するもの」なお不足するためとしています。教育の重視を叫びながら、いかんともしがたい痛切な訴えがあり



大和村から東京府知事にあてた制限外授業料徴収の認可申請書（昭和5年3月7日）

ます。

当時の大和村は純農村で、その農業は、零細経営の兼業農家が多くなり、穀物生産から、現金収入を得やすい養蚕へと転換していました。世界恐慌は真っ先に生糸の価格下落を来し、大和村の農業はその影響を直接受けました。

昭和6年（1931）、村は低利資金を導入して、桑畑の荒廃をくい止めようとしたましたが、不況はそれを上回り、効果は期待できるほどではなく、荒廃が進む状況でした。

昭和7年（1932）頃、よもやまばなしの主人公達は、生産と生活両面で借金を繰り返し、悪循環に陥っていました。政府は「農山漁村更正計画」をたて、農山漁村の救済に乗り出さざるを得なくなりました。

それは、「政府が特定の村を指定し、府県知事の指導下に、村長以下の村内有力者で構成された経済更正委員会に計画を立てさせ、各部落の実行組合を統制して、経済更正、負債整理をはからせようとするもの・・・」（大和町史 p 463）

でした。大和村は昭和8年（1933）、さっそく、経済更正指定村の指定を受けています。実に早い措置で、当時の村の置かれていた状況は一刻の猶予もおかせなかったことを語ります。昭和9年（1934）には次の組合が設立されています。

蔵敷養蚕実行組合	組合員66名	大和共同出荷組合	30名
高木農事改良実行組合	67	狭山養豚組合	70
大和養鶏組合	30		

また、昭和9年（1934）3月には、大和村負債整理委員会が発足し、大字（＝かつての村々）ごとに「負債整理組合」の設立を進めました。これは、「負債を抱えた農民らが組合をつくり、政府の融資と自助努力で借金を処理する・・・」（東大和市史 p 317）負債整理組合の設置によって危機を脱しようとするものでした。負債の概要は次の通りです。（大和町史 p 465～466）

第105表 大和村負債整理組合負債額 （1口、1000円以上）

組 合 名	負債総額	1口1000円以上の負債額	債務口数	債務者数	負債総額に対する割合
清水	66,000円	20,200円	7	4人	30.6%
狭山	86,000	10,500	7	7	12.2
砂	20,000	8,400	7	7	42.0
奈良橋	80,000	49,500	13	11	60.8
芋窪	85,000	32,980	27	20	38.0
計	338,000	121,580	61	49	36.0

（大和町役場「負債整理＝関スル書類」による）

この状況について、大和町史は、次のように分析します。

『なお、経済更生計画の一環として、負債整理組合が設立された。当時、大和村における村民の負債額は後に負債整理組合が作られた際の調査であるが、組合員のうち一口一、〇〇〇円以上のものだけで六一件、四九人、負債総額一二一、五八〇円に上っていた。しかも一口一、〇〇〇円以上の負債額は組合員総負債額の三六%にすぎず、その半ば以上は一、〇〇〇円以下の零細な負債であった。』

農民が、こうした負債に苦しむようになったのは、農産物価格が低く、工業生産物の価格が高いままに農業が資本主義経済に入りこんでいったことが基本的な理由であったが、恐慌以後の慢性的不況が、さらにこれに拍車をかけたのであった。農民は負債によって一時の窮境を切り抜けるので

あるが、しかしその負債がかえって重い足かせとなって生活を窮迫させ、更に負債を重ねて、生活を一路困窮へと追いやったのである。当時農民が負っていた負債を処理することは、解決しなければならない農村問題の一つであった。負債整理組合は、こうした問題を解決するために設立された。農村の負債者が組合を作り、政府の融資と自力によって自己の負債を整理しようとするものである。』（大和町史 p 465）

第106表 大和村負債整理組合一覧 昭和9.4

組合名	組合員	昭和9年度に借入れる最高限度	昭和9年度に貸付る1組合員の最高限度	組合経費	組合費総額	負債償還積立金	組 合 長
芋 長	47名	6,500円	1,000円	80円	47円	50円	尾 亦 仙 蔵
狭 山	45	5,000	1,000	72	45	145	町田彦二郎
奈 良 橋	37	8,000	1,000	73	37	50	森田九一郎
砂	20	3,300	1,000	52	30	30	町田染次郎
清 水	35	5,000	1,000	50	25	50	森田憲太郎

（大和町役場「負債整理ニ関スル書類」による）

これらの結果、やや改善が進んだとも考えられます。大和町史、市史ともに、「翌10年には、滞納されていた昭和6年度以降の村税がほぼ90%位納入されるまでに至った。」

としています。或いは、制度維持の上からも、納税第一に優先義務が課されたのかも知れません。

よもやまばなしの主人公達は、根本的な改善と事態の打開に迫られました。その時、現れたのが首都圏に相次いで立地を進めていた航空機産業でした。

⑥ハイヤーと乗合バス

39 ハイヤーの話 (89) 40 乗合バス (91)

村は厳しい状況が続いていましたが、昭和2年、石井さんは、1922年型フォードで、ハイヤーを開業します。お医者様やお嫁さんを乗せ、江ノ島や箱根、成田、下田などに家族連れを乗せます。

ハイヤーを頼むのに自転車で呼びに行くところなど、まさに昭和2年です。ガソリンは東村山の雑穀や灯油を売る店で一斗缶で買います。新宿まで青梅街道を走りますが、一カ所だけ荻窪に踏切があるだけで、他はノーンストップでした。

昭和初期、「芋窪バス」が走ります。武蔵村山市の現・あさひ銀行前から東村山駅までの定期バスでした。一日8往復、T型フォードの箱形で、15人乗り。お客は朝と夕方位で、先生や学生、役場の人が東京へ出る時などで、日中は買い物客がたまに乗りました。

この路線には、やがて「多摩湖鉄道バス」が走り、昭和11年（1936）には、東村山～横田間を箱根ヶ崎に延長しています。芋窪バスはこの前身でしょうか。

⑦多摩湖の桜

70 桜 (151)

多くの人に親しまれている周囲道路の桜は『昭和二年に村山貯水池（多摩湖）が出来た時に植えましたが、その時の木はほとんど枯れてありません。昭和九年に時計王といわれた服部金太郎氏が亡くなられ、翌十年に遺族の方から一万本の桜の寄付があり、主に人の多勢来る下貯水池のまわりに植えました。・・・』

と、よもやまばなしの主人公は秘話を語ります。

Ⅲ 航空機産業・軍需工業・南街の出現

47 南街のブラスバンド (105) 48 賛報会館と映画館 (108)
49 日立だんたと日立乞食 (110)

(1) 東京ガス電気株式会社立川工場の建設

昭和13年(1938)、航空機産業の一つである東京瓦斯電気工業(株)立川工場(昭和14年、日立航空機株式会社と名称変更)が大和村に土地を物色してきました。隣接する立川町の陸軍航空廠に納める航空機用の発動機を生産する工場です。

①なぜ大和村に？

貯水池と同じように、なぜ大和村が選ばれたのでしょうか？基本的には、府中市史が記すように『三多摩への軍需工業の進出は、従来、機械工業の中心地である大森・蒲田・川崎・横浜などの京浜地区が、軍需産業の発展により次第に飽和状態になるに及んで、昭和の初め頃から、兵器工場やその関連工場が三多摩地域に次第に設立されるようになった。』(府中市史 下 P733)

と思われます。直接の動機は、東大和市史編纂過程で明らかにされました。それは、

『陸軍航空本部長より陸軍専管航空E/G生産工場(空冷星型月産150台の生産能力)建設命令下り・・・』(東大和市史資料編1 軍需工場と基地と人びと p38)

と陸軍の意思が働いていることでした。そして、『新工場は、大森工場の約十倍の能力と約三十万平方メートル(約十萬坪)の用地を必要とした。立川周辺で、この面積の森林や不耕地を探し出し大和村と決めた。』(東大和市史資料編1 軍需工場と基地と人びと p27)とされるように、立川飛行場に近いことでもありました。



飛行第五聯隊の格納庫とその周辺
中央上 諏訪神社 郷土たちかわ p110

②理想工場・理想工業都市の実験

東京瓦斯電気工業(株)の本社は「大森」にありました。航空機、自動車、計器を生産していましたが、それぞれが分離し航空機部門が立川飛行場の近くに移ることになったものです。工場建設に当たって、重役は**理想工業都市**の建設を目指し、次のように考えたと言われます。

『・・・ジードルング制度に瓦斯電の重役が注目していた。航空機部門を拡大するにあたって、大森などで仕事をしているべきではない、むしろ郊外に広大な土地を取得して、そこに立派な工業都市をつくりあげたい。そして生産を主体として、そこで働く人たちの福祉も考えた工業都市を建設しようという、ジードルングよりもさらに進歩した内容を持った夢を描いていた。

一九三七年(昭和十二)、会社の方針として立川飛行場の北、大和村に理想的な工業都市を建設することになった。そのころ、大森地区で働いていた従業員は、だいたい小学校の卒業生を地方から募集して、採用した人びとが主力になっていた。ところが大森地区の環境は、いわゆる三業地(料理屋・待合・芸者屋)として大小の料理屋や風俗営業といわれるものや飲み屋などが軒を連ねていた。

こんな環境では折角地方から募集し採用した純な従業員も良い従業員として育成することはむずかしい、何とかしなくてはいけない、と会社では考えていたようだ。・・・』

ジードルング制度 『ドイツナチスによるジードルングの運動というのがある。労働者に職を与え、土地と家屋と家畜とを与えて、安定した生活をつくりあげる。労働者は一日の労働に疲れて自宅に帰り、新鮮な空気を吸い、和やかな家庭的慰楽の生活に浸り、新しい明日への活動に対する力を回復するという都市構想、これがジードルングで、当時ドイツで企業経営に多く使われていた。

ジードルングというのは、都市郊外に一団として建設される集合住宅という意味である。ドイツで一八一八年住宅法が制定され、特にその政策を工業を主体とする企業が採り入れている。(元日立航空機専務内山直さんの手記)』

以上、東大和市史資料編 1 軍需工場と基地と人びと p 23～26 抜粋

これらの方針から、上図の通り、工場と社宅が区域を接しながらも分離する建設方法が採られることになりました。右端道路交差部が現東大和市駅、左に走る道路が桜街道、桜街道の南側＝図下方が、工場で、桜街道北側が住宅、厚生施設と、工場と住宅・厚生施設部分を分離しています。

- ・総坪数100万坪 ・工場50万坪 ・福祉地区50万坪
- ・福祉施設 社宅 物品配給所(日用品販売) 診療所 郵便局 映画館 幼稚園 公民館(借和館
- ・ 同和館)

③用地買収

昭和13年(1938)1月、用地買収交渉が開始されました。地下には砂利層が厚く、農産物も多くは生産できなかった土地ではありますが、かつての貯水池移転の実情を知り、一方、昭和恐慌のどん底にあった村の人たち、土地所有者にとっては、その対応に複雑なものがあつたに違いありません。しかし、昭和恐慌のどん底にあったことや、村内には誘致の動きもあって、用地買収は、順調に進んだとされます。面積は

当初 264,480平方メートル(8万坪)
第一次拡張 112,400平方メートル(3万4000坪)

地価は、当初990平方メートル(約300坪)400円であつたものが、600円まで値上がりしました。4月には、ほぼ必要敷地の用地買収は終わりました。

④水源調査

工場建設には、工業用水の確保が基本になります。昭和13年(1938)1月、今から辿ると不思議ですが、用地買収と水源調査が同時進行しています。

貯水池や玉川上水からの取水も検討されたと云われますが、さすがに、許可されなかつたようです。単独の工業用水を得ることが先決となって、大森から調査グループが先遣されて来ました。今は取り壊されて、なくなってしまった給水塔のあ



った箇所、ボウリングが行われました。

この辺りの水層は何層かに分かれています。ボーリング中、その水層に達する度に、大工場の給水に耐える水量が得られないことがわかり、いくつかの水層を掘抜いては悲壮感が生じました。関係者注目の中、深さ150mで、ようよう望まれる水脈にたどり着いて、その時は、思わず拍手が湧いたと聞きました。1日、200石の湧水をもとに、1938年（昭和13）5月給水塔が完成しました。

⑤工場と住宅建設・国策会社日立航空機株式会社

工場と住宅建設

昭和13年（1938）5月1日、地鎮祭、10月本工場完成。設備機械搬入。先遣隊が大森工場からやってきて、大和村や砂川村の農家の蚕室などに寝泊まりしました。

寮は12月に完成し、昭和14年1月9日、仕上組立工80名が入居しました。親和寮（職員）純和寮（女子）、明和寮（準職員）、温交寮（製造）などがありました。

社宅は、昭和14年（1939）1月から入居を開始しました。1000戸 寮37棟

国策会社日立航空機株式会社

昭和14年（1939）5月、東京瓦斯電気工業（株）は日立製作所と合併し、各部門ごとに子会社として新しい会社を設立しました。資本金のある日立製作所の管理に移されたとされますが、次のように新部門が分かれているところを見ると、兵器産業への総合化が図られたのでしょうか。

航空機部門 日立航空機（株）5月15日

兵器部門 日立兵器（株）

造機部門 日立工作機（株）

日立航空機（株）は大森・立川工場で発動機、羽田工場で機体をつくることになりました。ここで、東京瓦斯電気工業（株）の理想工業都市構想は軍需産業工場へと変化しました。

早速その変化は現実のものとなりました。2戸建ての住宅は4戸建てとなりました。主力は航空機エンジンの工場拡張、生産増強に回されました。

工場の拡大

昭和15年（1940）には

敷地 971, 733平方メートル（29万坪）

建物面積 103, 295平方メートル（13年の建設時 39, 845平方メートル）

・住宅地を含めると

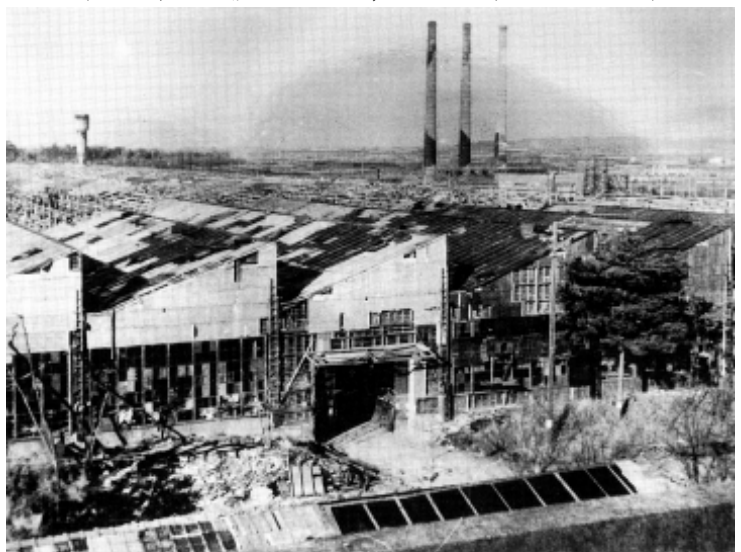
敷地 1900, 847平方メートル（57万5000坪）

当時の大和村の面積は13.5平方キロ

地域的には、ざっと、現在の西武拝島線東大和市駅～玉川上水駅間を占める区域です。現在の西武拝島線はこの工場への資材を運搬する引き込み線でした。

右画像は空爆後の写真ですが最終的な工場の規模がわかります。

東大和市史資料編1 p 75



爆撃のすさまじさを残す工場（右に3本煙突、左に給水塔が見える）

昭和18年（1943）には、
住宅 632戸
（大和村総戸数1,826の34,6%）
従業員 1万3,000人

⑥狐に化かされて工事現場に

79 娘っこに化けた狐 （176）

貯水池から移転してきた人でしょうか、清水に住む 50 半ばの男の人が現在の三光院の西側を村の寄り合いの帰りに通ります。小高い山になっていて、檜や桐が生い茂り、一本だけ高い杉の木がそびえ立っていました。

その辺りに来ると、風もないのに提灯の火が消えて、大杉の傍らに若い女が立っています。

「はて、見なれない娘だが……。こんな時間にどうしたのか。」

と不審に思ったところから、足首の辺りまでどっぷり水につかって空堀川の中を歩いています。その後も、迷いに迷って、たどり着いたのが、昼夜兼行で突貫工事を進めていた大工場の建設現場でした。

ジードルンク思想による、職住近接、生産と福利の一致を目指した東京ガス電気工業（株）の工場建設、後には、爆撃のねらい打ちをされる軍需産業の拠点、その傍らで起きたお話です。四方山話のワサビがききます。



現在も残る三光院近くの雑木林

⑦千社まいり

13 千社まいり （30）

東京瓦斯電気工業（株）が日立製作所と合併して、国策会社日立航空機株式会社となった、昭和14年（1939）頃、召集された兵士の武運長久祈願のため、青年団が千社まいりを行いました。

『出征した兵士の名前を書いた千枚の紙札を、近郷の村々を駆けめぐり、鳥居のあるお宮さんならどんな社殿にでも貼り付けるのですが、千社という数は大変な数でした。それでも四方八方に手分けして巡拝しているうちにコースも決まり、東は田無、西は青梅、南は日野、北は川越あたりまで二人一組になって朝の四時頃には出掛けました。』

と云うように、自転車で、千のお宮を廻ったことが記されます。昭和19年頃になると召集令状がきても送ってくれる人もなくなったようで、手一杯なことと、銃後の守りに少しばかり陰りが出てきたのでしょうか。

⑧零式・赤とんぼのエンジン

日立航空機（株）立川工場は

昭和17年（1924）1000馬力のエンジンを生産しました。

昭和20年（1945）2500馬力のエンジンに着手しました。

生産実績 陸軍機 ハー12他 7、466機

海軍機 天風21他約 1、479機

工作機 600台

従業員 昭和19年（最盛期）13,896人

を数えるようになりました。総力戦体制の中で、これまでは主として練習機用小型エンジンを作っていたのが、戦局の推移に伴って、戦闘機用のエンジン生産に移行する事になりました。その実験用の施設も作られました。しかし、その段階で終戦を迎えました。

⑨南街のブラスバンド

47 南街のブラスバンド（105）

日立航空機（株）の工場に青年学校がありました。若い工員の教育機関です。この青年学校に、音楽部が設けられてブラスバンドが作られました。5～6人で発足したクラブが50名余の吹奏楽団となりました。毎朝の朝礼、儀式などで活躍しました。

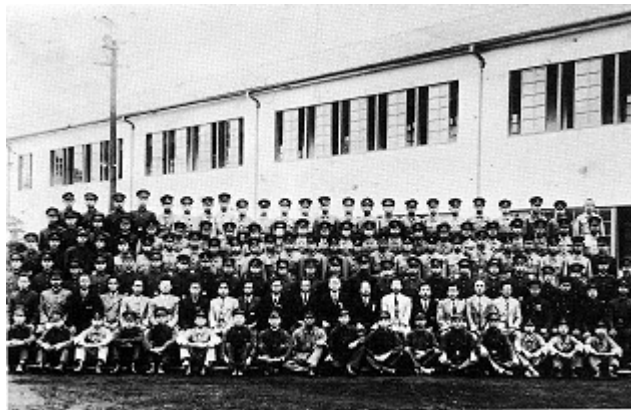
戦争がたけなわになった時、徴用工として、「上原げんと」や「白井けんみ」などの音楽家や画家などの芸術家も工場に来て、音楽クラブを指導しました。また、ジャズバンドもこの人達によって編成されました。47 南街のブラスバンド（105）は次のように記します。

『会社では、この人達にジャズバンドをつくってもらい厚生課に籍を置き、工場の食堂で昼休みと夕方の三十分を「一機でも多く早く前線へ送ろう」と生産増強に励んでいる工場の人達に、ひと時の安らぎと意気向上のため、歌謡曲や軍歌（主に歌謡曲）を毎日演奏していました。また日立系の他の工場にも会社の車で慰問して廻り、千葉県など遠い工場のときは一泊でゆきました。このバンドの編成は七人でバイオリン二名、ベース、ドラム、チェロ、ギター、ピアノは紅一点、アメリカ帰りの女の人弾き、歌手が一人、この八人で行動していました。』

今、考えると信じられないような話ですが、ブラスバンドの指揮者が

『そういうもんなんだよな。人間の集団なんだから……。頭が固い人もいたけど、そうじゃない方が多かったんじゃないの……。？』

と、懐かしくて涙を出しながら話してくださいました。



日立青年学校開校式（2年生以上）（昭和14年4月）

青年学校（東大和市史資料編 1 p 43）

この建物が東大和市最初の中学校になりました。

⑩産報会館と映画館

48 賛報会館と映画館（108）

よもやまばなし「48 賛報会館と映画館（108）」は第二次世界大戦中の産業戦士を励ますための慰問開場と映画館の話です。

賛報会館

賛報会館は二つありました。現在の市民ホール
の近くと、現在の南街市民センターの場所です。
東大和市史資料編4から引用します。p 3 8

『・・・。「産報」とは産業報国のことである。
一九四〇年(昭和十五・皇紀二六〇〇年)日本の全
労働組合が解散し、それに代わって大日本産業報
国会が設立された。資料にあるとおり、全産業一
体報国の実を挙げ、以て皇運を扶翼する、いいか
えるならば全労働者一致して戦争に協力し、国(皇恩)に報いるという意味である。



床自体坂になっていて、舞台は低い位置にあり、客席はうしろにいく程高くなっていた。とても
見やすくできていて、舞台に紅白の提灯が飾ってあった。

お花や裁縫などのけいこの場としても使用されていた。また会社が芸人を呼んだりした。「浪花
節」を聞いた事がある。「楽団」が来た事もある。「演芸のゆうべ」が行われたりもした。』

映画館



東大和市史資料編4から引用します。p 3 6
『映画館は、現在の「いなげや」の場所に二階
建てで建てられていた。

楽しみの少ない時代、従業員たち唯一の娯楽
の場であった。切符は会社から、従業員に配符
された。

洋画の「牢獄の花嫁」「にんじん」、邦画では
「愛染かつら」桑野みち子と笠智衆の「大いな
る翼」その他に「天保水滸伝」「姿三四郎」「唄
うたぬき御殿」などが上映されていた。

徴用工で働いていた上原げんが作曲した曲
を演奏したこともある。

戦後、労働組合の催しものも映画館を使用したり、映画館の舞台で、会社の演劇部が「牡丹灯籠」
「バラ姫」などの劇を行ったりした。それから、選挙の立会演説の会場にもなった。

隠匿物資摘発委員長だった、参議院議員石田一松が、「のんき節」などで出演したこともあった
という。(画像は東大和市史資料編1 p 3 1)

⑪鉄道の引き込み（西武拝島線の前身）

47 南街のブラスバンド (105)

よもやまばなし「47 南街のブラスバンド (105)」で、資材運搬のための引き込み線完成の日、
初運転を迎えてブラスバンドが「軍艦マーチ」で歓迎するシーンがあります。

この路線は、日立航空機立川工場専用鉄道と呼ばれる路線です。昭和17年(1942)に、日
立航空機(株)が西武鉄道(株)に要請して、西武鉄道川越線小川駅から工場まで専用鉄道を敷設
するため、10月7日免許の申請をしました。

日立航空機(株)から提出された鉄道大臣への申請書には「陸軍御当局の下命に依る当社生産力
拡充資材並製品等の輸送のため」と記されています。昭和18年(1943)8月26日、鉄道大
臣から免許されています。条件は「昭和18年9月25日までに着手し、昭和19年9月25日までに

竣工すべし」でした。

建設費 90 万円で敷設工事を完了させ、昭和 19 年（1943）4 月 21 日、試験運転を行い、（東大和市史資料編 1 では 3 月 25 日運輸開始としている）支障なかったことが確認され、5 月 1 日、専用鉄道の運転管理を西武鉄道に委託することが許可されています。

これが、現在残されている資料から読み取れることですが、「47 南街のブラスバンド（105）」では、「昭和 18 年の頃」としています。若干記憶違いがあるのかも知れません。いずれにせよ、初運転を迎えてブラスバンドが「軍艦マーチ」で歓迎した軍用路線が、現在拝島まで延伸されて、西武新宿まで直通で、多くの利用者に利便を供していることは喜ばしい限りです。

⑫ねらい打ちされた中島飛行機、日立航空機

この工場群は、昭和 20 年（1945）、アメリカの艦載機や B 29 の直撃を受けました。

昭和 20 年 2 月 17 日（艦載機グラマン 銃撃）全工場の 30 %破壊

昭和 20 年 4 月 19 日（P 51 戦闘機 爆撃）

昭和 20 年 4 月 24 日（B 29 爆撃機 爆撃）工場全滅

の 3 回にわたる攻撃で、工場は壊滅状況になりました。攻撃された他の工場やそのルートから、中島飛行機（株）と日立航空機がねらい打ちされたことがわかります。多くの死者が出ましたが、広い壕に退避した工員が爆弾の炸裂の振動で壕が押し潰されて窒息死したと伝えられます。

日立航空機関係者 111 人の名が犠牲者として名簿に残され、「殉国産業戦士供養塔」が、東大和市狭山の「円乗院」にまつられています。



東大和南公園に爆撃跡の残る変電所と解体された給水塔の一部が保存されています。爆撃を受けた工場の跡地は、昭和 27 年（1952）米軍のアジア戦略の一環として、立川基地の附属施設、「兵舎」用地として強制収容を受けました。

市民挙げての長い返還運動の結果、昭和 48 年 6 月 5 日、返還され、3 分割有償を原則とする基地跡地利用のもとに、住宅、公園、国施設などに利用されることになりました。

(2) 南街の出現

49 日立だんなと日立乞食 (110)

よもやまばなし「49 日立だんなと日立乞食 (110)」はキツイ話です。本村に住む人が南街人（日立航空機に勤めていた人達）に対して感じた戦前と戦後の評価です。

①赤っ風の中のルンルン社宅

当初、東京瓦斯電気株式会社が持った工場建設計画（昭和13年・1938、）は、ジードルング方式と呼ばれる「工場と従業員の社会生活を一体化した企業体」（東大和市史資料編4 P22）でした。

このため、工場と社宅、寮、診療所、郵便局、映画館、幼稚園、クラブハウス・集会施設、スポーツ施設、浴場などがつくられました。また、南街駐在所が置かれました。

社宅は桜街道以北に建設されました。東京瓦斯電気工業（株）の当初の社宅計画は、社員住宅は1戸建て、工員は2戸建てを原則とするものでした。日立航空機（株）になって、4戸建てが建てられました。单身者には寮が建設されました。



昭和29年（1954）、大和病院南側道路から東方面を見た状況です。遙か彼方に狭山清水方面が見られますが、一面の畑です。冬、この畑からは風に吹かれて土が舞い上がり、**赤っ風**と呼ばれ、少しの隙間からも部屋に押し入り、たちまち畳をざらざらにしました。



東京瓦斯電気株式会社が工場や社宅を建設したのはこれと同じ状況の地域でした。そのために、一風吹けば真っ赤に赤土が舞い、目に土埃が入ったとされます。

それでも社宅は、輝いて見えました。衣服の物珍しさも当然でしたが、水道と下水道完備、テニスコート、福利施設などが、本村の村人にとっては垂涎の的でした。

東大和市史資料編4 p 76

②生国はほとんど全国

日立航空機（株）立川工場の就業者数は、新工場建設時3、000名の予定で出発しましたが、昭和19年（1944）には、13、896人に達しています。

その出身地は、『宮城、青森、山形、新潟、福島、富山、静岡、滋賀、北海道（小樽、札幌、富良野、夕張、奥尻）、石川、埼玉、東京、栃木、長野、群馬、岩手、秋田、福井、神奈川、山梨、三重、愛知など県民大会ができる程大勢各県から来ていた。』（東大和市史資料編4 新しいまち南街 p32）とされるほど多様でした。寮に入る若者も、社宅の人達も生まれ故郷は全国的でした。

昭和22年（1947）、大和村の総人口は11,746人でした。東京瓦斯電気工業（株）のできる以前、昭和10年（1935）の人口は5,780人でした。この人口がほぼ、旧来の狭山丘陵根通りに住んだ、いわば本村地域の人々と考えられます。これからすると、6,000人前後の人々が「狭山丘陵の根通り」と「南街」の二つの区域に分かれて住んだことになります。

一方では、江戸時代からの農業を中心とする地元民、それと離れた場所に全国的規模の故郷を持つ、工業従事のサラリーマンの人達が住んで、日常的な交流はほとんどもたれませんでした。これが終戦当時の大和村の姿でした。

③山うなぎの蒲焼き

45 山うなぎの蒲焼きとステッキ（100）

地方から日立航空機（株）立川工場に就業した若者の話です。現在の玉川上水駅は雑木林が続いて、長さ70㍍～1㍍くらいの蛇が沢山いました。「日立航空機に動員された青年の中に、へび取りのじょうずな人が」いて、簡単なへび取り器を作って簡単にとりました。

とったへびの肉は骨つきのまま、4～5㍍に切って串に刺し醤油を付けて焼いて食べます。これが山うなぎでした。また、へびでステッキを作った人もいました。戦争末の頃の話でしょう。

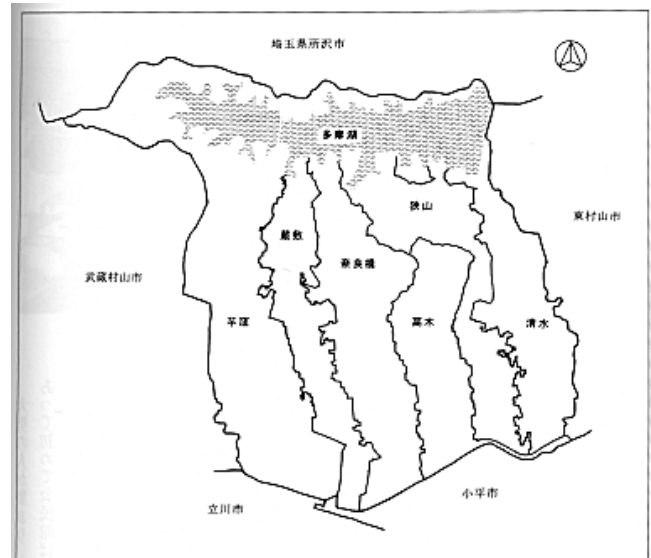
(3) 本村と南街

①カツドウ館とユヤと南街もん

人の住まない原の中に一つの町が出現しました。狭山丘陵の麓の住民から見ると「南の街」であり、「みなみまち」と呼びました。通称は「なんがい」でした。

村では、昭和14年(1939)、「行政上庶務便宜のため」村会の議決により「本村南街1区、2区、3区」としたこともありましたが、しかし、定着せず、工場側がつけた「親和」「栄」「末広」などの呼称が使われていました。

「南街」と決まったのは、昭和55年(1980)町名地番整理によってです。この間は、慣例上の地域名が、住人の意識の違いを内包しながら一人歩きしていました。



町名地番整理事業実施前の町割

町名地番整理以前の町名
(東大和市史資料編4 p150)

先に紹介した「映画館」が南街(今のイナゲヤ)にあした。本村の年寄りは、一種の羨望を込めながら「カツドウをやる所」と呼びました。社員の住宅には風呂が付けられましたが、工員住宅にはなく、共同浴場が設置されました。「大和湯」です。本村の人は

「あんちゅたって、南街もんはユヤで風呂へへエルだからな・・・」
と云ったと伝えられます。

終戦直後は食糧難がやってきました。南街の人達は着物を持ってジャガイモやサツマイモと交換に本村に来ました。農家は家を建て替え始めました。

「お百姓さんは、ニコニコ笑ってるけど、何考えているのか分からない・・・。」

「玄関に居るとよ、匂って来るだんべ・・・。ハーモニカ長屋も大変だよな・・・。」

②日立だんなど日立乞食

49 日立だんなど日立乞食 (110)

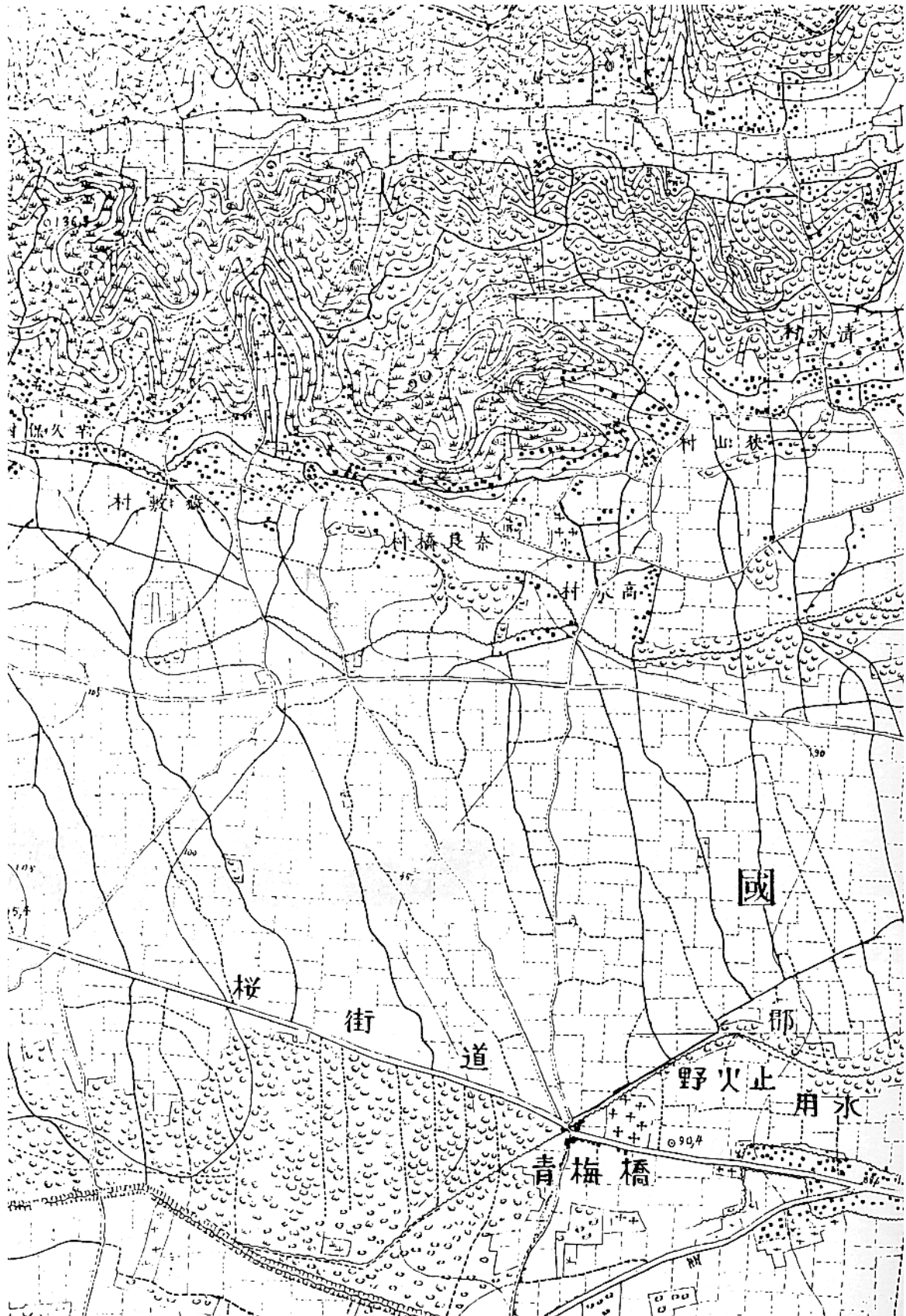
『せな(長男)以外の男の人達は、工場で工員さんとして、大勢働いていました。工員さん達は収入がよかったので、赤ちょうちんの飲みやさんで、いつもにぎやかに飲んでいました。なかでも日立航空機(小松ゼノアの前身)に勤めていた人達は、特に人気があり、「やあ!日立だんな」「さあさあ、日立だんなどうぞこちらへ」といわれて、大変もてていました。

しかし、戦争末期に会社は爆撃を受け、大半を焼失してしまい、戦後は反対に景気が悪くなってしまいました。ここでも都会の人達と同様に、物々交換のため着物など持って、農家に食糧の買出しに出かけました。

今度は日立だんなではなく、「南の日立乞食が来たよ」などといわれた人もいたそうです。』

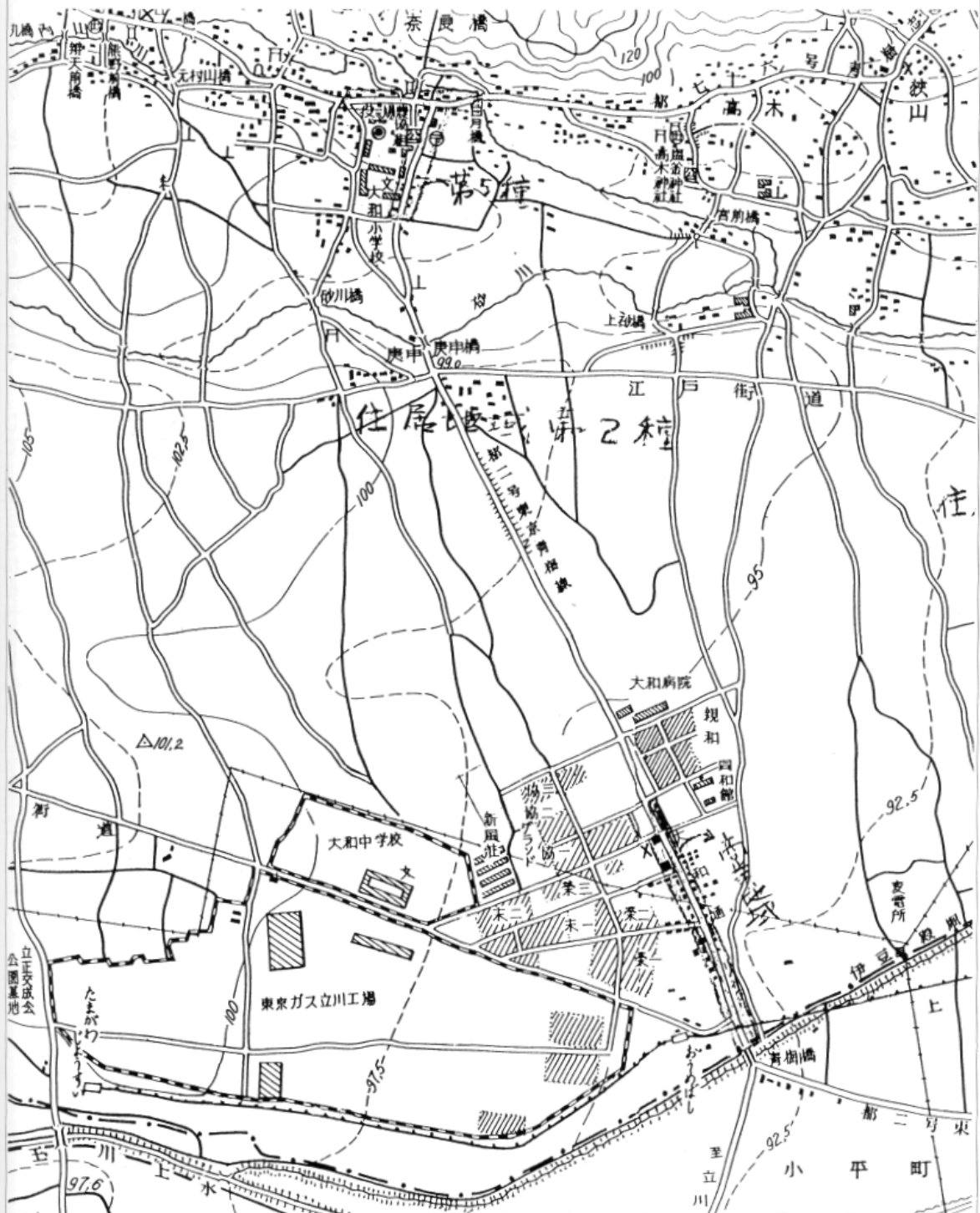
厳しい話ですが、当時の状況を良く伝えます。次ページに、明治13年測量、同年製版 陸地測量部30,000分の1の地図を掲げますが、青梅橋から桜街道の付近は、東京ガス電気工業(株)が工場と住宅を建設したときとほぼ同じ状況でした。

全く離れた地域に、二つの地域が別れて存在していたことになります。



(東大和市史資料編 4 新しいまち南街 p 19)

昭和26年1月の大和村の状況（南街を中心として）



（東大和市史資料編 4 新しいまち南街 p140）

昭和26年（1951）の地図ですが、奈良橋庚申塚の江戸街道周辺へ貯水池から移転された方が住む以外は南街まで無人の状況でした。第二号東京青梅線と呼ばれた青梅街道は未舗装で砂利道でした。

よもやまばなし「49 日立だんなど日立乞食（110）」はこの距離と空間をもさしています。しかし、そう遠くない時期にこの溝は埋まりました。

③学徒動員、小学校が仲間づくり

小学校6年生を卒業すると、学徒動員がありました。本村の高等科の生徒は「ヒタチ」へ動員されました。全国からやってきた工員と一緒に働きました。爆撃の中、一緒に畑のお茶の木のもとに逃げました。生きるか死ぬかの交流が深まりました。

小学校は、現在の第一小学校が現在の地にあるだけで、南街の子は第二小学校（昭和28年、第一小学校分校で発足）ができるまで第一小学校、中学校仮教室に通ってきました。中学校は現在のダイエーの所にあった「日立青年学校」の一部を使って開始されました。本村の中学生達は第一中学校（昭和31年）ができるまで、ここに通いました。それぞれに、本村の子の白米弁当を分けて食べました。

こうして、離れていた地域は結びついてきました。昭和22年（1947）、新憲法のもとでの第一回統一地方選挙が実施されました。村会議員定数26名の内、6名が南街から当選しました。工場の従業者から地域居住者になった、この代表達は、次々と南街地域の整備について発言し、「南街議員団」と呼ばれました。呼ぶ方も呼ばれる方も、一杯はいると、『同じ土俵に立つベエや』と確認し合ったと云われます。

（4）米軍大和基地

第二次大戦後、工場跡地は一部が国に物納され、残りは元地主に買い取りを求める話が出ました。しかし、農地に適さないとの理由で、精算会社日興工業株式会社より西武鉄道に売り渡されました。

昭和27年（1952）米軍のアジア戦略の一環として、立川基地の付属施設、「兵舎」用地として西武鉄道の用地は強制収容を受け、村民の激しい反対運動にもかかわらず、第3014米空軍施設「大和基地」が建設されました。

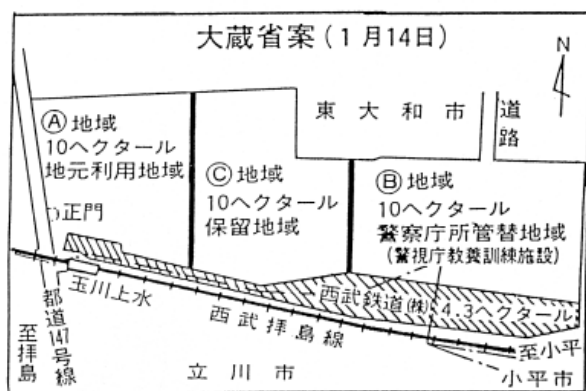
近くの旧日立航空機（株）青年学校（現ダイエー）の校舎を利用していた大和中学校が現第一中学校にへ移転しました。

東大和市史資料編1 p 159



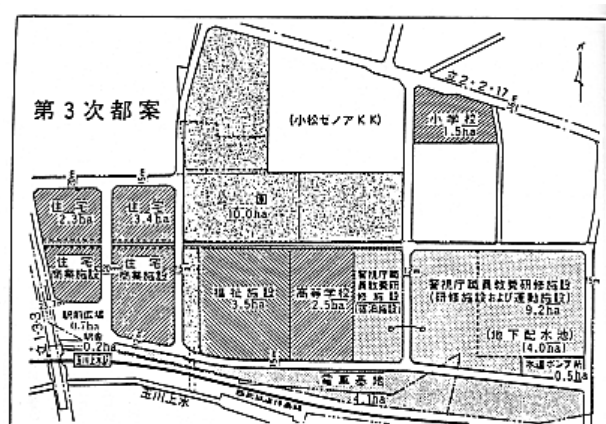
大和基地の早期返還と市民のための跡地利用を求める市民の署名、実に33,000人を超えた

その後、市民挙げての長い返還運動の結果、昭和48（1973）年6月5日、返還され、3分割有償を原則とする基地跡地利用のもとに、住宅、公園、国施設などに利用されることになりました。



国が提示してきた3分割利用計画案（昭和51年1月14日）

東大和市史資料編1 p 163



昭和55年7月30日に示された都の第3次案

東大和市史資料編1 p 173

IV 新しいまちづくり

99 土の中から出た表忠碑 (216) 84 狭山丘陵の古狸往生記 (184)

狭山丘陵の谷ツと南に広がる武蔵野の原を開拓して、生活の基盤をつくってきた、よもやまばなしの主人公達は第二次世界大戦の破壊の中から立ち上がりました。

(1) 戦後復興と町

99 土の中から出た表忠碑 (216)

日立航空機(株)立川工場の爆撃によって、壊滅的な破壊を受けた工場地域とほとんど直接的な攻撃を受けなかった狭山丘陵南面に広がる従来の村は、二通りの対応を見せました。日立航空機(株)立川工場で医師を務めた梶山盛夫さんは「今は昔大和村」で次のように記しています。

『昭和二十年八月十五日の戦争終結に続く軍需工場解体で、本村は農を主とする本来の姿に戻り、南街は他に例を見ないような失業者集団の住む孤島に変貌し、住民はまさに敗戦日本の落とし子であったように思う。』(p 113)

本村の青年団はいち早く炊き出しをします。大釜で雑炊が無料配布されました。食糧難に喘ぎ、伝手もない新住民にとって、命の糧となりました。小学校も授業を始めました。教科書は従前のものを使い、一部を墨で塗りつぶしました。第一小学校に建てられていた表忠碑が問題になりました。

①表忠碑

第一小学校の教員であった野沢茂さんは、東大和市史で次のように話しています。

『そのころ、現在の東大和一小へ外国人二人が来た。恐れおののいていると、"恐くない。恐くない"と言った。GHQ 民生局の人だった。戦争に関係あるものをおくなという指令のもとに、校門わきの奉安殿をこわし、歴代天皇の掛軸・日露戦争の戦利品の鉄砲・プロペラなどを処分した。』(野沢茂談)』(p 375) (安島注 そのころは昭和 21 年頃)

よもやまばなし「99 土の中から出た表忠碑 (216)」は、日清・日露戦争とシベリヤ出兵に従軍した兵士の氏名が刻まれた碑が、二つに折られて、土に埋められていたのが掘り出されて、殉国慰霊塔の近くに遷されている話です。

東大和市史では、『GHQ の命令で、築山をこわして埋めようとしたが、大きくて埋まらず、重くて運ぶこともできないので、二つに折って埋められてのだといわれているのに二つに折って埋められたものだといわれている』としています。(p 375)



②第一回統一地方選挙(村議・村長選)

昭和 22 年 5 月、戦後最初の地方選挙が行われました。これまで、議会の中から選出していた村長が住民の直接選挙で選ばれ、幅広い権限を持つ村会議員も同時に選挙されました。村会議員定数は 26 名で、6 名が南街から当選しました。地域的に離ればなれで、生活慣習も違う本村と南街の対立は継続しますが、同じ土俵で議論ができるようになったことは大きな救いでした。

③町となる

昭和 29 年 5 月 3 日、大和村は大和町になりました。村を町にする申請書には

昭和 28 年 10 月 1 日現在、大和村全戸数 2, 153 戸、内、連たん戸数 1, 505 戸、

総戸数の 69.9%

総人口 12,800 名、

都市的業態に従事する者及びその者と同一世帯に属する者の数
7,757 名（全人口の 60.6%）の数値を上げ

『村の形態、人口、戸数、交通等、村落の姿を脱して、商工業その他の住宅地として愈々発展性のある事は確実』としました。

（２）調和ある住宅都市

①スプロールと人口急増

昭和 30 年代に入ると、大和町は新たな外圧に晒されます。首都東京の膨脹による影響で、昭和 33 年、清水の第一都営住宅をはしりとする 3,300 余戸に及ぶ都営住宅の建設、公社及び民間による大小分譲宅地の造成に象徴される、スプロール化と人口急増、急速な住宅都市化です。

②プレハブ校舎の建設

昭和 33 年に清水に第一都営住宅 44 戸が建設されると、せきを切ったように団地が建設されはじめました。昭和 35 年には 57 戸、36 年には 809 戸、37 年には東京街道団地 1,995 戸を含む 2,425 戸が建設されました。

さらにこの間、第一光ヶ丘団地(分譲住宅地)450 戸、つづいて民間による分譲住宅地約 700 戸の造成が行われるなど、わずかな期間に約 15,000 人の人口増をもたらしました。そして昭和 45 年 3 月には、芝中団地 876 戸が入居し、約 2,000 人の増加となりました。

多岐にわたる問題が発生しました。上水道、下水道、ごみ処理、環境、都市整備、保育など、あげるときりがありません。特別の問題は教室不足です。増築に増築を重ねても不足し、プレハブ校舎の建設でまかないました。

③市となる

人口は急増し、都市基盤や都市施設の整備と併せ、福祉施策の充実が求められました。町の行政では限界があり、より自立した地方団体として、地方債の導入、福祉事務所の設置などが可能となる「市制」を目指し、運動が続けられました。

昭和 45 年 10 月 1 日、3 万人市政の特例を適用して、大和町は東大和市となりました。ただし、翌、昭和 46 年 4 月に行われた、市議、市長選挙で、スローガンとなったのが「プレハブ解消」で、市とはいえ、先進市との格差は歴然でした。

（３）これからのよもやまばなし

84 狭山丘陵の古狸往生記（184）

よもやまばなし「84 狭山丘陵の古狸往生記（184）」は蔵敷で養鶏を営む農家の鶏が毎晩、一羽づついなくなり、その犯人は狭山丘陵の古狸であった、という話です。大和町が東大和市になった翌年の昭和 46 年の出来事でした。

「東大和のよもやまばなし」は、この年で終わっています。これからは、残されたよもやまばなしを採録するとともに、新しい四方山話をつくることになります。心に残るようなお話を集めたり、創り出したいものです。

索引

(「東大和のよもやまばなし」の表題でひけます)

[あ]	
愛染様	16,86,92,96,113
赤っ風	91,171
あぼへぼ(粟穂稗穂)	86,91,92
雨乞い	36,37,38,48,86,91,92,109,114,136
[い]	
いかづちさま	41,46,47,65,71,72,151
石神の話	11,60,65,68,71,151
いたずらぎつね	79,151
いづみのまわり地蔵さん	76,100,101
[う]	
内堀部落の女堰	24,60,86,88,151
馬方勝っあん	24,151
[お]	
大山まいり	104,109,130,135,136,147,148
おこりぼとけ	63,71,73
おしゃぶき様	36,76,119
おっぴらき	104
お月見	120,122
鬼の宿	120,122
おみたらし	36,38,119
親分とバクチの話	41,91,123
[か]	
笠森稻荷	26,79,102,103,139
鹿島さまの要石	1,41,44,50,51
鹿島さまの櫓	41,44,64,123
かたき討の話	36,41,44,45,98
からす二題	36,86,88,123,125,126
川端稻荷大明神	31,35,76,82,83,84,86,88,102,103,112
関東大震災とやきもち	160
楽隊(明治時代)	8,26,130,135,137
[き]	
きつねの恩返し	8,12,41,60,80,151
きつねの嫁入り	4,41,150,151
きつねの嫁どり	4,41,150,151
行人塚	24,25,90
[く]	
くずっぱ	86,87,88
[け]	
櫓のめざまし	26,64
芸者にばけた狐	4,77,78,80
[こ]	
こさ池とかゆ塚	21,22,24,25,65,70,71,88,151
子供みこしのこと	36,37,148
こぜさん	86,91,97,129
[さ]	
桜	141,163

狭山丘陵の古狸往生記	1,7,36,177,178
三光院の鐘	8,12,55,65,73,74
三本足のきつね	41,150
三本杉	36,88,123,125,126
賛報会館と映画館	6,164,168
ザンザラ	16,31,41,91,129
[し]	
塩釜講	28,104,109
しし穴の話	16,36,38,55,114,118
清水の伝兵衛地蔵さん	100,101
清水囃子のけいこ	8,21,60,104,123,129,151
自転車	130,148,163,167
砂利穴	141
[せ]	
千社まいり	167
[た]	
高木の塩釜様	26,28
高木の獅子舞	26,147,148
高木のまんじつ鉦	26,29,60,137,141
たっちゃん池	60,86,88,156
食べ物を運んでくれた天狗	41,123,130
多摩湖の花火	8,156,158,160
[ち]	
力石	16,36,37,38,41,44,104,151
貯水槽になった弁天池	36,38,39,88
[つ]	
つけ木の受取りメモ	149,150
辻しょうげ	8,14,120,121
土の中から出た表忠碑	7,31,177
槌頭(つちんど)	41,45,49
つつじの頃	97
[て]	
でいだらの井戸	50,52,53
出ば出ろ	8,12,13,55,60,114,115,151
[と]	
藤兵衛さんと狼	41,46,47,55,107,151,158
戸隠講	60,104,108,114
泥棒の話	77,79,81,91
[な]	
南街のブラスバンド	6,147,164,168,169,170
[に]	
仁王さまと名物だんご	119
西山の夜泣きさま	26,102
[ね]	
ねずみ沢のかっぱ	36,88,123
[の]	
乗合バス	41,163
[は]	
ハイヤーの話	163
機場あそび	86,92,96

はだか参り	146
歯をとぎに来たむじな	26,31,33
ばばあのおふところ	36,55,60
[ひ]	
日立だんたと日立乞食	6,164,171,173,175
火伏せの神様	26,28,120,121
雹の話	91,130
比翼塚	26,29,123,130,132,137,138,142
火をふところに入れた法印さん	86,97,98,111,114,115,157
[ふ]	
ぶんさんのはなし	24,104,108,123,130,151
[ほ]	
ほうそうの話	102,104,119
ほっぼきの話	41,104,112
ぼろっ籠	86,87,88
[ま]	
松っこごれ地藏	26,100
[み]	
三日の正月	24,91,92,151
耳んだれさま	41,44,119
民間療法とおまじない	120
[む]	
昔のお産	110
昔の学校と子供たち	16,130,142,143
娘っこに化けた狐	12,167
村の運動会	5,16,26,147,148
村山絋	41,76,86,92,95,146,151
[め]	
メリケン袋物語	147,149
[や]	
野外映画	8,157,158
厄神さま	8,14,120,121,122
弥五右エ門さんの井戸	123,129,130,139
山うなぎの蒲焼きとステッキ	172
[わ]	
綿入れ着ても無理だった	5,26,154,156